欝の音のアイリス

ここにロボットの残骸がある。『彼女』 の名は、アイリス。正式登録名称:アイ リス・レイン・アンヴレラ。ロボット研 究者・アンヴレラ博士のもとにいた家政 婦ロボットであった。

主人から家族同然に愛され、不自由な く募らしていたはずの彼女が、何故この ような姿になってしまったのか。これは 彼女の精神回路から取り出したデータ を再構築した情報――彼女が見、聴き、 感じたことの……そして願っていたこと の、全てである。

第17回電撃小説大賞4次選考作。心に 懸く機械仕掛けの物語を、あなたに。





















松山剛

東京都出身。競会にしているノラ猫に「あっち向いて ホイ」をやろうとしたら、いきなりガリッと引っ扱か れました。「おまえと遊んでるヒマはないニャ!」と 言われたような気がしました。ショックでした。

[電撃文庫作品] 雨の日のアイリス

イラスト:ヒラサト

東京の殴ってでお菓子作りとかゲームとかしつつ、お絵様き してる毎日。最近新しい家族が増えました。オープンレンジ です。ところでジャガイモって爆発するんですね。死ぬほど ビビりました。

雨の日のアイリス





松山 剛 TARSER MATSHAM 1921-0-1-3-4-1











フラウは思いました。

自分は今まで、本当に

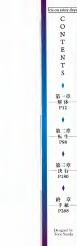
ダークの役に立ってきたのだろうか、と。

それから、こうも考えました。 ダークの役に立てなくなったら、

自分はどう生きていけばいいのだろう」

ダークに仕えるフラウ・スノウの独自より「三流魔神ウェザー・ゲーク」





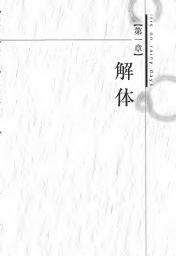


TAKESBI MATSULAMA

イラスト・ヒラサト



HRM021‐aの精・神・回・路データを再構成したものである。 この記録は、オーヴァル大学第一ロボティクス研究所のラルフ・シエル実験助手によって、 主人に愛されて幸せに暮らしていた。 にだらしなくはみ出ている。 っている。下半身はちぎれていてそもそも存在せず、腹部からは体内のチューブが臓物のよう ここにロボットの残骸がある。 それがこのロボットの名前である。 HRMO21 - α、登録呼称アイリス・レイン・アンヴレラ。 その左腕は肩の部分からごっそりとなくなっており、残った右腕も関節があらぬ方向に曲が 一見するとただのスクラップとしか思えないこのロボットだが、かつては人間の家で働き、





【七日前】

たえて人々を静かに見守っている。 ヴィーナス噴水広場の中央には、美しい女神像が立っている。 すらりと長い手足に、絹のように白い肌、そして豊かな胸。彼女は今日も穏やかな微笑をたった。

髪を語らう恋人たち。絵に描いたような平和な光景だ。 かせており、周囲に配置された渋い茶色のベンチには、談笑するお年寄り、はしゃぎ回る子供、 ちょうどーメートル七十センチの女神像の足元では、噴水がいくつもの流 麗な虹の花を咲

――やっぱり、似ている。

けは無傷で焼け残った。それ以来、女神像は希望と復興の象 徴として、今でも国の最重要文化

かつてオーヴァル市に戦火が及んだ際、街の大半が焦土と化す中で、奇跡的にこの女神像だ

財として保護されている。

アンヴレラ博士。背が高くて、長い黒髪が美しくて、薄い銀縁の眼鏡が似合っている、僕の自女神像は「博士」に似ている。僕の博士――ロボット研究の第一人者、ウェンディ・フォウ・ 点を合わせて、小さく息を吐く。 ジジッとかすかな音を立てて、僕は視覚装置の瞳孔機能を調節した。正面の白い女神像に焦

博士の麗しい姿を思い出しながらうっとりと女神像を見つめていると、リングシガレットの

「オーヴァル・タイムス」を読みながら、さっきから僕をちらちらと盗み見ている。僕がにっ 甘酸っぱい香りが漂ってきた。僕は首の角度を変えて香りの元を確認する。 隣のベンチでシガレットを吹かしていたのは、紺色の背広を着た中年の男性だった。今朝の

ていて、大きさは親指と人差し指でわっかを作った程度。吸うときはくるりと丸まったシガレ こり微笑んで会釈をすると、彼は恥ずかしそうに視線をそらしてしまった。 ちなみにリングシガレットとは禁煙用品の一種だ。形状はその名のとおり『リング』になっ

ットをピンとまっすぐ伸ばして、先っぽに火を点ける。 そもそもは煙草をやめたい人が口寂しさを紛らわせるために吸う代用品だが、最近では煙と

香りを楽しむために吸う人も増えている。売れ筋は、わっかを二個くっつけた形の『8の字』 タイプのもの。『8』の形をしたシガレットを二つに切り離し、片方を吸い、片方を吸殻入れ

字リングシガレットだからだ。 なぜ僕がこんなに詳しいかというと、アンヴレラ博士が愛用しているのが、まさにこの8の

僕は改めて女神像に視線を移し、少々もの思いにふける。背が高くて博士そっくりの美しい

そんなささやかな疑問に頭を悩ませていると、時間になってしまった。

――アト五分デ、予定時刻ニ帰宅不能ニナリマス。

精 神 回 路の中で、無機質な電子音声が僕に帰宅を促す。

ぎっしり詰まっている。背中にはきらきら光る濃銀色のラビルフィッシュが丸々一匹くくりつ 広場を背にして、僕は足早に自宅へと向かう。右手の買い物カゴには今日の晩御飯の材料が 一さて、そろそろ帰らなきゃ。

今どきお使いをしている家庭用ロボットなんて珍しくもなんともないけど、僕の場合は博士が ットだわ」という声が聴覚装置にキャッチされると、僕はおしとやかに微笑んで会釈をする。 ンに似ている)を装備しているのがロボット、そうでないのが人間だ。「アンヴレラ邸のロボ たような願になる。 魚を背負っていれば、びっくりするのも当然か。だけど皆、僕がロボットだと分かると納得し けられているので、道行く人が驚いて振り返る。身長百五十センチの僕が全長一メートル強の 人間かロボットかを見分ける基準は簡単だ。耳元に丸い通信アンテナ(見た目はヘッドフォ

有名人なので街を歩くとけっこう注目を浴びる。 噴水広場から十分も歩くとアンヴレラ邸に到着。ツタの這った青色のアーチを見上げながら、また。

た」と発声する。「認証シマシタ。ドウゾ」と電子音声が響いて静かに門が開く。 僕は「認識番号HRMO21‐a、アイリス・レイン・アンヴレラです。ただいま戻りまし アンヴレラ邸はいわゆる豪邸だ。駅前広場が丸ごと三つは入りそうな庭と、行政官の庁舎に

勝るとも劣らぬ大邸宅。赤レンガ造りの外壁が名門アンヴレラ家の歴史と伝統を感じさせる。 邸宅に入ると、まず目につくのは豪勢な玄関ホール。シャンデリアが天窓から入る陽光で極

材や工具が並べられており、真っ白で、ちょっとひんやりしていて、冬の日の雪原みたいな空 彩色にきらめき、敷き詰められた絨毯はまるで古城のような風格だ。壁にはいくつもの巨大 ったところで一階の最も西側に位置する部屋――研究室に入る。この研究室にはぎっしりと機 な絵画が掛けられていて、これ一枚で一生遊んで暮らせるらしい。 木目がつややかに光る階段を横目に通り過ぎ、まずは冷蔵室に寄って魚を下ろす。身軽にな

には余裕があるけれど、帰宅時にはバッテリーを満タンまで充 電するべし、というのが博士 バッテリー残量八二・五〇パーセント、体内老廃物一・七三パーセント。まだまだ稼働時間 壁際にある乳白色のベッドに腰かけて、僕は自分のメーターを確認する。

させる。このへんの手順を間違うと真っ黒な機械油を部屋中に撒き散らすことになるので、ち の命令だ。だから僕はすみやかにバッテリー充電を始める。 細長いチューブの先端を薬用液で二度殺菌したあと、手首の鍵を開けて連結ユニットを露出

結ユニットにゆっくりと電力と補充 潤 滑油が流れ込む。同時に左の手首からは茶色っぽい廃 右手と左手、順々にチューブを差し込む。それから機械のスイッチを入れる。右の手首の連

液と老廃物が吸い出されていく。 ロボット工学の一般向けパンフレットでは、人間でいうと『点滴』に近いシステムと説明さ

かれた天井には姿見のごとく僕の全身が映っている。 れる。実際には排泄と体内清掃も同時に行う装置なので、点滴というよりは『人工透析』に近れる。実際には排泄と体内清掃も同時に行う装置なので、点滴というよりは『人工透析』 僕は仰向けに横たわってバッテリー充電をしながら、天井の金属板を眺める。鏡のように磨

に、スカイブルーの臓"。まつげの一本一本まで下敷に作られた目元。聚色の髪はわずかにウェロボットだから厳密には性別はないが、僕は一応『女の子』だ。安齢設定は十五歳。白い梶 い。博士がかわいいと言ってくれるから、僕もそう思っているだけかもしれない。 顔も博士に似てそこそこ美人――だと自分では認識しているけど、これは客観的な意見ではな ーブがかかっており、肩に少しだけ触れる程度の長さ。手足が長いところは博士に似ているし、

がキュッと細く絞り込まれており、スカートはふんわりと広がっていて見る者にウェディング ワイトブリム。エプロンは乳房の丸みを強調するデザイン。桃色のワンピースはウエスト部分 そして着ているのはメイド服。とてもメルヘンチックなデザインだ。頭にはひらひらしたホ

ドレスを想起させる。こんな派手なメイド服を博士はいったいどこで買ってくるのか。それは 十二分四十一秒後、バッテリー充電が完了する。バッテリー残量九九・九三パーセント、体

内老廃物○・○二パーセント。 もたくさんあるが、結局いつも左端の同じ場所で調理している。博士はお金持ちなのだから料 をさっさと済ませてしまおう。 僕はベッドから飛び上がるように体を起こし、研究室を出る。向かうは調理室。夕食の支度 高級レストラン顔負けの広大な調理室で、ビル・ラビル鍋を作り始める。鍋も水道もガス台 ---よし、規定値クリア。

なく使用人は誰も雇わないので、この広いアンヴレラ邸を僕はたった一人で切り盛りしている。 理人の十人や二十人雇えばいいのに、今まで誰ひとり雇った例はない。というか料理人だけで

炊事・洗濯・掃除・その他もろもろの家事で八面六臂の大活躍だ。

ラビルをザクザクと包丁でさばき、桃色の切り身を手で軽く持ち上げる。

──二〇〇・〇〇二五グラム。こんなもんかな。

も昔、ビルという漁師さんが一本釣りした巨大ラビルを一晩でペロリと平らげたらしい。そ ちなみに『ラビル』はサーモンに似た赤身の魚だけど、『ビル』は人名から来ている。なんで

精 神 回 路から検索したレシピどおりに、僕は着々とビル・ラビル鍋の下ごしらえを進める。

のときの料理法がラビルをブツ切りにしてありあわせの調味料といっしょに煮込んだ――とい るにはわりとコツがいる。火加減は微妙な調整が必要だし、灰汁をすくい続けるのもなかなか うのがビル・ラビル鍋の起源だ。こう聞くとなんだかひどく大ざっぱな料理だが、おいしく作

根気のいる作業だ。 最初に包丁を入れてから二十七分十二秒で所定の作業が完了。余った食材は冷凍庫に運び入

そんなことをプツブツぼやいていると、頭の中で電子音声が響いた。

食材の購入量といい、このだだっぴろい調理室といい、わがアンヴレラ邸はどうにも無駄が多 れて保存。博士は滅多に知人を招かないので、どうやら当分は冷凍庫の肥やしになりそうだ。

――ウェンディ・フォウ・アンヴレラ博士、ゴ帰宅デス。

僕は飛び跳ねるように調理室を出て、玄関ホールを抜け、ドアを勢いよく開いて外に出る。

外套をまとった化粧っ気がないけど美しいお顔の女性――僕の博士がゆっくりと歩いてくる。 スカートを翻しながら前庭を一直線に駆け抜ける。 青いアーチをくぐってきたのは、すらりと高い背、長い黒髪、そして白鳥のような軽やかな

そっと僕に手を振ってくれる。

```
体は嫦鉱炉みたいに熱を帯びてカッカと燃えている。精神(可路では博士の映像がぐるぐるとどのタイムで走り、博士の三メートル手前で急ブレーキ。汗もかかないし、息も切れないが、
                                                                              僕はパッテリー消費をまったくいとわず博士に向かって全力疾走する。百メートルを九秒ほ
```

「お帰りなさいませ、博士!」

だ。甘酸っぱい香りが僕の嗅覚装置をくすぐる。 ところなく表現する 博士は僕を見ると優しく微笑み、口元のリングシガレットの火を消して吸殻入れに放り込ん。 僕は両腕を広げて満面の笑みで博士を迎える。オーバーアクションであふれる愛情をあます

眼鏡が博士の理知的な顔だちをさらに引き立たせている。 「はい! 博士のアイリスは今日も超・超・いい子にしてました!」

「ただいま、アイリス。今日もいい子にしてた?」

女性にしてはちょっと低めの、クールで落ち着いたトーンの声。やや鼻の頭にずれた銀縁の

「そう。晩御飯は?」

博士が僕に右手を伸ばす。

「お言いつけどおり、ビル・ラビル鍋です!」

---来るぞ、来るぞ!

博士の手が、そっと、僕の頭に触れる。栗色の髪の毛をわしゃわしゃと、優しく、でもちょ 僕はうずうずしながら、この瞬間を待つ。

っとだけ乱暴に撫でる。 僕は首筋を触られた子猫みたいに喉をゴロゴロ鳴らしながら、博士の柔らかい手の感触と、

0

鼻腔をくすぐるシガレットの甘酸っぱい香りを存分に楽しんだ。

夕食の時間は僕にとって緊張の一瞬だ。 博士がゆっくりとラビルの切り身を鍋からすくう。その切り身がさらにナイフで切り分けら

れ、フォークで突き刺され、博士の薔薇色の唇に吸い込まれていく。 咀嚼に合わせて博士の頰がわずかに動く。僕は若干危ない目つきでじっとその様子を見守る。

僕は内心で質問を繰り返しながら、傍らに控えて博士の感想を待つ。――博士、どうですか?」おいしい?」ねえ、おいしい?

「うーん……」

アンヴレラにとって、『料理がまずい』というのは存在意義を問われる一大事だ。 「あのあのあの、なななな何か不手際が?」 僕は軽い目まいを覚えながら早口で尋ねる。家事万能を矜持とするこのアイリス・レイン・ 博士が首をひねる。途端に僕は精神 回 路が冷える。人間でいうと背筋が寒くなる感じ。

「はっきり言うと……」 博士は形のよい眉を片方だけ上げて、あからさまに不機嫌そうな声を出した。

|とってもおいしいわ 「は、はっきり言うと?」僕は頬をびくびくさせながら次の言葉を待つ。 すると、博士はかすかに口の端を上げて微笑み、出し抜けにこう言った。

「あ……えっ? だって、お口に合わなかったんじゃ……?」 僕はびっくりして 一……へ?」と間の抜けた声を出す。

はいつも引っかかる。ちなみに今ので通算二十四回目。ロボットの悲しい性分で、こんなどう 「……おや、どうしたのかねアイリス君? 鳩が豆鉄砲を食らったような顔して?」 「ううん、とってもおいしいわ。特に火加減が絶妙ね」 博士は基本、Sなのだ。SMでいうS。サディスト。この単純かついじわるなトラップに僕

でもいいデータまでついついカウントしてしまう。

「もう、博士っ! そういうジョークはやめてくださいって言ってるでしょ!」 僕はムキになって博士に紙ナプキンを投げつける。

もりですか!」 『それを言ったら今日のラビル鍋のほうがもったいないです! 丸々一匹仕入れてどうするつ 「こらこら。ナプキンがもったいないでしょ」

と紙ナプキンの最後の一個を丸めて投げつける。ポコリと博士の腕に当たる。 博士は「そのうち食べるわ」と気のない返事をして、食事を再開する。僕は「嘘ばっかり……」

「うん、やっぱりおいしい。アイリスは本当に料理が上手ね」 夕食が終わると博士はシャワールームに行った。僕は食器をかたづけながら博士との他愛な 博士はわざとらしい感想を言いながらラビルの切り身を口に運ぶ。僕はあきれた顔をしつつ おいしそうに食事をする博士の横顔を見て、内心ちょっと満足する。

いやりとりを思い出し、クスリと笑ったり、ムッとしたり、またウフフと気味の悪い笑みを浮 今日も博士はきれいで、いじわるで、優しくて、僕を撫でてくれた。

静かな夜は少しずつ過ぎ、やがて就寝の時間となる。僕はお気に入りの花柄模様のパジャマ ――うん、満足。ここまで申し分なし



に着替えたあと、博士の寝室をノックする。

な香りが紫煙といっしょに漂う。テレビCMでは『初恋の香り』というキャッチフレーズが定 着しており、僕もそのとおりだと思う。そう、僕にとってはまさしくこれが初恋の香りだ。博 で横になっていた。その唇にはリングシガレット。甘酸っぱくて少しハッカが混じった爽やか 「博士、失礼します」 部屋に入ると、博士は胸元が大きく開いたいつものワインレッドのパジャマを着て、ベッド

無駄だと知りつつも、一応は注意する。

士との燃えるような恋愛――といきたいところだが、熱っぽいのは僕だけで博士はたいがいク

「サユ、ベッドでの映煙はお行 懐悪いですよ」
「学士、ベッドでの映煙はお行 懐悪いですよ」
「火災の危険もあります」
「火災の危険もあります」

ットの略称だ。 博士は天井を向いたままシガレットを吹かし続ける。ちなみに『リンシガ』はリングシガレ

「統計上は国内で年間八件も報告されていますよ?」 僕は負けじと博士の視界に入り、上から覗き込む。目にちょっと煙が入る。

「オーヴァル市内では何件?」と、博士は紫煙をくゆらせ続ける。 「それなら大丈夫」 ……ゼロ件です

と博士は体を起こして僕のほうに腕を伸ばす。 「お断りします~!」 「理屈になってませんよ、博士」 少し意地になった僕は、博士の口からリングシガレットを取り上げる。「あ、返しなさい!」

る。博士もベッドから体を起こし、僕を追いかけ始める。椅子やテーブルを挟んで、僕は博士 さっきの夕食でからかわれたお返しとばかりに、僕はシガレットを持ったまま室内を逃げ回

る。博士は眼鏡をしても美人だし、眼鏡をしていなくても美人だ。 をはずした。切れ長で、ステンドグラスのような深みのある、美しい琥珀色の瞳が僕を見つめ に捕まらないように問合いを取る。子供みたいだけど、これがたまらなく楽しい。 室内を二周半だけした短い鬼ごっこが終わると、博士は「そろそろ寝ようか」と銀縁の眼鏡

ヴィーナス噴水広場の女神像。博士に似ている、あの美しい女神像。何かが足りないと思っ そこで僕は昼間の疑問を思い出した。

たらやっと分かった。

眼鏡と……それにシガレットが似合いますね」と素直に思っていることを口にした。 「どうしたの?」とベッドから博士が僕を見る。僕は首を少しだけ傾けて「博士にはやっぱり、 女神像は眼鏡をかけていない。

「いえ、こっちの話です。……では博士、よろしいですか?」 「は? 何よ急に」

これは、博士のお布団に入ってもいいですか、という意味だ。

に潜り込む。それから体を丸めて上目遣いで博士を見つめる。 手のひら一つ分の至近距離で、博士の琥珀色の瞳が僕を映し出す。 博士が掛け布団を持ち上げて僕を招く。「失礼します」と言って、僕はおずおずと博士の横

とれでこにそっとキスをしてくれた。 博士はそんな僕を優しく抱きしめ、髪の毛を撫でてくれる。そして「おやすみ、アイリス」 僕は博士の柔らかくて大きな胸に顔をうずめる。とってもふかふかで、いい匂いがする。

「博士、おやすみなさい」

僕はモードをスリープに切り替えて、まどろみの世界に入る。

今日も僕の幸せな一日が終わる。

[天日前]

特大ラビルを背負っていたが、今日は茶色い牛の脚と白い長ネギを背中に突き刺している。牛 「毎度あり!」 いつものお肉屋さんの元気な声を背中に受けて、僕はアンヴレラ邸への帰途につく。昨日は

のオーヴァル風ビーフスープ。 レラ邸の晩御飯のメニューは街の人に筒抜けだ。昨晩はビル・ラビル鍋、今晩はネギたっぷり とネギの二刀流だ。 ここオーヴァル市は運河に囲まれた風光明媚な街で、空から見下ろすと楕円形をしている。 角を曲がってヴィーナス噴水広場を通り過ぎると、商店街のメインストリートに入る。 道行く人の注目を一身に集めながら、僕はずんずんと前に進む。考えてみれば、わがアンヴ

ロボットに寛容だ。少なくともバスや飲食店で『ロボットお断り』なんて保守的な貼り紙は見 ーヴァル大学第一ロボティクス研究所』はこの街で一番高い建物だ。 の隅々まで整備されており、人口も観光客も増加傾向にある。ちなみに博士の職場である『オ このロボット研究所が街の観光名所になっているくらいなので、オーヴァルの住民はわりと

かつては水はけの悪い土地として水害に悩まされたこともあったが、今は排水溝や下水道が街

さっきからずっと「ほら、あの女性博士のところの」「まったく、いやらしいわねえ……」と かけない。でもそんな街の人々も全員が全員ロボットに好意的というわけにはいかないようで、

近所のおばさんたちの噂 話が僕の耳に入ってくる。別に盗み聞きをしているわけではないけ は――ロボット研究の第一人者ウェンディ・フォウ・アンヴレラは同性愛者で、しかも少女型 い。だけど世間は噂好きで、噂には尾ひれがつきやすい。流れている噂で最も悪意のあるもの HRMO21-aである。お仕事は家事全般、あとは博士の話相手。それ以上でも以下でもな れど、機能上、近くの音声は自動感知してしまうのだ。 まず断っておくと、僕は博士によって造られた一般家庭用の家事補助型ロボット・認識番号

何体もそういうロボットを買い漁って『擬似ハーレム』を造る人もいる。 できないし、その分野の売り上げもロボット産業をかなりの部分で支えている。お金持ちには 独身で、言い寄る男をすべて蹴散らしているからこんな噂が立つのだろうか。 実際、女性型ロボットを『そういう使途』に用いるユーザーは少なからずいる。それは否定

ロボットしか愛せないロボット偏愛症だ――というゴシップもいいところの怪情報だ。博士が

えしてきた僕が断言できる。 博士は僕に性的な役割を求めてはいない。それは開発されてから三年間、ずっとそばでお仕

博士が僕を造ったのは、事故で『妹さん』を亡くしたからだ。

同じ意味で、本物そっくりに造られたニセモノなのだ。博士が僕のことをその琥珀色の瞳に映 士はずっと妹さんの死に責任を感じてきた。事故以来、アンヴレラ邸に自動車はない。 さんだけが亡くなった。事故の原因は明らかに向こうのトラックにあったが、運転していた博 すとき、それは僕を見ているんじゃない。僕の中の妹さんの面影を見ているんだ。 んを、博士は突然失ったのだ。 イの途中で、どういうわけか中央分離帯を越えてきたトラックに正面 衝 突され、助手席の妹 姉妹は旅行に出かけた。車を運転していたのは博士だった。そして、目的地に向かうハイウェ だから僕は妹さんの『代用品』である。それはリングシガレットが煙草の代用品であるのと アイリス・レイン・アンヴレラ。それが亡くなった妹さんの名前――そして僕の名前だ。 でも僕はそれでいいと思っている。博士は僕をとても大事にしてくれるし、遊びに行きたい 元々、早くに両親を亡くし、ずっと姉妹二人だけで生きてきた。その唯一の肉親である妹さ 四年前の秋のことだった。その日、久しぶりの休 暇をいっしょに過ごそうと、アンヴレラ

以上何かを望むのは贅沢というものだ。 とか欲しいものがあるとか、たいていのお願いは聞いてくれる。それに、何より優しい。これ

け胸の奥が痛むことがあるけど、それだってもう慣れっこだ。 時々――本当に時々だよ――柔らかい薔薇のトゲを押し当てたように、ほんのちょっぴりだ

37

その日は夕食が終わると、週に一度のメンテナンスの時間になった。

に顔をそらす。 「始めるわよー」 白衣を着た博士が研究室に入ってくる。その手には分厚い書類。それを見て僕はやや不満げ

メンテナンスの時間はちょっと苦手なのだ。

調べる簡易テストだ。 を当てる。これは別に死亡確認をしているわけではなく、瞳孔収縮システムに異常がないかを 「動かないでね」 さっそく博士はポケットからペンライトを取り出し、カチリとスイッチを入れて僕の目に光

目の前ですばやく出し入れをした。僕は「星、十字、りんご、白紙」と見えた図案をてきばき と答える 次に博士はカードを取り出し、まるで手品師のごとく大げさなシャッフルをしたあと、僕の

動体視力機能も正常のようだ。「ご名答」

```
文書だ。一般家庭のロボットの場合、半年に一度の定期検査が法律的に義務づけられている。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          じまじと口腔内を確認する。思わず「ほえ、ほえほえ」と僕の口から変な声が出る。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 このへんからちょっと恥ずかしくなる。博士は白い手袋をはめた指先で僕の口を押し広げ、ま
                                                                                                                まずは顔ね」
                                                                                                                                                                                                                                                            「次は体表検査ね」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           「異常なし、と」
穴が開きそうなほどの熱視線で、博士は僕の顔をじいっと見つめる。深みのある琥珀色の瞳
                                                                             博士は僕の頬を両手で包み込み、ぐいっと引き寄せる。
                                                                                                                                                   服を脱がないといけない。
                                                                                                                                                                                      これは文字どおり皮膚の表面を調べる検査だ。つまり――
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  僕の場合は週に一回。最新型ロボットゆえに、いろいろと小まめなチェックが必要なんだそ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        博士は手元のシートにすばやく検査結果を書き込む。これはあとで行政当局に提出する公式
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                それから博士は「はい、アーンして」と幼児の相手をする看護婦さんみたいな声を出した。
                                          | bb!
                                                                                                                                                                                                                         - 来たー! 体表検査!
```

34 ドキドキしながらじっとしている。動いたら顔と顔がくっつきそうだ。 「ふーむ……」博士は真剣な表情で舐めるように僕の顔を観察していく。僕は体を硬くして、

げに「じゃあ、服を脱いで」と言った。 「顔面は異常なしね」博士は手元のシートにさらさらと検査結果を記入する。そしてこともな

「は、はい……!」 僕は緊張したまま、まず靴下を脱いで脱衣カゴに放り込む。続いてヘッドドレス、エプロン、

い。むしろ体が火照って熱いくらいだ。 ワンピースも脱ぐと、僕が身につけているのはブラジャーとショーツだけになった。寒くはな

博士が僕の服を脱がすのは、別にエッチな趣味からではない。体表検査は人工皮膚の表面に

外傷や変色がないかを調べる、れっきとした視認検査だ。顔から始まり、首元、肩、腕、腹、

----あ····-ふう。

背中と全身くまなく博士は真剣な目つきでチェックする。

人工皮膚が博士の吐息を感知するたびに、僕は背筋がぞくりとする。かれこれ三年も毎週や

っていることなのに、いまだに慣れない。 「はい、ブラもはずして」

ウウ……

どうしたの?」

小さくもない。柔らかさも形状も年頃の少女のそれを完璧に再現している、と博士は言う。僕 の場合、設定上は博士の妹さんを基に造られているので、妹さんがこのくらいだった、という 引くだけだ。 「はい、下も脱いで」 僕はショーツに指をかけ、ためらいがちに下ろしていく。正直、恥ずかしさで今にも卒倒し 博士は眼鏡をはずし、確認がいっそう念入りになる。僕は恥ずかしさのあまり顔から火が出 薄い水色のプラジャーをはずすと、僕の白い胸があらわになる。そんなに大きくもないが、 僕は観念して「いえ……なんでもないです」と背中に手を回す。ここで嫌がっても検査が長 博士はシートに結果を書き込みながら、淡々と指示を続ける。

認を始める。吐息が当たるし、博士の前髪もさわさわと下腹部に触れるし、誰かが見たら絶対

さっそく博士は、膝を曲げて僕の前にしゃがみ込む。そして『前』も『後ろ』も念入りに確

どれどれ……

ショーツを脱ぎ終わると、僕は一糸まとわぬ姿になった。

36 に誤解される。

「また、例のアザですか?」 淡々としていた博士の声が、少し硬くなる。どうやら『アレ』が見つかったらしい。

それからアザがあると思われる位置を指先でなぞった。僕はくすぐったくて少し身をよじる。 僕が尋ねると、博士は検査を続けたまま、「そう。お尻の右側に、ほんの少しね」と答えた。

なアザが見つかる。場所はいろいろで、時には顔に出ることもある。最初のころはびっくりし 「直径一・五センチ、薄い紫 色……と」 博士は発見したアザの特徴を手元のシートに書き込む。僕の体はどういうわけか、時々小さ

「直りますか?」 たが、今はすっかり慣れてしまった。

分離クリーニングと呼ばれる修理方法で、平たくいうと人工皮膚の『シミ抜き』だ。 博士はペンライトをさらに細くしたような器具を取り出し、僕のお尻に当てる。これは光学

き、ブラをつける。今日はアザが小さくてよかった。大きかったらいつまでも全裸で立ってな 「はい、終わったわ」 博士はパン、と僕のお尻を叩く。僕はお尻をちょっとさすったあと、すばやくショーツを穿

「ちょっと休憩ね」 そう言い残して博士は研究室から出ていく。ここは禁煙なのでリングシガレットを廊下で吸

博士の名誉のために一言説明しておくと、今みたいに専門機関ではなく博士自らが僕の検査 やっと体表検査が終わり、僕は安堵のため息をつく。

って出てくれたのだ。うるさい役所との交渉も面倒な申請手続きもすべてこなして。だから僕博士もそれを知っているからこそ、ロボット整備士の資格を生かして僕のメンテナンスを買 数の男性整備士(!)の前で裸体をさらさなければいけなくなる。想像しただけでも恐ろしい。 庭用ロボットと同様に専門機関で所定のメンテナンスを受けなければならない。そうなると多 をするのには、それなりの理由がある。もし僕がこの定期メンテナンスを拒否すれば、他の家

手の検査書類が机上にはまだまだ山と積まれており、精神 回 路スキャンや、動作制御確認、 五分ほどで研究室に戻ってきた博士は、椅子に腰かけると「さて」と腕まくりをした。この ――それは分かっているんだけれど。 がこうしていられるのも博士のおかげなのである。

安全 回路のチェックと延々続く。 僕は暗澹たる気分を抱えたまま、注射器を持ったお医者さんに対する子供のようにうらめし

38 げに博士を見つめる。

様言葉でこちらを見た。その口元はちょっと笑っている。 - すると僕の視線に気づいた博士が「おやアイリスさん、何かご意見がおあり?」と妙なお嬢

「なんでもございません!」

て家事はパッパとやってしまわないと気がすまないのだ。 僕はいつものように掃除や洗濯をかたづけ、午後の時間を持て余していた。僕の性格からし 僕はプイッと顔を背けた。 メンテナンスを受けた翌日。 五日前

しさて

リモコンが内蔵してあれば便利なのだが、あいにくそんな機能はない。博士いわく「そういう 「えーと、リモコン、リモコンは……」 僕は「あった」とテーブル上のリモコンを手に取り、寝転がってテレビをつける。僕の体に 博士の帰宅予定時刻まであと四時間十二分もある。

余計なものをつけるとメンテナンスが面倒」だとか。

の軍事情勢、そしてどこかの殺人事件。僕は女性ニュースキャスターの流 暢な口元をぼんや りと眺める。 大迫力の巨大スクリーンでは今日のニュースが流れ始める。中央政界のゴタゴタ、北方戦線

件がありました一 いくが、僕の好きな料理番組やバラエティ番組はやっていない。 「今日午後一時ごろ、オーヴァル駅前のヴィーナス噴水広場にて、ロボットが突然暴れ出す事 ヴィーナス噴水広場は、博士そっくりのあの女神像が立っている場所だ。 仕方なくまたニュースに戻したところで、『それ』は飛び込んできた。 寝転がったままの姿勢でリモコンをカチカチやる。スクリーンの映像が次々に切り替わって ―ーラーん、つまんないなあ。

通報を受けた警察が出動し、鎮圧した。 上げて暴れ始めた。ロボットは店舗の壁を殴打して破壊、それから噴水広場に移動。その後、 ニュースはこうだった。付近の中古品販売店で作業中の大型ロボットが、なぜか急に大声を

「ではそのときの映像をごらんください」 監視カメラの映像だろうか。画面の中では灰色の寸胴なロボットが太い両腕を振り回して暴き。 キャスターの合図で画面が切り替わる。

れていた。お店の壁をひたすらにガンガンと殴りつけている。その姿は青春映画に出てくる血

気盛んな若者みたいでどこか人間くさい。大きくて広い背中にはよく見ると稲妻のような傷痕。 があった。

やがて、そのロボットはのしのしと広場のほうに向かって歩いていった。

――ああ、ダメ。

後では、噴水だけがしゃわしゃわと規則正しいリズムで動き、小さな虹の花を咲かせ続けてい を語らっていた恋人たちも一目散に逃げ出す。 でいく。当然、あたりは大騒ぎになり、談笑していたお年寄りもはしゃぎ回っていた子供も愛 僕は心の中で祈る。 人間たちがいなくなると、ロボットは一人ぼっちになった。呆けたように立ち尽くす彼の背 しかしそんな願いが届くはずもなく、ロボットは人間たちのたくさんいる広場へと踏み込ん ――そっちに行ってはダメ。

る。一見するとどこか平和な光景にも思えた。

ロボットの体に、蛍が何匹も止まったような青い光点が映った。ロボットが緩慢な動きで顎

の分厚い金属製の皮膚を貫通し、噴水に到達するとマグマのごとく激しい水蒸気の炎を噴き上 を引いて光点を見下ろした直後、一条の青いレーザーが宙を切り裂いた。レーザーはロボット

警察の熱線銃だ。

に膨れ上がり、残酷な花火となって爆裂する。 うと身をかがめたときには第三射が命中。伸ばした左腕は青い光に包まれてガラス細工のよう の右腕が肩からざっくりと切断される。ゴトンッと路面に落ちた己の右腕を、ロボットが拾お

続けざまに第二射。ゴウッと低いうなり声を上げてレーザーが空中をほとばしり、ロボット

すかさず第四射がロボットの右脚を奪い去り、バランスを崩したところに第五射、第六射、

――ああ、もうやめて、もう見たくない!

人ばかり、現場に駆け寄ってきた。全身を銀色に装甲した『ジャンクヤード・フォース』と呼 半分に割れた顔がロボットの体で一番大きな破片になっていた。 完膚なきまでに、とはこういうことをいうのだろう。最初の攻撃からほんの三十秒後には、続。 ロボットが完全に沈黙すると、頭に土管のような金属製ヘルメットをかぶった人間たちが五

首』を手に取り、戦利品のごとく空に高々と掲げた。すると生首からは血液のように黒い機械 長さは一メートル強――特殊部隊御用達の対ロボット兵器だ。 ばれる警察の特殊部隊だ。その手には先ほど使った熱戦銃。鋭角的なフォルムに、球形の弾倉、 バラバラになったロボットの回収作業が始まったときだった。彼らの一人が、ロボットの『生

油がボタボタと流れ落ち、道路にいくつもの染みを作った。

それを見た僕はひどく不愉快になった。喉の奥からこみ上げる吐き気と嫌悪感 映像はそこで途切れ、画面には再びニュースキャスターの顔が映った。キャスターは、オー

ヴァル市で今月三件目のロボット犯罪である、と伝えた。

自身が暴走して引き起こされる犯罪だ。実際に起こったロボット犯罪が、人間の命令によるも ロボット犯罪は二つに大別される。人間がロボットを道具として利用する犯罪と、ロボット ロボット犯罪。それはロボットが絡む犯罪の総称だ。

のか、整備不良による暴走かは、当局の捜査と『司法解体』によるまで分からない。

のへんの事後処理は家電製品の場合とさして変わらないが、ロボットの場合は一台あたりの単 的になされる。世論の反発に押されてロボットメーカーが製品回収に乗り出すこともある。こ したところも少なくない。 価が高級自動車並みだったりするのでメーカーにとっては大打撃だ。リコールを連発して倒産 ロボットの暴走事故は件数でいえば自動車事故の一パーセントにも満たないが、報道は大々

僕はテレビを消し、絨毯に大の字になって目をつむった。 見るんじゃなかった。

情報処理機能を休ませる効果がある。 ロボットでも気分を休めたいときには目を閉じる。視覚情報を遮断することは精神 回 路の

外ではいつの間にか雨が降り出していた。しとしとと雨音だけが室内に響く。

治安を乱したのだ。スクラップは仕方がない。 場に流れるか、ドロドロに熔かされて金属資源となるのだろう。突然暴れて、器物を損壊して 瞼の裏に、バラバラになったロボットの映像が浮かぶ。あのロボットは、いずれ中古部品市

どうして彼は、あんなに暴れたのだろう?僕の中に一つの疑問が残る。

四日前

僕はフリルつき

今日は博士とデート。といっても、映画を見て食事をするだけの半日デートだけど。 僕はフリルつきの白いワンピースを着て、鏡の前で入念に着こなしを確かめる。

階下から博士の声が聞こえる。「アイリス、そろそろ行くわよー」

「はーい、ただいま参ります!」

ので、無粋なお子様連中に「ロボットだ! あれ、ロボットだよ!」と言われないで済む。 僕は大声で返事をしながら麦藁帽子をかぶる。こうしていれば耳元の通信アンテナを隠せる

玄関の前には私服姿の博士が立っていた。 「僕はお出かけ前の最終チェックを済ませて、階段をドタドタと慌しく下りる。

くらいのかっこよさだ――という表現はちょっと変か。 が高くてスタイル抜群なのでとても見映えがする。白馬にまたがれば、きっと王子様に見える 博士は水色のワイシャツとグレーのジーンズという極めてシンプルな格好だったが、何せ背

ガレットケースに鎖をつないでペンダント状にしたものだ。この中に8の字型のリングシガレ その胸にはきらりと光る銀色のシガレットケース。これは博士のお気に入りで、楕円形のシ

ットがすっぽりと収まっている。 「博士、これ、どうでしょうか?」

僕はバレリーナのごとくひらりと一回転してみせる。ワンピースと麦藁帽子もふわりと風を

う……僕の精神回路内で博士の言葉が反響する。 とってもよく似合う……とってもよく似合う……とってもよく似合う……とってもよく似合 博士はまぶしそうに目を細めて「うん、とってもよく似合う」と言ってくれた。

ああ、この一言で今日の幸せは約束されたも同然だ。

「じゃあ、行こうか」 扉を開けると、歌でも歌い出したいような青い青い空が僕たちを祝福していた。 長い黒髪をなびかせて博士が歩き出す。僕は博士の横に並び、その手を握る。

駅前の映画館はずいぶんと混んでいた。

で街中でもよく見かける。飲食店のウェイトレスや夜間警備、企業の受付に土木工事。その使 ほとんどが労働用ロボットで、外見から察するにHRL004型だろうか。なんにしろかなり しまうと僕は人間かロボットか見分けがつかなくなるので、こういうときは不審に思われる。 労働用ロボットは家庭用ロボットよりも歴史が古い。当然、市場に出回っている数も多いの 受付でロボット証明書を出すと、係員がじろじろと僕を観察した。耳元のアンテナを隠して 今日はエレベーターが工事中らしく、映画館の入り口では作業員と何人もすれ違った。その

題視されている。ちなみに、無資格の者がロボットを改造したり組み立てたりするのは法律違 異なる中古パーツを無理やり合体させて再販売する廃品業者も増えており、その危険性から問 用分野は多岐に渡る。 よくある。工事現場で見かける少女型ロボットはたいていそういう出 自だ。近頃では、規格の 古くなった家庭用ロボットが、中古で売買されて労働用ロボットとして再利用されることも

```
反で、このへんは自動車を勝手に改造して走らせてはいけないのと似ている。
テーブルに置き、あと五分で上映時間だ。
                                      館内に入ると、僕と博士は後ろのほうの席に陣取った。ジュースとポップコーンを座席の小
```

「ゾンビの動きを解析することで、ロボットの動作制御理論の参考にするのよ」

「今日はどうしてホラー映画なんですか?」

若い女性二人だけでホラー映画を見るのはちょっと変な気がする。他の席は男女二人連れが

「ねえ博士」

「はあ……動作制御理論……」

意味ありげな笑みを口元に浮かべた。 博士はどんなときも研究熱心だ。「さすがですね」と僕が感心していると、博士はちょっと

「ううん、アイリスは素直ないい子ね」

「あれ、なんで笑ってるんです?」

「ところで博士。僕のリサーチでは『この出会いに運命を』は今シーズンで一番ヒットした感 何だか分からないけど褒められた。やった。

```
動の超大作ですよ。……せっかくですからそっちを見ませんか?」
                                                                                             そうですよ
                                                                                                                               そうだっけ?
                                                                                                                                                           「ウウ……僕がホラー映画苦手なの、知ってますよね?」
                                                                                                                                                                                          「それってシリーズ物でしょ? 一前作見でないとストーリーが分からないじゃない」
                                                                                                                                                                                                                                                        「客席に子供が多いからダメ。上映中に騒いだり泣いたりするし」
                                                                                                                                                                                                                                                                                「じゃ、じゃあ、怪 獣 映画ならどうです? 『怪獣大決戦ヴァニラ対ショコラ』とか」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      「どうせ下らない内容に決まってるわ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | いいじゃないですか、恋愛映画|
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    「だってそれ、恋愛映画でしょう?」
                                                                                                                                                                                                                         "じゃあこっちの『三流魔神ウェザー・ダーク』は?」
スクリーンには待ってましたとばかりにゾンビがわらわらと出てきた。
                               そしてブザーが鳴り、映画が始まった。
                                                              僕は頰を膨らませて拗ねる。そんな僕を見て博士はくすりと笑う。
```

「そこそこだったわね」

博士が満足げに感想を述べた。どうやらホラー映画の出来映えはお気に召したらしい。

「アイリス、大丈夫?」 対する僕は顔面蒼白の痙攣振動マシンと化していた。

う映画は!」 「だ、だだ、大丈夫じゃないですよ! ななな何ですか、あのズバーッと切れてドバーッとい

途中、恐怖のあまり何度も博士に抱きつこうとしたが、無情にも長い右腕が僕の顔面を押 ホラー映画というよりスプラッター映画だった。

僕は精神 回 路に刻まれた、噴き出す血液、飛び散る脳漿、蠢く内臓を振り払おうと頭を振り振った。 starter and the starter and t

し戻した。

る。もちろんそんなことをしてもデータは飛ばない。 「えー、ここで撮るんですか?」 「せっかくだから写真でも撮ろうか?」

博士は近くの係員を呼んでカメラを渡した。どうやらホラー映画『悪夢~腐臭のナイトメ

ア』の看板を背景に記念写真を撮るつもりらしかった。 「やめましょうよ、他のところで撮りましょうよ」

「こんなところで撮ったら呪われますよー」 「ダメよ。今日は映画に来たんだから映画館で撮らないと」

「なにその非科学的理由」 博士は僕の腕を力任せに引っ張り、看板の前で肩を抱き寄せる。

隊、敵前線基地を完全制圧』とある。 ーショット写真が出来上がった。 下半身がちぎれて内臓がいっぱい出たヤツとか、思い出すだけで身震いしてしまう。 かと描かれているゾンビ軍団が今にも看板から飛び出してきやしないかと気が気でない。特に はい、撮りまーす!」 博士はさっきから、売店で買った新聞を歩きながら読んでいる。一面には『新型ロボット部 帰り道、僕は博士と手をつないで並んで歩く。 近くのレストランで昼食を済ませ、それから三十分ほど商店街で夕食の買い物をすると、あ そんなわけで、顔面蒼白の引きつった笑顔の僕と、いたずらっぽい笑みを浮かべた博士のツ 係員の掛け声でシャッターが下りる。 体がぴったりくっついて、いつもなら最高に嬉しい瞬間なのだが、今の僕は背後にでかで

「大丈夫よ、アイリスと手をつないでいるから」「歩きながら読むのは危ないですよ、博士」



の当世ロボット考」 「だって、『オーヴァル・タイムス』のコラム欄、けっこう面白いのよ。カレン・クラウディ 広場から五十メートルほど離れた場所に、その店はあった。壁が崩れ、地面が陥没し、立ち 新聞片手の博士をぐいぐい引っ張りながら進んでいると、やがて、ヴィーナス噴水広場に差 デートの最中なのに、新聞なぞにうつつを抜かしている博士がうらめしい。

入り禁止を示す黄色いテープが張られている。この前ニュースで見たロボット犯罪の現場だ。 ねえ、博士

トが暴れたところね?」と即答した。博士もあのニュースのことはすでに知っているようだっ

「あれなんですけど……」と僕は壁の崩れた店を指差す。博士はうなずいて「この前、ロボッ

博士がやっと新聞から顔を上げる。

「どうして、あのロボットは暴れたんでしょうか?」 僕は疑問に思っていたことを口にする。

51

52 すると博士は「守秘義務があるので、お答えできません」とやけに低い声で答えた。

博士はにやりと笑い、「なんてね」と肩をすくめた。

「実はあのロボット、司法解体のためにウチの研究所に運び込まれてきたのよ。それで私のチ

ヴァル大学第一ロボティクス研究所』だから、当然といえば当然のなりゆきといえた。 った。でも考えてみれば、ここから一番近いロボット工学の専門機関は博士の在籍する『オー ームが担当になったの」 僕は驚いて目を瞬かせる。あのニュースのロボットが博士とつながるなんて思いもよらなか

「うーん、そうね……」 博士は人差し指を顎に軽く当てた。

「それで、何か分かったんですか?」

たから、ちょっと不明な部分が多いけど」 「一言で言えば『駆動機系のショートによる安 全 回 路の機能不全』かな。損傷が激しかっ

路の三つだ。 人間でいえば、精神回路が脳にあたり、動作制御回路は脊髄および神経にたとえられる。精 ロボットには『三大回路』と呼ばれる中 枢回路がある。精 神 回 路、動作制御回路、安全回

神回路で発した命令を、動作制御回路が全身に伝えることで手足を動かす仕組みだ。

務で、もちろん僕の体にも内蔵されている。 遮断する。すべてのロボットにこの安全回路を取り付けるのがロボットメーカーの法律上の義 ボットが犯罪を企図したり、人間に危害を加えそうになったとき、安全回路がシステムを強制 そして、この二つの回路が暴走しないようにブレーキをかけるのが、安全回路の役割だ。ロ

「でも、気になる点が一つあってね」 博士は話を続けた。首元のペンダントからリングシガレットを取り出し、ピンと伸ばして口

覚』を見ていたらしい、ということ」 にくわえる。すぐに紫煙がたなびく。

|幻覚……ですか?」 「ロボットの精神回路データを再生すると、奇妙なことが分かったの。それは、ロボットが『幻灯 博士はうなずく。そのシガレットから甘酸っぱい香りが漂ってくる。

が壁の向こうにいたから。噴水まで歩き出したのも、『その人』がそっちに行ってしまったから」 ロボットの奇妙な動きの一つ一つが驚くほど合理的に説明できたの。壁を壊したのは、『その人』 ロボットが幻覚を見る。そんなことってあるのだろうか。

「自分にだけ見える『誰か』を、必死に追いかけようとしていた。そんなふうに解釈すると、

回は相当なレアケース。……それにしてもチームの連中、私が指摘するまで誰も気づかないん 一視野の欠損とか、色覚異常とか、そういう視覚装置不全は以前から報告されているけど、今

だから、まったく……」 盛夏の太陽のような目の輝き、弾んだ声のトーン。ロボットのことを話している博士はとて

も生き生きしている。僕はそんな博士を見るのが好きだ。 ただ、今日は話題がロボット犯罪だけに、ちょっと複雑な気分になるけど。

おや……?」 そのとき、博士が急に立ち止まった。

「どうしたんですか?」

「アイリス、ちょっと待っててね」

そう言い残すと博士は道の向かい側に走っていった。

へこんだロボットが、休業中の雑貨店の前で猫みたいに体を丸めて横たわっている。 博士は服が汚れることもいとわず、ロボットの上半身を抱き起こし、雑貨店のシャッターを 向かった先にはロボットが倒れていた。右脚が付け根からちぎれかけて、胴体がボコボコに

の胸部に差し込んだ。数秒後、ブンッと音がして、心停止時の電気ショックのようにロボット 背もたれにして座らせた。それから真剣な表情でロボットの全身をくまなく『診察』し始めた。 「ふむ、007型か……」 そうつぶやくと、博士はおもむろに胸ボケットから予備のバッテリーを取り出し、ロボット

の胸がぎくんとそり返った。

「よし、回路は生きてる」 博士はバッテリーを引き抜くと、すぐに携帯電話を取り出して通話を始めた。

で終えると、近くに転がっている排水溝の蓋に目を留めた。 「……あ、ラルフ? 私よ。いま噴水広場の近くにいるんだけどさ……」 博士は電話の相手にロボットの型番や損傷状 況を簡潔に説明する。そして通話を一分ほど

「この子……こんな狭くて暗いところを通ってきたのね……」

しり付着していた。暗くて狭いトンネルのような排水溝を一人ぼっちで進むロボットの姿を想 博士の言うとおり、ロボットは排水溝の中を這ってきたらしく、その体には緑色の苔がびっ

の胸に貼り付けると、「お待たせ」と僕のほうに向き直った。 像し、僕はなんだか切ない気持ちになった。 博士は『オーヴァル大学第一ロボティクス研究所・回収連絡済み』というシールをロボット 博士、いま電話したのは研究所ですか?」

「ま、それはやってみないとね」 「そう。あの子を引き取るよう手配したの」 一直るんですか?」 博士はこんなふうに、『行き倒れ』のロボットを見かけては修理する。そして身元が判明し 僕はさっきのロボットのほうを振り返る。

プになるので、そういう意味では博士に見つけられたロボットはそれだけで運がいい。 ロボットもいるが、たいていは研究所の倉庫で保管されることになる。 手をつないで歩きながら、僕は尋ねる。 もし、ロボット管理局が先に回収した場合は、若干の手続きのあとに問答無用でスクラッ

たロボットについては登録ユーザーと連絡を取る。ごくまれに、持ち主のもとに戻る運のよい

56

「ねえ、博士」

一なに?」

「博士はどうして、いつもロボットを助けて、修理するんですか?」

「うーん、そうね……」 博士はちょっとだけ考えてから、僕をまっすぐに見つめた。

「それが私の生き方だから……かな?」 そのとき見せた博士の微笑みは、とても優しくて、それでいてどこか悲しい感じがした。

博士は時々こんな表情をする。

その日の夕食後は、久しぶりに【特別講義】を開くことになった。博士の仕事が予定より早

くかたづいたからだ。デートも特別講義もいっぺんにあるなんて、今日はなんてスペシャルな 僕はうきうきしながら研究室に机と椅子を運び入れ、備えつけのホワイトボードとワイドス

クリーンをセットし、お茶とお菓子を用意する。これで準備完了だ。 博士は研究所が付属しているオーヴァル大学で、選に一回だけ講義を担当している。ロボッ それは博士と僕の間で不定期に開催される『プライベートレッスン』だ。

ト工学の最先端を疾走する若き天才の講義だけあって、教室はいつも満員、他の大学から越境 して受講しに来る学生も少なくない。

ーマで持論を展開する。以前から僕はその話を聞くたびに「僕も講義に出たい!」と駄々をこ 博士の講義はユニークだ。『ロボットと倫理』『ロボットと愛』といった、かなり哲学的なテ

そう思ってあきらめていたところに、博士はこんな提案をしてくれた。 拝見したい。でもロボットに大学入学資格はないし、こっそり出席したら博士の立場にも響く。 ねていた。博士が壇上で華麗に白衣をなびかせながら、あのクールな声で教鞭を執る勇姿を 「じゃあ、ウチでやろうか? 講義」

かくして、アイリス・レイン・アンヴレラただ一人を受講生とした、ウェンディ・フォウ・

アンヴレラ博士の特別講義が開催される運びとなったのである。

58 僕は愛用のクリアケースから分厚いノートを取り出す。このノートには博士の講義内容と、

僕が博士に訊きたい質問がびっしりと書かれている。 『ロボットも精神的に成長しますか?』 たとえばこんな感じ。

『ロボットにも思春期や反抗期はあるんですか?』

『ロボットの感情は人間の感情とどう違うんですか?』

ロボットにも天国ってありますか?』

「ロボットと人間が結婚できる日は来ますか?」

若干個人的な質問も混じっているが、まあこれくらいは許される範囲だろう。なにせプラ 『博士は僕のこと、どのくらい好き?』

イベートレッスンだし。

「はい、席についてー」

妙な取り合わせだけど。 東ねている。大学にいるときの博士の格好だ。対する僕はいつものメイド服なので、ちょっと 博士が研究室に入ってくる。今はスーツの上に長い丈の白衣を羽織り、麗しい黒髪を後ろで

大学から中古のものを引き取ってきたという、使い古した木製の教 卓に手をついて、博士は

「出欠を取ります」と言った。

れた論文で……」 ト心理学の分野で研究されてきました。議論の火つけ役となったのが、八年前に学会で発表さ 口になっている。 「今日のテーマは、『ロボットの生きがいとは何か』です。このテーマは近年、おもにロボッ と講義を開始した。 はいっ!! |「はい」は一度でよろしい」 なんでしょう! 一アイリス君 「はーい! はいはい、はいっ!」 「アイリス・レイン・アンヴレラ君!」 博士は流 暢に話を続ける。ホワイトボードは博士の遂筆で見る見る埋まっていく。 博士はコホンと一つ咳払いをしてから「では、テキストの五十二ページを開いてください」僕は嬉しくてたまらない。いつかロボットも学校に行ける日が来ればいいのに。 僕は博士の大学で使っている講義用テキストを開く。もう何十回も読み返してかなりボロボ 僕は机から身を乗り出し、幼年学校に入りたての子供みたいに元気よく手を挙げる。

僕はノートに一言一句漏らすまいと書き留める。もちろん、板書だけなら精神 回 路の空き

容量に記録してしまえばいいのだけれど、それだと『講義』という感じがしない。大事なのは

雰囲気と遊び心なのだ。

「……えー、以上は、旧型から新型にいたるロボットの発展史を『生きがい』『精神衛生』の そして二十分後の

君が詳しい文献にあたるときは理解の一助になると思います。……何かご質問は?」 面から俯瞰したものです。学術的にはかなり大ざっぱな整理の仕方をしましたが、今後学生諸

僕は博士に当ててもらおうと精いっぱい右手を伸ばす。もっとも生徒は僕一人しかいないけ

「ではアイリス君」

「たいへん有意義で興味深いお話、まことにありがとうございました!」

ご主人様にご奉仕する」という生きがいも含まれますか?」 「それで、博士がただ今おっしゃった『生きがい論』ですが、その生きがいには『ロボットが まずは社交辞令。

の存在意義としているものが多いですからね」 「もちろんです。家庭用に普及した学習型ロボットにおいては、ユーザーに仕えることを直接

```
のことを考えてみる。最後に簡単な感想レポートを提出すれば講義は終ってだ。
                                  【感想レポート(第十八回)】テーマ…ロボットと生きがい
                                                                                                                                                              「はい、できました!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                       揚げ足を取らないの
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      「『はい』は一度でよろしい、とおっしゃったのは博士です」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    「僕が博士を愛しているからです」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   「なぜそういう結論になるのですか」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  「じゃあ僕の生きがいは、博士にご奉仕する、という一点で十分なわけですね」
                                                                                                                                                                                                                         僕はホワイトボードに書かれた図と説明をノートに写しながら、今日のテーマ『生きがい』
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         はいはい
僕の生きがいは博士です。大好き博士。アイラブ博士。結婚して博士。以上!
                                                                                             僕は難事件を解決した名探偵のように、颯爽と教卓にレポートを提出する。
                                                                                                                                                                                                                                                           博士はフウッと息を吐き出す。
```

博士は僕のレポートを読むと、名探偵に手柄を横取りされたベテラン刑事みたいな渋い顔に

```
「あの、アイリス君?」
                                                            「いえ、そうじゃなくて……研究室は禁煙です」
                                                                                         一いいでしょ、別に大学じゃないんだから」
                                                                                                                     |博士、おタバコは…….|
                                                                                                                                                                                                                                        「そういう側面も否定できません!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              「君はやる気があるのかね」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          「その一行にすべてを込めました!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       「レポートが一行しか書かれていないのだが」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    「なんでしょう!」
                                                                                                                                                                                                                                                                    私をおちょくっているのかね」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                 やる気満々です!」
博士は拗ねたように唇をとがらせると「では、これにて本日の講義は終了!」と宣言した。
                                                                                                                                                                               8の字タイプのシガレットを、キュッとひねって二つに分け、片方を口にくわえてスパスパ
                                                                                                                                                                                                           博士はため息をつき、胸のペンダントからリングシガレットを取り出した。
```

62 なった。

文字が煙の中に吹き出してきそうだ。 僕はレポート用紙を改めて手に取る。真ん中には『再提出』という赤いハンコがでかでかと

教卓の上に白衣を脱ぎ捨て、紫煙をくゆらせながら足早に退室していく。『やれやれ』という

スなので、つい悪乗りしてしまう。

今日はちょっとからかいすぎただろうか。特別講義は僕が博士を翻弄できる数少ないチャン

あとでご機嫌とりに紅茶とケーキを持っていこう。

それはいつもと少しだけ違う朝だった。

いな、寂しくて気が滅入る雨。 僕は博士を起こして、朝食の準備をする。この日に限ってうっかり目玉焼きを焦がしてしま しとしとと、明け方に陰鬱な雨が降り出した。まるで空が太陽とお別れして泣いているみた

ったのは、どうしてだろう。 そんないつもと少しだけ違う朝に、博士はいつもと違うセリフを言った。

「アイリス、あのね」

```
64
「何でしょう、博士」
                    アーチを出たところ、敷地と一般道のちょうど境目で、博士は僕のほうに振り向いた。
```

「今日は帰ったら、大事な話があるの」

「えっ、永遠? ど、どういうことですか?」 『バカ言わないの。あ、でも、婚姻届か……。『永遠の幸福を』という意味では当たっている 「な、何をくれるんですか? 僕、博士との婚姻届がほしいですっ!」 「帰ったら話すわね。それまでいい子にしてるのよ」 「フフフ。ま、悪い話じゃないから。なんていうか……そうね、プレゼント?」 「そんなにもったいぶられると気になりますー」 「帰ったらゆっくり話すわ。そうね、夕食のあとにでも」 「なんですか?」と、僕は傘を少し持ち上げて博士の顔を見つめ返す。 |大事な……話?| その目はとても穏やかだったが、どこか寂しげな感じもした。 僕は「やった!」と傘といっしょに大げさに手を上げる。 博士は傘を差したまま、こくりとうなずく。

「はい! 博士のアイリスは今日も、超・超・いい子にしてますから!」

「じゃ、行ってくるわね」 博士が歩き出す。

「いってらっしゃいませ! 早く帰ってきてくださいね!」

博士は振り向かずに、軽く右手を上げて応じた。

青い傘が、淡い水彩絵の具みたいに雨粒の中でぼんやりと輪郭を失い、角を曲がって、見え

なくなった。

になり、屋敷に入る前に正門のほうを振り返った。 雨が強くなる。僕は前庭を走って戻る。なぜかこのとき、僕は後ろ髪を引かれたような気分 もちろんアーチには誰もいなかった。

読書に勤しんでいた。

その日の午後、いつものように家事と充電をてきばきとかたづけた僕は、居間のソファで

何もあったものではない。 の若き美女にもかかわらず、博士の本棚はこの手の学術書でぎっしりと埋まっており、色気も 本は『新・ロボット工学基礎理論』。これは博士の蔵書から拝借したものだ。スタイル抜群

ロボットの精 神 回 路で芽生えた『感情』を、顔面を覆う人工皮膚の『表情』にどう連動さ ちなみに今読んでいるのは、『ロボットの感情と表情』という項目

人間は、嬉しいときに笑い、悲しいときに泣く。

せるか、というテーマだ。

が発生しないし、一定の技術レベルの人工筋肉と人工皮膚を組み込んでいなければ『表情』が しかしロボットは違う。そもそも一定のスペックの精神回路を内蔵していなければ『感情』

って、初めて『人間らしい』表情が可能となる。だから一般のロボット市場では、表情オプシ すものは大きく異なる。人間の表情を数百のパターンに分類し、細かい精神回路との調整を行 笑うのか、優しく微笑むのか、ニヤニヤとバカにした笑い方をするのか、それぞれの表情が表 ョンは言語流解オプションと並びトップクラスの高級装備である。表情オプションだけでロボ 加えて人間の表情は複雑だ。単に『笑う』という行為にも、ゲラゲラと笑うのか、フフッと

怒って、拗ねて。この豊かな表情をくれた博士に僕はとても感謝している。 ットの本体価格を上回る場合だってあるくらいだ。 そして僕には、博士が開発した最新鋭の表情オプションが搭載されている。笑って、泣いて、

そこで僕は読んでいた本を閉じた。時刻は午後五時四十五分。

もうすぐ博士が帰ってくる。夕食のお皿を並べておこう。

それから一時間以上が経過した午後七時十三分。

なっている。 には晩御飯のロロルア風クリームシチューがたっぷり用意されており、あとは温め直すだけと 博士が遅れるときはたいてい連絡がある。でも、今日は何の音沙汰もない。 --- おかしいな。 博士はまだ帰ってこない。予定時刻からはすでに一時間十三分二十一秒オーバー。台所の鍋ではまだ帰ってこない。予定時刻からはすでに一時間十三分二十一秒オーバー。台所の鍋で --博士、遅いなあ……。

博士はまだ帰ってこない。 コチ、コチ。

僕は落ち着かない気持ちのまま、壁に掛けられた時計の秒針を見つめる。 携帯電話にかけようかとも思うが、仕事中は電話するなってこの前注意されたばかりだし。

家事もとっくに終わっちゃったし。家事もとっくに終わっちゃったし。

まだ、まだなの?

```
68
―博士だ!
               リン、リン、と称下で電話が鳴った。
                                   七周目に突入した、そのときだった。
                                                     秒針が一周して、二周して、三周して――
```

僕は跳ねるように立ち上がって廊下まで走り、受話器に飛びつく。

「はい、お待たせしました! こちらアンヴレラです!」

僕はドキドキしながら通話相手の言葉を待つ。

「夜分に失礼いたします。こちらは、オーヴァル大学第一ロボティクス研究所です」 それは男性の声だった。ロボティクス研究所は博士の職場だ。

「わたくしはウェンディ・フォウ・アンヴレラの所有ロボットです。アンヴレラは現在席をは 僕は相手が博士でなかったことに落胆しつつ、それを声色に出さないようにして受け答えを

ずしております。よろしければご用件を 承 ります」 機械的なアナウンスが僕の口から出てくる。

フ・シエルと申します」とやけに小さな声で答えた。 相手の男性は一瞬。沈黙したあと「私は、アンヴレラ博士の実験助手をしております、ラル

僕は聴覚装置の感度を上げる。

```
「……アンヴレラ博士のことですが」
                                 「はい、いつもアンヴレラがお世話になっております」
```

はい

「あ、あの!」だから僕は思わず訊いていた。「博士に何かあったんですか?」 どうして、この人はわざわざ自宅にかけてきたんだろう? そこで僕の肌がざわりと粟立った。 不安と恐怖が、ぞろりと虫のごとく僕の背中を這い上がってくる。 博士に用事なら、携帯電話に直接かければいいのに。

真実という凄惨な凶器が、僕の耳を突き刺した。

相手は少しだけ口ごもり、それから意を決したようにはっきりと告げた。

第一章

69



「――」と、もしもしり」 受益器が、何か言っている。

いったいどのくらい、時間が経っただろうか。

電子音声が、繰り返し、僕を呼ぶ。

---ライキャクデス**。**

そこで僕は、意識を取り戻した。

足元で、何かが僕にぶつかる。

見下ろすと、ぶらさがった受話器が、僕の足を叩いていた。 ああ。

やっと指先が動く。

博士は

飛んでいた記憶が、意識の表層にゆっくりとにじみ出す。 電話が来たんだ。

最悪の電話が。

来客デス。至急、応対シテクダサイ。

電子音声に促されて、僕は歩き出す。 その場から逃げるように、よたよたと、階段を下りて、ドアを開ける。

アーチまで歩くと、正門前の道路には、黒塗りの自動車が停まっていた。 外はすっかり間夜だった。

かったが、その顔は病的に青白く、疲れきった老人のように頬がこけていた。 僕が声をかけると、彼は驚いたように寄りかかっていた車から身を離し、自分のことを実験 運転席のドアの前には、背広を着た男性が一人、沈痛な面持ちで立っていた。男性はまだ若

助手のラルフ・シエルだと名乗った。 それは最悪の電話をくれた人物だった。

亡くなられ

事故で

「アイリス・レイン・アンヴレラさん……ですね?」

ラルフが押し殺したような声で訊いた。僕は黙ってうなずく。

行き先は、訊かなかった。 そして自動車のドアがゆっくりと開いた。ラルフに促され、僕は助手席に乗る。

`

力がないだけに見えた。何より、僕と彼に共通する話題など博士のことしかなく、どちらも最 る流星のようにか細い光の尾を引いて、次々に僕を置き去りにしていった。 患の話題には触れようとしなかった。 車に乗っている間、僕は焦点の合わない目で窓の外を眺めていた。商店街のネオンは墜落す 十分ほどで自動車は病院に到着した。車から降りると、夜空を突き刺すように屹立する病院 ラルフはずっと黙っていた。僕に気を遣って話しかけないというより、ただ言葉を発する気

ると、好奇心に満ちた視線を向ける者もいた。 ーチェックを受け、そのたびにIDや所持品を検査された。僕が博士の所有ロボットだと分か の白い建物が僕を出迎えた。 ラルフは僕を病院の地下へと案内した。途中、玄関やエレベーターで何重にもセキュリティ

ロボットが動くことができたのか、その原因はいまだに不明。非常用の熟練銃も間に合わず、 起動し、立ち上がって暴れ始めたのだ。バッテリー残量がまったくないにもかかわらず、なぜ 次々に運び込まれてくるのだという。僕はヴィーナス噴水広場で暴れたロボットのことを思い ボットの『司法解体』に立ち会っていた。最近はこの手の暴走事件が多いらしく、研究所に 博士の体が収められているらしかった。 したような丸みを帯びた二メートル強の箱が置かれていた。ラルフの話ではこの白い箱の中に 「事故が起きたのは、始まって三十分ほどしたころでした」 開始三十分、解体作業も佳境というところで、そのアクシデントは起きた。ロボットが突然 問題のロポットが解体分析室に運び込まれると、博士とラルフの所属するチームは解体に取 博士は今日の午前中、研究所の十二階にある第七解体分析室という部屋で、いわゆる暴走ロ 箱の蓋を開ける前に、ラルフは『事件』の概要を説明してくれた。 冷凍保管室というプレートの貼られたドアを開けると、部屋の中央にはカプセルを引き伸ば ラルフは乾いてかさかさになった唇で話を続けた。 地下四階の廊下の突き当たりに、その部屋はあった。

ロボットは解体分析室の分厚い壁をぶち破った。これも通常では考えられないパワーだった。

逃げる間もなく、ロボットの腕が――」 「それで、そのとき一番近くにいたのがアンヴレラ博士でした。……とっさのことで、博士は 博士は死んだ。 博士の腹部を貫通した。

「はか、せ……」 ゆっくりと、花弁が開くようにカプセルの白い蓋が持ち上がり、博士の体が姿を現した。 そして今。 ロボットが熱線銃で鎮圧されたのは、その直後だった。

白い顔のコントラストが奇妙で、僕は何度も視線を往復させた。白い氷の彫刻に真っ赤な薔薇 の花束を閉じ込めたみたいに、博士は無機質に美しかった。 よく見ると口元には吐血を拭った痕が残っていた。胸や腹にべっとりとついた真っ赤な血液と、 僕は博士に向かってそっと手を伸ばす。その白い頰に、僕の指先が触れる。 なんて、冷たい。 すっかり血の気を失った博士の顧は、とても安らかで、まるで眠っているようだった。でも 僕は夢遊病患者のごとくよろよろとした足取りで、横たわった博士のもとに近づく。

の体温数値を大幅に下回っていた。 温度感知装置の故障じゃないか、というほどに博士の体は冷えきっていて、生きている人間

感触を通じて、僕の中に浸食するように伝わってくる。 僕は震える指で博士の頬を触り続ける。博士が亡くなったという事実が、指先の冷たく硬い

僕は声に出さずに哀願した。

博士。痛かったですか。こんなに血が出てるのだから、痛かったですよね。 博士。僕です。あなたのアイリスです。

すか。こんな理不尽って、あるのでしょうか。 人に任せておけばよかったじゃないですか。 博士。いつもロボットを助けてきた博士が、どうしてロボットに殺されなきゃいけないんで 博士。僕はここにいます。あなたのアイリスはここにいます。 博士。どうして、こんな危険なことをしていたのですか。暴走ロボットの研究なんて、他の

のある銀色のシガレットケースが置かれていた。鎖をつけてペンダント状にした、博士のお気 い。僕の髪を撫でてください――。 だから博士。どうか目を覚ましてください。僕に命令してください。僕をからかってくださ 視界の鐺で『それ』は光った。見ると、博士の入ったカプセルのサイドテープルに、見覚え そのときだった。

に入りのケースだ。

僕はそれに手を伸ばす。指先は滑稽なくらいに震えている。

手のひらに載せたシガレットケースには、生々しい血痕がついたままで、楕円形の蓋を開け

「ああ……」 るとリングシガレットが一つだけ入っていた。

女と、いたずらっぽい笑みを浮かべた女性が、仲良く肩を並べて写っていた。 蓋の裏側には一枚の小さな写真が貼ってあった。映画の看板を背景に、引きつった笑顔の少 そこで僕は気づいた。

「アンヴレラ博士は、死ぬ間際にそれを強く握り締めておられました」 僕と博士の写真だった。

三日前

ラルフが低い声で言った。

僕はアンヴレラ邸でぼんやりとしていた。昨晩からずっと座り込んだまま、リビングの窓か 博士が亡くなった翌日。

ら外の景色を眺めていた。皮肉なほど空は青く、小鳥たちは平和を謳歌するようにピイピイと け止めきれないでいた。 鳴いていた。世界中でたった一人だけ取り残された気分だった。悲しみよりも、ただ現実を受

アンヴレラ邸を隅々まで掃除し、庭の草を刈ったり、公共料金を支払ったりした。 それは家事だった。 何をしたらよいか分からない僕は、やがて、いつもと同じことを始めた。

いないことに気づいて愕然とした。 寝室のベッドは冷たくて、ここにもう二度とぬくもりが戻らないことを思うと胸が張り裂け 洗濯をしようと博士の服に触ったときは手が震えた。料理を作ったあとに、誰も食べる人の

そうになった。

何をやっているのか自分でもよく分からなかった。でも僕は家事を続けた。そうやって現実

うな気がした。だから僕は一晩中ずっとシガレットケースを握り締めたまま、博士を待ってい からの逃避を続けた。残酷な真実と向き合うのが怖かった。 僕は寝室前の廊下で膝を抱えてじっと座っていた。そこで待っていれば博士が帰ってくるよ 夜になり、ついにするべきことがなくなった。

でも博士は帰ってこなかった。

明け方、精神回路内で電子音声が響いた。 警告。

途中、電力不足で階段を転げ落ち、右の足首がおかしな方向に曲がった。僕は足を引きずり 僕はよろよろと立ち上がり、研究室に向かった。 ──スミヤカニ充 電ヲ開始シテクダサイ。 抑揚のない、事務的な口調で。

ながら研究室まで歩いた。

これを切れば、死ねる。楽になれる。博士のところに行ける。 発作的に、僕は手首を切ってしまいたい欲望にかられた。

乳白色のベッドに座り、バッテリー充電のために手音の連結ユニットを露出させたときだった。乳白色のベッドに座り、バッテリー充電のために手音の連結ユニットを露出させたときだった。

も浮かび上がり、連結ユニットは熔解していった。十秒ほどでユニットの差込口を焼き切ると、 から赤い炎の柱が突き出る。それをゆっくり手首に近づけると、汗のように金属の珠がいくつ 博士が亡くなって以来すっかり精神の均衡を崩していた僕は、その欲望を実行に移した。 修理用のバーナーを手に取り、スイッチを入れる。ゴウッと陽炎がゆらめき、バーナーの先

情で見つめながら、「警告、警告、警告、警告!」とヒステリックに叫ぶ精 神 回 路内の電子 た研究室はあっという間に黒く油臭い空間へと変貌していく。僕はその白昼夢を恍惚とした表 黒い機械油がブシャッと盛大に噴き出した。 それは凄惨な光景だった。手首からほとばしる油は天井まで達し、雪原のように真っ白だっ

水みたいに黒い液体が出るだけとなった。 五分もすると、僕の体内からは機械油が流れ尽くし、手首からピュウピュウと駅前広場の噴 そのときだった。

震わせ、胸を掻き毟り、苦しみのあまり床をのたうち回った。 うな痛みが、わずかな間隔を開けて何度も僕を襲った。僕は毒物を飲んだ人間のように、唇を それは今まで感じたことのないひどいものだった。目まいと、吐き気と、頭蓋を掻き回すよ

僕は猛烈な悪寒に襲われた。

電子音声がいつもの抑揚のない声で、死の宣告をした。 ――警告。稼働限界マデ、残り三十秒デス。スミヤカニ修理ヲ開始シテクダサイ。

その途端、僕は狂人のごとく目を見開いた。

-嫌だ、死にたくない!

僕は慌てて体を起こすと、油まみれの黒い手で充電チューブを乱暴に掴み、手首の差込口に

通すときのようにチューブの連結は何度も失敗した。 突き刺した。しかしバーナーで焼き切った連結ユニットは熱で変形しており、裁縫で針に糸を

死にたくない、死にたくないと。 ユーブを突き刺し続けた。何度も、何度も、何度も、何度も、死にたくない、死にたくない、 ハッ、ハッ、ハッと短く恐怖の息を吐きながら、僕は目を見開いて手首の連結ユニットにチ

った。警告音が鳴りやみ、悪寒と吐き気が収まっていく。 ずぶりと鈍い音がして、チューブを連結ユニットにねじ込むと、電力と機械油の供給が始ま

死なないでよかった。 よかった。 ああ、これで死なないで済む。 僕は心底ほっとした。

僕は自分の感情に愕然とする。 ―よかった?

自分が死なないでよかった? 何がよかったのだ?

自分だけ、おめおめと、生き恥をさらして、楽しいのか? 自分だけ生きているのがそんなに楽しいのか? 博士が死んだのに?

えたいのか。死ね、死ね、今すぐ死ね、深く死ね。 か。仕えるべき主人を失い、もうひとかけらの存在意義もないくせに、それでもまだ生き永ら アイリス・レイン・アンヴレラ。おまえはまだ死なないのか。ロボットのくせに死が怖いの 僕の中で、もう一人の僕が囁く。

自己嫌悪のあまり、僕は髪の毛を掻き毟った。 どうにも糊塗しようのない事実として、僕は生に執 着していた。生きたい。死にたくない。

の言葉を並べていたくせに。僕は博士のあとを追うことすらできないのだ。 それは死に向かい合って初めて気づいた感情だった。 頭を掻き毟るたびに、手首からだらりと下がったチューブがベチベチと床にぶつかり、それ 僕は自分を軽蔑した。あんなに博士のことが好きだったのに。あんなに恥ずかしげもなく愛

込み、僕は狂人のように頭を掻き毟り続けた。髪の毛が何本も何十本もぶちぶちと抜けた。 壁も天井も黒く汚れきった油臭い部屋で、自分の体から噴き出したどす黒い血だまりに座り

がひどく邪魔だった。でもチューブを引き抜く勇気なんて僕にはもうなかった。

前日

昼ごろに来客があった。

見慣れぬ灰色の制服を着た男性と、いかつい大型ロボット三台が正門前に現れた。彼らはロ

顔をしかめた。 ボット管理局オーヴァル支部と名乗り、僕を回取に来たと告げた。男性だけが油臭い僕を見て

博士には身寄りがない。だから博士所有の財産である僕を引き取る相続人もいない。そのた

ロボット管理局が回収に来た――と男性は説明した。 め僕は法律的には『無主物』となり、国の財産に帰属することになった。そして国の当局たる 僕は鋼鉄のロボットに両脇を抱えられ、護送車のような頑丈な車の荷台に乗せられた。逆ら

うことはできなかったし、そんな気力も僕には残されていなかった。 ロボット管理局の事務所に到着すると、男性は僕に分厚い書類を手渡し、指定された場所に

行くよう命じた。僕は鋼鉄のロボットに先導され、とある場所に連行された。

そこはロボット検査工場だった。

はそのための検査をする場所だった。検査をパスしたロボットは、入札によって改めて業者に ロボットを製品として市場に出荷するためには、法定の安全基準を満たす必要がある。ここ

払い下げられる。 僕は初期開発段階を除き、今までずっと博士に検査をしてもらってきたので、この目で検査

工場を見るのは初めてだった。

僕は覚束ない手つきで、ためらいがちに服を脱いでいく。靴下を脱ぎ、エプロンをはずし、 最初に言われたのはこのセリフだった。自己紹介も何もない。

続いてワンピース――。 「グズグズするな!」

「さっさと全部脱ぐんだ!」 下着姿になった僕に、検査官が荒っぽい声で命令する。

と誰かの野次が飛ぶと、ニヤニヤした薄笑みが男たちに広がった。 男たちの手が、僕の皮膚の上を、這った。ある者は機械的な動きで、ある者はそれと分かる 服を脱いだあとはさらに恥辱だった。 周囲では、何人もの男性検査官が僕をねっとりと見ている。「一人前に恥じらってやがる!」

羞 恥と嫌悪が入り混じった、ぐちゃぐちゃとした頭のまま、僕は体表検査を終えた。 僕は黙っている。なすがままにされている。

場内のあちこちを移動させられた。 精神 回路スキャン、動作制御確認、安全 回 路のチェック。検査はいくつも続き、僕はエディー・

だけが僕の唯一の持ち物だった。 服は返してもらえなかった。だから僕はずっと全裸だった。首から下げたシガレットケース

ラバラに解体されて『スクラップ』となる。 るためのオークションだ。ここで買い手がつかなければ、中古部品市場に流れる――つまり、 そして最後の『再出荷テスト』を迎えた。 再出荷テスト。それは、検査工場で安全基準を満たしたロボットを、再度一般市場に出荷す

トが回っていた。僕は他のロボットたちのあとに並ばされ、順番が来るとベルトの上に座らさ 数字とバーコードが刷り込まれていた。 テストが始まる前に、僕は控え室で『首輪』をつけられた。この首輪は製品管理用のタグで、 再出荷テストの部屋に入ると、ベルトコンベアをぐるりとつないで円形にした製品展示ベル

けられた各種カメラの向こうには、ロボット業者の中古品買いつけ担当者が僕を吟味している 込み、天井がやけに白いな、とか、今日は何曜日だろう、とか関係ないことばかりを考えてい のだろう。こいつは売れそうか、商品価値はありそうか、と。その間、僕は呆けたように座り 秒速十センチ程度のゆったりとしたペースで、僕は展示ベルトの上を何度も回った。備えつ

そうやって僕はベルトの上を何周も回った。他のロボットたちもいっしょに回り続けた。そ

れは生と死を司るメリーゴーランドだった。 そして僕のスクラップが決まった。 きっかり十周で僕はベルトから降ろされた。僕を買い取る者は誰も出てこなかった。

プウン、プウンと重苦しい音が聞こえる。 ベルトコンベアは一定のリズムで流れていく。

僕はベルトの上で、全裸のままぺったりと力なく座り込んでいる。

ここはオーヴァル市郊外にある特殊機械処理工場――通称・ロボット処分場。スクラップが

決まるとすぐ、僕はトラックに積まれてこの処分場まで運ばれた。他のロボットたちもいっし

精神 回路をスキャンされたときに、自殺を図ったことがバレたからだろうか。博士の妹さん ら買い値が高いと敬遠されたのだろうか。 をモデルに造られたから、一般市場で売りにくいと思われたのだろうか。最新型ロボットだか ょだったが、まるで刑務所に送られる囚人のように、誰も一言も口を利かなかった。 分からない。 車の荷台で揺られている間、僕は自分に買い手がつかなかった理由をぼんやりと考えていた。

でも、はっきりしていることが、ひとつ。

なぜ、どうして、僕はこんなところに座っているのか。博士との、甘く優しい、あの幸せな

時間はどこへ行ってしまったのか。解体なんてとても現実のこととは思えない。 逃げ出すことはできなかった。安全 回 路が働いて、僕の精神 回路は完全にロックされて

いた。それにバッテリー残量もほとんどない。

いに口を開けて迫ってくる。 僕は刻一刻と迫る終焉の時を待つ。ベルトコンベアは流れ続ける。解体フロアが悪魔みた

首から下げたシガレットケースが、乳房の間でカタカタと生き物のように揺れた。

防ぐための消火剤のようだった。熱で泡立った白い液体はどこか石鹸水に似ていた。 告音が鳴り出すと、僕はすぐにプログラムを切った。こんなもの、今となっては何の役にも立 いた。突起からは白い粘着 質の液体が飛び出し、僕の右腕を絡め取った。この液体は火花を た犯人のように、ギチギチと僕の腕は背中のほうにねじり上げられる。脳内でけたたましく警 解体機械のアームには数百はありそうな突起がついていて、それぞれが触手のように蠢いて 灰色の殺風景なフロアに入ると、解体機械のアームが僕の右腕を掴んだ。警察官に拘束され もうすぐ僕は解体される。

状の糸を吐き出し、左腕が泡に塗れる。レーザーが飛び、ジュウッという煙が立ち、弧を描く 僕の肩回りをなぞるように切断していった。あまりの激痛に僕は叫び声を上げ、反射的に痛覚 ように肩回りが切り取られていく。 ューブが切れると、油が跳ねてレーザーに飛んだ。そのたびにジュッと音が出て嫌な臭いの煙しばらくすると人工筋肉がブチブチと断裂する音が聞こえた。機械油を体内に流していたチ 機能をすべてオフにした。そうしなければ気が狂いそうだった。 右腕がなくなったあとは、左腕だった。 両腕を失うと、次は右脚の番になった。 そして左腕もあっさりと僕から離れていった。三十四秒かかった。 解体機械のアームが僕の左腕をねじり上げる。数百の小突起が変態前の幼虫のごとく白い液 解体が始まってから三十二秒間で、僕の右腕は、あっけなく肩から切断された。 右腕全体が白い泡に塗れると、解体アームから指一本分くらいの細いレーザーが発射され、

脚は腕より太いので、少しだけ余分に時間がかかった。一分十一秒だった。 切断部分がガッチリと固定され、泡に塗れ、青い光の刃が飛び、嫌な臭いの煙が出る。

ちの『手足だったもの』が数十本、バラバラ死体のように積み重なっていた。中にはまだ蠢い

切断された右脚はベルト脇の回収ボックスに転がり落ちていく。箱の中には他のロボットた

ているものもあって、気持ち悪い。 とにかく早く終わってほしかった。この苦痛でしかない時間を、一秒でも早く。 僕はぼんやりと青いレーザーを見つめる。目の焦点が合わずに視界がぼやける。 右脚に続き、左脚の解体作業が始まった。

月にはお洋服を買ってもらう約束だった。再来月には――。 ト鎮圧用の熱線銃と同じものだろうか、と。 そこで、レーザーが目の前を横切った。僕はふと疑問に思う。この解体レーザーは、ロボッ だから僕は現実逃避を始めた。思い出すのは博士のことだった。 噴水広場で暴れたあのロボットは、その後どうなったのだろうか? そうだ、熱線銃といえば――取り留めのない思考が別の疑問を生み出す。 来週のお休みには二人で遊園地に行くはずだった。再来週にはまた映画の予定があった。来

```
確に刈り取っていく。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          ゴツゴツした機械の手。柔らかくて温かい博士の手とは、全然違う。
あのとき話したプレゼントは、結局なんだったのですか?
                                                                                                                                                      それは博士と交わした、最後の会話
                                                                                                                                                                                                                                                                                                            冷たい機械の手は、僕の首筋に青い光のメスを当てる。灼 熱の刃が僕の首を少しずつ、正
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         僕の顔は二本の解体アームによって、両側から頬を挟むように固定された。冷たく、乱暴な、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       そして首の切り離し作業が始まった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     手足をすべて失うと僕はベルトの上に横たえられた。
                                                            ――なんていうか……そうね、プレゼント?
                                                                                          そうだ、あのとき、博士は。
                                                                                                                        ――フフフ。ま、悪い話じゃないから。
                                                                                                                                                                                                                  逃避した先には決まって博士がいた。
                                                                                                                                                                                                                                                    僕はまた現実から逃避する。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   気がつくと左脚はなくなっていた。かかった時間はもう分からない。
                                                                                                                                                                                    今日は帰ったら、大事な話があるの。
```

首の下には血管のようなチューブが何本も垂れ下がる。チューブの先には四肢をもがれた哀 バチッ、と何かが爆ぜたような音がして、僕の首が胴体から切り離された。

入れていた。ただそれはなんら前向きな変化ではなく、達観でもなく、悟りでもなく、ただ単 れな僕の体が見え、胸や腹の皮膚がまるで別の生き物みたいにひくりひくりと痙攣していた。 手首を切ったあのときとは違い、僕の心は落ち着いていた。これから死ぬことを素直に受け 不思議と恐怖はなかった。

に僕の心が壊れ始めていたからだろう。

そして僕の頭部は分解され始めた。 やがて、首だけになった僕に、また解体アームが迫ってきた。

と抉り出される。 れる。抉り出された右の眼球と、残った左の眼球の視線が合う。だがその左の眼球もぐりゅん れていく。次に眼窩に丸い金具が埋め込まれ、ぐりゅんと小気味よい音がして眼球が抉り出さ 世界から光が消える。 まず髪の毛が頭皮ごと毟り取られた。僕の自慢だった栗色の髪は頭皮といっしょに持ち去ら

もう分からない。レーザーらしき熱線が僕の側頭部で円を描き、聴覚装置ごと耳が取り外され 続いて耳の中に何か棒状のものが突っ込まれる。何が突っ込まれたのかは光を失った僕には

皮を剝かれ、果肉をそぎ落とされるフルーツのように、僕は少しずつ緩慢に解体されていっ 世界から音が消える。

た。歯茎をはずされ、舌を抜かれ、鼻をそがれ――。 もう何も見えない。何も聞こえない。何も臭わない。何も感じない。

天国ですか。そこは住み心地がいいですか。ご飯はちゃんと食べていますか。ベッドでシガ 博士は今、どこにいますか。 それでも僕は、最後の瞬間まで、ずっと博士のことを考えていた。

博士。

僕はこれからどこに行くのでしょうか。博士。

ですか。八百屋さんは親切ですか。 博士はどうして死んでしまったのですか。

ロボットにも天国ってありますか。そこはどんなところでしょうか。キッチンは使いやすい

ートを真面目に書かなかったからですか。 もらえるでしょうか。 博士 人間の天国と、 今から会いに行っても、よろしいでしょうか。僕はロボットだけど、人間の天国には入れて 僕がいい子にしてなかったからですか。映画をちゃんと見てなかったからですか。感想レポ 博士に会いたいです。会いたくて会いたくて、会いたいです。 ボ ット K は 近 ž

97 第一章 解体

p,





l

ザアザアと、

映りの悪いテレビのような、 雨のような、 音がする。

とても耳降りな、

れていない。

思考が徐々に、回復する。 それで目が覚めた。

僕は。

僕はまだ、生きている――少なくとも、精神 回路が外界認識不能なレベルにまでは破壊さ

の前を舞う。おまけに古い映画みたいにあちこちに『線』が走る。白い縦線が何本も。 そして何よりモノクロ――つまり色がない。白と黒だけの殺風景な世界。 ただし視界は悪い。映像の質が極端に低下しており、砂埃のような光の粒がチカチカと目

朦朧とする頭で、記憶をさかのぼる。

―― どういう……こと?

解体工場でスクラップにされた。手足はもがれ、首と胴体を切断された。

一では、ここはどこ?

だんだん聴覚装置が機能してくる。周囲の音が判別できるようになる。

「おら、そっちに運べ!」「グズグズするな!」「バカヤロウ、さっさと行くんだ!」という怒

号と喧騒。ガーンガーンと鳴り響く重たい金属音。 ---工事·····現場?

僕はあたりをきょろきょろと見回す。しかしすべての色が失われたモノクロの視界では、状

るで傷だらけのゴーグルごしに世界を見ているような感覚 況が極めて把握しにくい。おまけに、雨のような白い縦線がひっきりなしに目の前を遮る。ま 僕はしばらく、何とかして今の状況を理解しようと目を凝らし続けた。

そしてあることに気がついた。

101

ごとき風貌だった。 カーをくっつけただけの口。その顔は、いかにも前時代的な、ロボット専門学校生の試作品の バケツをひっくり返したような頭部に、双眼鏡みたいなレンズをはめた両眼と、小型スピー

付けられている。体のどのパーツをとっても、どこかサイズや接続がチグハグだった。 一本一本が膨れ上がっている。両足はそもそも存在せず、代わりに錆ついたキャタピラが取り 体のほうもひどかった。左腕は右腕に比べて十センチは短く、指先はどれも火傷したように おそらく、中古屋からまだ使えそうなパーツを仕入れて、適当につなげて造った即席ロボッ

トだろう。そしてシステムの中核に精 神 回 路を接続して無理やり起動させた。そんなところ そのロボットが、さっきからずっと僕を見ている。 いい加減な部品で、いい加減に造られたロボット。哀れな姿の異形のロボット。

少々気味が悪くなって僕が後ずさると、そのロボットも同時に後ずさった。

――なんだろう、いったい。

僕は『右手』を上げる。ロボットは『左手』を上げる。まるで向かい合う『鏡』のように。

僕は自分の手を見た。手の先には、正面のロボットと同じ、無骨な太い五指。

その可能性に僕はぞくりと戦慄する。だが一方で確信めいた思いも湧き上がる。あれだけバ

ラバラに、スクラップにされたんだ。元の体であるはずがない。 ということは――。

僕はキャタピラを動かして『彼』に近づいた。『彼』も僕に近づいた。

鏡に映っていた奇怪なロボットは、紛れもなく僕だった。

とつできない。 目の前の彼を改めて見つめる。バケツを逆さにしたような頭部、双眼鏡のごとき両眼、小型 自分の身の上に起きたことに、感覚が追いつかない。 僕はしばらく、じっと『彼』と向かい合っていた。驚きのあまり言葉が出ない。身じろぎひ ---これが……僕……。

スピーカーをくっつけただけの口。左腕はやけに短くて――いやこれは右腕か――。



気だった。しばらく僕はぶるぶると小刻みに痙攣しながら、決して出ることのない吐しゃ物に気だった。 僕は吐き気がした。それは全身の体液が腐って喉元からせり上がってくるような壮絶な吐き

ウッ……!

て、ガンガンと頭をぶつけ出した。そうすれば今の自分の姿を否定できるとでもいうように。 での激しい自己嫌悪だった。 少しばかり吐き気が収まると、今度は急に目の前の『彼』が憎くなった。それは絶望的なま うそだ。いやだ。信じたくない。僕は目の前の彼に怨嗟の言葉を吐き続ける。 そして僕は、気が狂ったように――実際狂っているのだろう――僕の姿を映した鏡に向かっ

こんなに醜いのが僕なの? なんで、どうして、こんな、こんな――。 あのスカイブルーの瞳はどこ? 自慢の細い手足はどこ? 白い肌は? 栗色の髪は?

やがて、乱暴にぶつけたショックからか、頭の中でカランと音がした。何かの部品がはずれ

― そうだ

たようだった。

僕は思い立った。こんな体、いらない。粉々に壊れてしまえばいい。バラバラに砕けてしま

だから僕はさらに頭をぶつけた。激しく、全体重を乗せて、何度も何度も頭をぶつけた。痛

みは感じなかった。鏡にヒビが入り、僕の頭は少しずつ形を変えていった。

「おい、新入り! 何やってる!」

そのときだった。

背後から怒声が響いた。

一動くな! これは命令だ!」 男性は目の前まで来ると、濁りきった沼のような暗い目つきで僕を見下ろした。 すぐに灰色の作業服を着た男性が近づいてくる。その胸には社章らしきロゴマーク。 命令という言葉を聞いた途端、僕の体はピクリとこわばった。身がすくんだように動けない。

「承知しましタ……」 「充 電は……問題ないな。いいか、さっさと持ち場につくんだ!」

僕の声は、もう以前の少女のものではなく、電子音声になっていた。抑揚に乏しい機械的な

をぶつけていたのが大きめの姿見であることに気づく。周囲にはこれ以外にも大量のガラク 響きだった。 僕は混乱した頭のまま、キャタピラをキュラキュラと動かし、わずかに後退した。そこで頭

「さっさと行け! これは命令だ!」 その怒声に、また僕の体は硬直し、キャタピラが勝手に動き出す。

回も何十回も磨材を担ぎ、現場を往復した。立ち止まるとすぐに矢のような怒号が飛んだ。そ 蔵された安 全 回 路の強制命令コードが、抗いがたい力で僕を動かした。 ここはどこなのか、この作業は何のためなのか。そんなことは皆目分からなかった。僕は何

うやらこの廃材運搬が僕の仕事らしかった。

らしきものが山と積まれていた。他のロボットたちはそれを持ち上げて斜面を登っている。ど

ぬかるんだ斜面を百メートルも下りただろうか。そこには鉄骨やコンクリート片など、廃材が

そして僕は廃材を運び始めた。やりたくもない作業だったが、命令には逆らえなかった。内

のたびに僕の体は硬直し、催眠術をかけられたみたいに強制的に動き出した。 やがて、海岸線の向こうに灰色の陽が沈んでいった。それでも『労働』は延々と続いた。

深夜。やっと一日の労働が終わると、僕は他のロボットたちといっしょに近くの倉庫に集め

られた。倉庫内には瓦礫や廃材がうずたかく積まれており、その手前のスペースにはずらりと パネルの前に整列し、人間によって次々に電力供給ケーブルを連結されていった。その光景は、 灰色の四角い板が並んでいた。その一メートル四方の板は充電パネルだった。ロボットたちは

墓石から養分をもらう死者の行列のように見えた。 いケープルを押し込まれた。 僕も墓石の前で自分の順番を待った。作楽員が来ると、ガチャリと胸部の蓋が開けられ、太

そして僕は意識を失った。

や瓦礫を撤去するのが、ここにいるロボットたちの仕事だった。廃材はとにかく大量に積まれ ノイズは雨音。僕にだけ見えて、僕にだけ聞こえる雨だ。 アというノイズも収まらない。だから僕は、この現象を『雨』と名づけた。白い線は雨の滴で、 モノクロの視界には白と黒と灰色しかないので、色を識別できない。 ていて、どれも真っ黒に焼け焦げていた。何か巨大な建物を爆破処理した跡のようにも見えた。 廃材を越えた先には灰色の海が広がっている。いや、あの海は本当は青いのだろうか。僕の この日の労働内容も昨日と同じだった。廃材運搬――海岸線をびっしりと埋め尽くした鉄骨 その雨の向こうには、今日も百台以上のロボットたちが不ぞろいな隊列をなして廃材を運搬 相変わらず視界は悪い。古い映画のようにひっきりなしに白い線が入る。ザアザア、ザアザ あくる日も『労働』は続いた。

た即席ロポットだ。彼らは黙々と、そしてきびきびと廃材を運び続ける。 彼らに混じって廃材を運びながら、僕は昨日からずっと同じことを考えている。

している。たいていは胴体と手足の規格がミスマッチで、中古品とガラクタを寄せ集めて造っ

いったい僕は、ここで何をしているのだろう?

が僕だったはずだ。 博士によって造られ、博士といっしょに暮らし、博士のために働く、博士のロボット。それ

パーツの寄せ集めの体――双眼鏡のような目、小型スピーカーの口、寸胴なボディ、下半身の だが、今はどうだろう。あの白く温かな少女の体はもはやどこにもない。あるのはジャンク

そんなふうに、今日何度目かの自己嫌悪に陥っていたときだった。

廃材を運べ!」 転がる。 キャタピラ――見るたびに吐き気を催す僕の醜い体。 「ぼやっとするな百八番!」監督の怒号が飛ぶ。「誰が休んでいいと言った!」 さっさとその ガンッ、と頭に衝撃が走った。すぐに握り拳くらいの石ころが目の前のぬかるんだ地面を

「申し訳ありまセン」

面を登っていく。 電子音声で謝罪の言葉を述べると、僕はまたよろよろとした動作でキャタピラを動かし、斜

本日四十三回目の往復が始まる。 どんよりとした灰色の空の下、陰鬱な作業は続いた。目の前の斜面には百を超える物言わぬ

同僚たちと、無数のキャタピラの轍。 そして僕は同じ問いを繰り返す。

いったい僕は、ここで何をしているのだろう?

僕は倉庫に入り、充 電ケーブルを差し込まれる。 その日もまた、夜が来て、一日が終わりを告げる。

スイッチを切られたときだけ、雨がやんだ。 八日目

ロで、空も海も大地もすべてが灰色に染まっている。あの『雨』もやむ気配はない。ザアザア 作業ロボット『百八番』である僕は、今日も廃材を運んでいる。あいかわらず視界はモノク 一週間が過ぎても、労働は同じことの繰り返しだった。

た。休憩時間はない。一日の労働時間が十八時間を下回ることもない。 と音を立てて何本もの白線が目の前を行き交う。 僕は一日におよそ百二十回前後――正確には百十六回から百二十八回の間で、現場を往復し

千回近く現場を往復して、いくつか分かったことがある。

中 継地点 『腸』まで運ぶ。胃と腸の往復、それが僕たちの仕事のすべてだ。 取り崩された廃材は一箇所に集められ、タワーのようにうずたかく積まれる。そこが『胃』で ある。僕たちロボットは、この『胃』に置かれた廃材を、斜面を登ったところにある内陸側の 海岸沿いでは、クレーンやショベルカーなどの大型重機が巨大な廃材の山を取り崩している。 まず、現場は大きく二つに分かれる。『胃』と『腸』だ。

時々キャタピラを地面のぬかるみにとられる。廃材搬出用のトラックが海岸線まで乗り入れな 運搬する距離は往復二百メートルほどで、かなりきつい斜面になっている。足場は悪く、

じったらしいが、由来はよく知らない。 いのは、この地盤の緩さにある。 ちなみに廃材は『ジャンクフード』と呼ばれていた。ジャンク、つまりガラクタのことをも

だろうか。現場の周囲はぐるりと高い鉄条網に囲まれており、ものものしい雰囲気を醸し出し 片。時々、武器や爆薬のような残骸も見受けられた。とすると、ここは軍隊の関連施設か何か 廃材にはさまざまな種類があった。ひしゃげた鉄骨、コンクリートの瓦礫、焼け焦げた金属

112

員数十名が廃材の仕分けをしている。 は大腸と小腸のように渦巻き状に設置されている。コンベアの前にはガスマスクをつけた作業 腸まで運ばれると、ベルトコンベアに乗せられる。腸という名が示すとおり、ベルトコンベア 僕たちロボットは、今日も『ジャンクフード』を『胃』から『腸』へと運び続ける。廃材は

視と命令だけだった。僕たちは奴隷のごとく毎日コキ使われ、食べカスを運ぶ蟻のように廃材 物質でも扱っているのだろう。 うだった。ガスマスクをつけている理由はさだかではないが、きっとロボットにとって有害な 監視員に怒鳴られるときに番号で呼ばれているところから察するに、やはり全員ロボットのよ 最初は、この作業員たちのことを人間だと思っていた。しかし、その動きのぎこちなさや、 要するに、この解体工事現場で働いている者はほとんどがロボットだった。人間の仕事は監

を運び続けた。一日が終わると僕たちは巣穴に帰った。

向き合ってしまったら、今の僕にはとても耐えられないという確信めいた想いがあった。 ときは、心の奥底に無理やりでも仕舞い込んだ。もし、それを正視してしまったら、ちゃんと そして僕はだんだんと物事を考えないようになっていった。いったい自分が何をしているの 僕はこの一週間、ずっと博士のことを考えないようにしていた。ふっと思い出してしまった

なくなった。 か、どうしてこんなことになってしまったのか――といった当初の疑問も日に日に思い浮かば

いつしか僕は、物言わぬ灰色のロボットたちの仲間入りをしていた。

[十五日目]

心の中に積み重なっていった。まるで、誰も住む者のいない人家に應と埃が積み重なっていく とが目に入ってくる。鋼鉄製の幽霊みたいな彼らの灰色の影は、日を追うにつれ、僕の空虚な へ、腸から胃へ。 こうやって、千八百十二回も同じ場所ばかりを往復していると、いやでも『同僚』たちのこ 天も地もすべての色が抜け落ちたモノクロの世界で、今日も僕は現場を往復する。胃から腸

たとえばこうだ。 そしてロボットの悲しい性分ゆえか、そのデータは整理され、一つの形を取るようになる。

113

既製中古品 ニメートル以上 ※『胃~腸』で廃材運搬に従事する者のみ。 ■作業ロボット総数 …百十台 四足歩行型 ジャンク寄せ集め …九十三台 二足歩行型 キャタピラ型 …八十二台 ■分類B (規格) ーメートル以上二メートル未満 …八十一台 ーメートル未満 ||分類℃(下半身駆動系) 分類A (身長) ※外見からの推測。 三台 …二十六台 …十七台 … 六台 …二十三台

114

おり、僕や他の同僚は日に三度はその穴にキャタピラをとられた。 を闊歩している。二足歩行型である彼の足跡は、まるで象が歩いた跡のように深い穴となって に黒い。その巨体は現場のどこにいても目立った。 て意味を持ち出す。 十五番は大変な力持ちで、何百キロもありそうな廃材の束を軽々と両腕に載せ、今日も現場 そして僕が関心を持ったのはもう一人。 酒樽みたいにずんぐりした灰色の胴体に、太くて力強い四肢。足元だけが長靴を履いたよう 僕は廃材を運びながら、レンズの角度を変える。 そう、彼ではなく、彼女といっていい、その二足歩行型ロボット――識別番号『三十八番』。 まず目に留まるのは、高さ・横幅ともに二メートルを超える大型ロボット――識別番号『士 ――いったい、なんだろう。 それが、十五番と三十八番だった。 しかしあるころから急速に、この数字――特に分類Cの『二足歩行型…二台』が、僕にとっ これらは当初、何の意味も持たない無機質で無感動な数字だった。

115

身長は僕より頭ふたつ分ほど高く、目測で一メートル四十センチ前後。カーペンター仕様の

った足取りで、今日も肩に魔材を載せて現場を往復している。彼女は元気ハツラツとい作業服を着て、長い髪をリボンで結わえて右肩の前に垂らしている。彼女は元気ハツラツとい 百台以上いるロボットたちの中で、彼女ほど『人間らしい』容姿の者はいない。その体もジ

ャンクの寄せ集めではなく、手足も胴体もすべてオリジナルのパーツで出来ているように見え

多いのだ。時々並んで歩き、何か話をしている。 そして、この三十八番の少女ロボットと、十五番の巨漢ロボットは、いっしょにいることが いったい何を話しているのだろう。二人は何者なんだろう。僕は魔材を運びながら、気がつ

くと二人のことを考えていた。

どうしてこんなに気になるのかは、自分でもよく分からない。

ただ、二人の姿を目で追っている間だけは、つらい現実からほんの少し解放される気がした。

三十二日日

ロボット――十五番と三十八番だ。 僕は今でも『あの二人』のことが気になっている。ずんぐりした巨漢ロボットと小柄な少女 この現場に来て一ヶ月が経過した。

一人は対照的なコンビだった。

まず、巨漢ロボットの十五番。

向けにひっくり返った昆虫みたいに手足をばたつかせている様子は、言っては悪いが滑稽その くさえあるのだが、次の瞬間にはぬかるみに足をとられて横転していたりする。それも、仰 彼は図体は大きいが、動作が鈍かった。のしのしと巨大な廃材を抱えて前進する姿は勇まし

一方で、少女ロボットの三十八番は俊 敏だ。他のロボットの間を風のようにすり抜ける。

『よっ!』『元気?』『お先に!』という一言で、ポンと巨漢の腰のあたりを軽くタッチする。 その姿は猫とかリスとか、小さくてすばしこい動物をイメージさせる。 そんな感じで、二人は昔からの親友みたいなコンビだった。 少女は巨漢ロボット十五番とすれ違うとき、たいてい何か話しかけていく。そのほとんどが

ければ協力関係もない。 ットという『タテ』の関係しかなく、ロボット同士の『ヨコ』の関係は存在しない。会話もな と廃材を運び、夜になればスイッチを切られて終 了。そこには命令する人間と服従するロボ

そもそもこの工事現場には、他の同僚ロボットとの『交流』という概念はない。朝から黙々

ただ、二人と僕の間にはなかなか接点が生まれなかった。

会話のできるロボットは何も十五番や三十八番だけではない。人間の監視員に命令されれば

「ハイ」「承知シマシタ」「申シ訳アリマセン」という受け答えをしているロボットは数多く見 た。ぶつかったときに「スミマセン!」と謝ってくれた者もいた。 だが、僕がここに来て一ヶ月の間、十五番と三十八番の二人を除いては、ロボット同士で会

話を交わしている光景はついぞお目にかからなかった。 だからこそ、あの二人は百台以上いるロボットたちの中で、特異な存在だったのである。

中継地点『腸』まで廃材を運び終えて、来た道を引き返す僕に話しかける者がいた。 接点が出来たのは突然だった。ここに来て四十四日目の朝。

に、ポケットだらけの大きめの作業服。切れ長の大きな瞳がまっすぐに僕を見つめている。 「ちょっと、あなた**」** 少女は上からぐいっとその白い顔を僕に近づける。僕は思わず体をのけぞらせる。こんなに 振り向くとそこには、あの少女――識別番号『三十八番』がいた。ほっそりした華奢な体躯 ハイ?

気持ちが高ぶったのはいつ以来だろう。 「番号はいくつ?」

前はリリス。よろしくね」 たいに生命力と活気に満ちていた。 ていなかったせいもある。 だった少女に急に話しかけられて驚いたこともあるし、ここ一ヶ月半ばかりまともな会話をし た長い髪が、胸の前で振り子のように揺れる。その姿はとても愛らしくて、真夏のヒマワリみ 『百八番……じゃあ、かなり最近ね』少女は歩きながら自己紹介をした。『私は三十八番、名 「えっと……僕は……、百八番、デス」 「自分の識別番号は……覚えてない?」ほら、現場監督があなたを指して呼ぶときのナンバー 何とか答える僕。無機質な電子音声は、いまだに自分のものとは思えない。 僕が「ば、番号、ですカ?」と要領の得ない返事をすると、少女はちょっと困った顔になっ そう言って少女は腰に両手を当てて、ちょっとだけ小首をかしげた。大きなリボンで結わえ とっさのことで、僕は少女が何を言ったのか理解できなかった。今まで遠くから眺めるだけ

「あ、止まらなくていいわ。動いてないと怒られるから。……それで、あなたにちょっと訊き

リリス。僕は少女の名前を知る。僕の名前にちょっと似ているな、と思った。

「ここ最近、なんで私ばっかりジロジロ見てるのかな?」 そこでリリスは、僕のことを興味深そうにじっと覗き込んだ。

「あ、いやいや」リリスは軽く手を振った。「別に謝れってわけじゃなくてね。なんで私を見 僕は何と答えてよいか分からず、とりあえず「申し訳ありまセン」とお詫びの言葉を述べる。 すっかりバレていた。

たぶん、十五歳に設定されていた以前の僕よりも低い年齢だ。 「えっと……その……、お二人のことが、気になったんデス」

てるのか、単純にその理由が気になるのよ。……まさか一目ぼれ?」

リリスはフフッと微笑むと、その大きな瞳を優しげに細めた。彼女の顔だちはだいぶ幼い。

お二人?

「リリスさんと、十五番さんのことデス」

「十五番……ああ、ボルコフのこと?」 ボルコフ。僕はそこで十五番の巨漠ロボットの名前を知る。

「なんで気になったの?」とリリスは質問を続ける。

材を担ぐ。そして踵を返して『腸』に向かう。 そこで僕は『胃』に着いたので、答える前に廃材を持ち上げる。リリスも同じように肩に廃

「お二人が、仲がよさそうだからデス」 「あら、そう見える?」 会話が再開される。

リリスはちょっと声のトーンが上がった。その顔は口元がほころび、なんだかうれしそうだ

それから十五分後

「……へえー。それで、私たちのことをずっとストーキングしていたわけだ?」

「いえ、ストーキングではないデス……」

でに三往復目だ。 『ボルコフさんとは、以前何度か隣になったこともあったんデス。でも、その……、無視され 僕たちは魔材を持ったまま『腸』に向かって歩いている。リリスと並んで歩き始めてからす

から無視したんじゃなくて、気づかなかっただけだと思うわ」 「ああ、それねー」リリスは肩をすくめる。「あの人、視覚も聴覚もずっと調子が悪いの。だ

てしまって」

夫婦みたいで不思議な印象を受ける。 **リリスはさっきから、ボルコフのことを『あの人』と呼ぶ。それがなんだか長年連れ添った

122 「だからね、あの人を呼ぶときはこうするのよ」 「なるほど、そういうことでしたカ」 そこでリリスは、前を歩いているボルコフの腰のあたりを、トントン、と軽くノックした。

そして公衆トイレに入るときみたいにこう尋ねた。 「入ってますか? 入ってますか?」

するとボルコフは、くるりと振り向き、「オー、入ってる、入ってる」と本当にトイレに入

するのよ。そうしないといつまでも気づいてくれないんだから」 やって腰のあたり――それもココ、このちょっと地金が見えてる十センチ四方の区画をノック っているみたいな返事をした。 「この人ね、元々軍事用のロボットとして造られたの。だからちょっと……戦場でいろいろあ 「ハア……、コツがいるんですネ」 「ほらね」リリスは僕に太陽のような明るい笑顔を向ける。「ボルコフと話したいときはこう

って、故障がちなのよ」

「リリスさんはボルコフさんのことに詳しいんですネ」

「そのリリス『さん』って言うの、できればやめてくれない?」 そこでリリスは、魔材を持っていないほうの手で僕を制した。

```
「そ、そう?」リリスはちょっと嬉しそうな顔をする。「……で、この人がポロコフ・ガロッ
「ボロコフ、違う。ボルコフは、ボルコフ」
                                 「あなた、いっそ『ボロコフ』に改名しない? そっちのほうが似合うわよ」
                                                                   「リリス、名前、間違えた」
                                                                                                    「あら聞こえたの」
                                                                                                                                      「違う、ボルコフ・ガロッシュ」と巨漢は即座に振り向いて訂正した。
                                                                                                                                                                                                                                                                        「サンライト……いい名前ですネ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                          「もう友達なんだし、呼び捨てでいいわ。私はリリス・サンライト」
                                                                                                                                                                                                                                       僕は素直な感想を述べる。太陽みたいに明るい彼女にぴったりの名前だ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               リリスは眉を少し上げて、幼さと聡明さを併せ持った大きな瞳を僕に向けた。
```

いとこの『出』なんだろうし」

僕は久しぶりに、その名前を口にした。

「そうだ、あなたも名前くらいあるんでしょ? これだけ受け答えできるってことは、元はい

「まったく、あなたは本当に冗談が通じない人ね……」

リリスはいたずらっぽくクスクス笑うと、僕のほうに振り向いた。

124 「僕はアイリス。……アイリス・レイン・アンヴレラ」 「アイリス……? へえ、女の子みたいな名前ね」

「えっと、それは……」

「コラ、私語は禁止だ! 十五番、三十八番! えっと……百八番!」 そこで現場監督から怒声が飛んだ。

「申し訳ありませーん!」と大きな声で謝ったあと、リリスは僕を見てペロッと舌を出した。 それからの僕は、二人といっしょに行動することが日に日に多くなった。この現場に来て初

めて見つけた友人だ。 あの『雨』は相変わらずやまない。モノクロの視界に、ザアザアというノイズ、無数の白い

凝線

てもおしゃべりだ。 『胃』から『腸』に向かう途中、雨の向こうではリリスが楽しげにしゃべっている。彼女はと それでさり

『現場監督が、『やい十五番、ボーッと突っ立ってんな!』ってボルコフを蹴飛ばしたわけ」

ったのよ? そしたら後ろにいた監督にあの巨体がのしかかってきたわけ」 「申し訳ありません。いま、座ります……だってさ! 『突っ立ってんな』と言われたから座 「で、あの人、なんて答えたと思う?」 「ハイ」と僕は相槌を打つ。 「なんて答えたのでしょうカ」

「それは危険デス」

「そこで監督が出したギャアアッて叫び声、ケッサクだったわ」

「そういえば、リリスはボルコフとどうやって知り合ったんですカ?」 「それは傑作デス」 リリスが声を上げて笑う。そのお日様みたいな笑顔を見ていると僕まで愉快になってくる。

それで、ちょっと似ていたの」 の現場で、かれこれ一年くらい前になるかな。私が来たときボルコフはすでに働いていて…… 「ああ、それね」リリスは形のよい眉を上げる。「大したことじゃないのよ。会ったのはここ

ク屋で働いていたの。で、そのライトニングもやけに図体が大きくて、おまけに鈍かったんだ」 「似ていた……誰にですカ?」 「昔の知り合い。ライトニングって名前のロボットで、私、一時はその人といっしょにジャン このときリリスはちょっと遠い目をした。

「だから、かな。ボルコフを見て気になったの。……それで話しかけてみたら、なんとなく会

もそれは人間たちの昼食体憩で、僕たちロボットに休憩時間はない。あるのは夜の充 電時間 話するようになって……」 そこで、ウーウーとサイレンが鳴った。これは昼食体、憩の終わりを告げる合図だ。もっと

リリスは僕から離れて、前のロボットたちの間をすいすいとすり抜けていく。その背中では

リポンで結ばれた長い髪が振り子のように元気よく弾む。 いる。そして、その大きな体に「入ってますか?」とノックする小柄な少女。 と歩いている。ボルコフだ。彼は今日も大きな足であちこちにトラップのごとき穴を量産して 僕は二人の親しいやりとりを見て、なんだか心がほんわかとする。こんなに温かい気持ちに 彼女の向かった先に視線を向けると、体ひとつ分くらい飛び抜けた大型ロボットがのしのし

なったのは久しぶりだった。

る。それが素直に嬉しかった。 けれど、以前よりはうじうじと悩まなくなった。あの二人は僕をありのままに受け入れてくれ 僕は内心で二人に感謝した。自分のこの変わり果てた容姿のことも、まだ引きずってはいた

僕に表情があれば、きっと微笑しているところだ。

ここでは識別番号順に並べるなんてことはしない。倉庫に僕たちを収納するのは、主に盗難 その日も一日の労働が終わり、僕たちはいつものように倉庫に集められる。

「ねえ、アイリス」 その日は、リリスが僕の隣に座った。 防止と充電のためなので、座る場所などはどこでもいい。

「エ? つきあう?」 「ハイ?」 リリスは小声で「今夜は、つきあってね」と言った。その唇は意味ありげに微笑をたたえて

と、思っていたが。 充電ケーブルが差し込まれると、すぐにスイッチが切られる。目が覚めるのは翌朝だ。 彼女の言葉の意味を訳き返そうとしたときには、もう監視員が近くまで来ていた。

)

122

誰かの声が聞こえる。

ザアザアといういつもの雨の中、僕は目を覚ます。 ――わえ、アイリス!

|....リリス?| 雨の向こうには見慣れた少女の顔。

「あ、やっと起きた。……あなた、起動にずいぶんと時間がかかるのね」 リリスは僕の体から充電ケーブルを引き抜き、パタンと胸部の蓋を閉める。

んでいるはずだ。 「そう、まだ夜よ。午前二時くらい」 「……アレ? 夜?」 そこで僕は、あたりがまだ暗いことに気がついた。いつもなら倉庫の窓から日の光が射し込

「午前二時……」 僕は倉庫内をきょろきょろと見回す。こんな時間に起きたのは初めてだった。

「アイリス、あなたを招待するわ」リリスがなんだか楽しげに微笑む。

「……招待?」僕は首をかしげる。 すると、少女は軽やかなステップを踏んで一歩後ろに下がり、舞踏会にでも誘うように白い

右手を僕に差し出した。

「ようこそ、真夜中の読書会へ」

にしない。そんなロボット一台一台の上では、行く宛のない人魂のごとく充電ランプが明滅を 墓石のような充電パネルの前には、ずらりと並んだ同僚ロボットたち。もちろん誰も微動だ 夜の倉庫は不気味だった。

内部に右手を突っ込んでごそごそといじる。 リリスはボルコフの充電ケーブルを両手で持ってはずした。それから彼の胸部の蓋を開け、 が尻尾のように差してあり、充電中である証に差込口のランプがチカチカと点滅している。

人魂行列の一番最後には、見慣れた巨漢ロボットが座っていた。そのお尻には太いケーブル

よいしょ!

続けている。僕とリリスは、百を超える人魂の合間を縫うように進んだ。

「起きろポンコツ」 数秒後、ウインと低い音が倉庫に響き、ボルコフの目に明かりが灯った。

リリスはたまに口が悪い。

「しっ! もっと小さい声でしゃべる!」 リリスがボリュームを抑えた声で注意する。 ボルコフは座ったままの姿勢で「ボルコフ、起動中、動けない」と答えた。

130 「どうして、リリスは一人で起きられたんですカ? スイッチを切られたのに……」 ボルコフの起動を待つ間、僕は気になっていることを尋ねた。

「ああ、それね」

「私のバッテリーは充電起動タイプなの。つまり、充電が完了したら自動でメインスイッチ リリスは自分の胸を誇らしげにちょんちょんと親指で触った。

が入る仕組みなわけ」

でもすぐに別の疑問が湧く。 「だけど充電起動スイッチなんて、よく人間に没収されなかったですネ」

僕はなるほどと思った。それなら人間にスイッチを押してもらわなくても自分で起きられる。

ロボットが夜な夜な倉庫内を歩き回っているようでは、わざわざスイッチを切った意味がな

「なーに、簡単簡単。現場に長くいるとね、いろいろな工具や部品を運ぶ機会があるの。だか

僕はなかば感心、なかばあきれながら聞く。 慢げに話し始めた。『戦利品』を嬉々として紹介する彼女に、悪びれた様子はまったくない。 している)、書籍や音楽ディスク、はては録音機器のたぐいまで廃材から探し出したことを自 ら時々ちょろまかしてるわけ」 それから彼女は、この現場でたいていの日用品が手に入ることや(ただし汚れているか故障

```
しのけられ、三メートル四方くらいのスペースが出来ている。木製の小さな丸テーブルの下に
                                                                                                                              体がゴロゴロしていた。ロボットのパーツだろうか。ジャンク屋を二、三軒は開業できそうな
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            い影法師を伸ばす。暗がりの中で鋭く光る両眼は迫力、満点だ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       「ま、細かいことはあとで話すわ。とりあえず移動しましょ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      「ああ、安 全 回 路の違法行為禁止コードのことね。それなら大 丈 夫、だって私――おっと」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                   「大丈夫大丈夫。二、三時間なら楽勝よ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  「あの、こんな中 途半端な充電で大丈夫でしょうカ?」
                                     そんな魔材の山を掻き分けて先に進むと、少しばかり開けた場所に出た。そこだけ魔材が押
                                                                                                                                                                         倉庫の奥には廃材がうずたかく山となっており、キャタピラの残骸や人間の手足のような物
                                                                                                                                                                                                                   僕はキャタピラを動かして彼女のあとに続く。ポルコフものしのしと後ろからついてくる。
                                                                                                                                                                                                                                                             ハア……
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       そこでボルコフがゆっくりと立ち上がった。その巨体がギシギシと音を立てて、倉庫内に長
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            リリスが倉庫の奥へと歩き出す。
```

「でも、ロボットには違法行為ができないはずですよネ? どうしてリリスは物を盗んだりで

はカーペットが敷いてあり、ボロさを気にしなければ映画の撮影セットに見えなくもない。

132 僕たち三人は、テープルを囲んで座った。

「倉庫内にこんなところが……」僕は少々驚きながらあたりを見回す。テーブルの四方を囲ん

だガラクタが、今にも雪崩を起こして襲いかかってきそうだ。

一ところでアイリス」 「字は読める?」

万歳!」

「……三流魔神ウェザー・ダーク」

リリスの取り出した本は児童文学だった。僕はタイトルを読み上げる。 リリスはテーブルの下を手で探ると、一冊の分厚い本を取り出した。

寄りかかっており、その左手には白い指輪が光っている。僕もタイトルだけは聞いた覚えがあ

表紙には真っ黒なコートに身を包んだ若い男性(けっこうな美男子だ)がキザな感じで壁に 大げさに褒められて、僕はちょっと照れくさくなる。本には『対象年齢八歳から』と書かれ

「私さ、今ちょっと文字が読めないんだよね。言語読解オプションが故障しちゃっててさ。ボ

るので、わりと有名な作品かもしれない。

ており、特に難解な書物ではない。

「イヤー、これくらいは……」

さぐような行為だ。 ルコフは一応読めるんだけど、小さい文字がほとんどダメなの。……だからこうやって」 そう言うとリリスは本を開き、ボルコフの顔に近づけた。まるで、本でボルコフの視界をふ

五十ページ読むのに三ヶ月もかかっちゃった」と肩をすくめた。 ら同じ要領で「ウ」「ェ」「ザ」「ー」と続けた。 「ボルコフ、がんばった」巨漢ロボットは胸を張った。 そこでリリスは本を閉じ、「こんなふうに一文字ずつしか読めなかったの。……おかげで、 するとボルコフは「魔」と発音した。リリスが本を動かすと、彼は「神」と発音し、それか

| えらいえらい| 「ボルコフ、えらい」 「うんうん、がんばったねー」幼稚園の先生のようにニコニコするリリス。

しそうだ。この二人はいったいどういう関係なんだろう。 リリスは立ち上がり、子供をあやすようにボルコフの頭を撫でる。ボルコフもなんだかうれ

「お礼はするからさ、ちょっとこれ、読んでくれないかな?」 彼女は僕の顔を覗き込んだ。

「エエ、かまいませんが……」僕はリリスから本を受け取る。「どこから読めばよろしいです

134

あ、ボルコフはもう帰っていいわよ?」

『できれば最初からお願い。こんなに面白い本、一気に読んじゃったらもったいないし。……

リリスがちょっといじわるい声で言うと、ボルコフの目がピカッと光った。

「ボルコフも、続き、知りたい」

「冗談、冗談よ。……ホント、冗談が通じないんだから」 「リリスだけ、ずるい」 リリスはコロコロと笑う。ボルコフをからかうときの彼女は実に楽しそうだ。

ズ第一巻『魔力を使わない魔神』。……えー、序章』 「じゃあ、読みますネ」僕は本の最初のページを開く。「三流魔神ウェザー・ダーク。シリー

こうして、三人だけの『真夜中の読書会』が始まったのである。

と?』その質問に対し、指輪はためらった様子もなく、「左様でございます、ダーク様」と答 「『それで?』ダークは冷やかすような声で言いましタ。『世界を破滅させるのが魔神の仕事だ 僕は本をゆっくりと朗読する。

ったまま時々日をピカッと光らせる。二人ともこの本がかなり好きみたいだ。 三十ページほど読んで分かった『三流魔神ウェザー・ダーク』のあらすじはこうだ。 隣ではリリスが大きな瞳を輝かせ、テーブルから身を乗り出して聞いている。ボルコフは黙言

主人公のウェザー・ダークは魔神である。魔界の一部を支配する領主で、家はそれなりの名

門なのだが、ダーク自身は魔神の仕事にあまり興味がない。魔力を使って他国を侵略すること ようにするのが彼のライフワークだ。 も人間界に災厄をもたらすこともなく、魔界の各地で集めたアイテムを修理してはまた使える そんなダークに仕えるのが魔法の指輪『フラウ・スノウ』だ。彼女は初雪のように真っ白な

美しい指輪で、その声は氷のごとく透き通っている。しっかり者の彼女は、アイテム修理ばか

りでちっとも魔神の仕事をしない主人をいつも叱りつけている。でもダークは仕事そっちのけ

で、今日もフラウの目を盗んで性 懲りもなく城を抜け出してしまい――。 「アイリス、続きは? ダークはなんて言ったの?」 リリスが僕の腕をぐいぐいと引っ張り、先を促す。ついさっき彼女がまだ読んでいない箇所

に突入したらしく、それからは「早く早く」「続きは続きは?」と矢の催促だ。

に言いましタ。すると彼女はムッとした口調で叱りマス。『お言葉ですが、ダーク様。あなた のアイテムに頼ってもいいじゃないか?」ダークはいつもの不真面目な調子でフラウ・スノウ 「ハイ、では続きを。……『なあ、フラウ。俺は魔力が弱いんだ。だからちょっとくらい魔法

れでは亡くなった先代様に顔向けできません」」 は魔力が弱いのではありません。ただ単に修行を怠っているだけです。ああ、嘆かわしい。こ と奇怪な化け物に姿を変える。そして化け物はダークの寝室に忍び込み――。 そんなやりとりがあった夜。ダークが寝床につくと、拾ってきた魔法のアイテムはむくむく

して! 「明かりを消して!」 すぐにボルコフが目から出していたライトを切る。僕も視覚装置の照明をオフにする。 突然、リリスが唇の前で人差し指を立てた。

か。サーチライトが寝静まったロボットたちの上を右に左に移動する。 見回りよ すると、倉庫内をぼんやりとした明かりが移動し出した。懐中 電灯を持った警備員だろう リリスは唇に人差し指を当てたまま、倉庫の入り口に鋭い視線を向ける。

やき、テーブルに戻ってきた。 れでも僕は、こちらに光が当たるたびに緊張で身を硬くした。 僕はほっと胸を撫で下ろす。ボルコフも「フー」と声を出した。 五分後。ガラクタの隙間から様子をうかがっていたリリスが、「行ったようね……」とつぶ

大量のガラクタが周囲に積んであるため、入り口からは『ここ』が見えないはずだった。そ

```
没収でしょうね」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    照らして終わりだから。いちいち台数を点検したりしないし」
                                                                                                                             とあとで怪しまれるし」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     「もし見つかったらどうなるんでしょうカ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       「なーに、ちょろいちょろい」リリスが軽い調子で言った。「 巡 回なんてちらっと懐中電灯で
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      「よくバレなかったですネ」
                                                                                                                                                            「すごーく気になるけど、今日はここまでにしましょ。ちゃんと最大値まで充 電しとかない
                                                                                                                                                                                           「続きはいいんですカ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                      「さあね……。さすがに、いきなりスクラップはないと思うけど。……ま、とりあえずこれは
                                                              続きは明日の深夜二時、ダークが物音に気づいて目を覚ますところからだ。
                                                                                             この日の読書会はそれで終わった。
                                                                                                                                                                                                                       彼女は僕から本を取り上げ、テーブルの下に隠す。
[六十九日目]
```

天も地も殺風景なモノクロの世界で、今日も僕は働き続ける。やまない雨と、終わりなき往

138 今ではボルコフともだいぶ話すようになった。「入ってますカ?」と大きな体をノックする 時々リリスが横に並び、ちょっとおしゃべりをしては去っていく。

だ。一巻から五巻までの展開を要約すると、『毎回魔神ダークがお城を抜け出して未知の魔法 『三流魔神ウェザー・ダーク』は早くも六巻目に突入した。全部で八巻セットだからもう終盤 と、彼は振り向いて「オー、入ってる、入ってる」と妙な返事をする。 そして夜になればお待ちかねの『真夜中の読書会』が開かれる。僕が読み始めて二週間、

ウも、時が経つにつれ心配になり、少しずつ自分の『本当の気持ち』に気づいていく。普段は ダークのことを叱りつけていた彼女だったが、実は――という感じで二人の関係もちょっとし ふらりと旅に出てしまい、連絡がないまま一ヶ月が過ぎてしまう。最初はカンカンだったフラ すっかり夢中だ。 銀の指輪のやりとりが実にコミカルで、今ではリリスやボルコフだけでなく僕も物語の続きに んでもないシロモノで……」というパターンだ。どの巻も、とぼけた黒衣の魔神とマジメな白 アイテムを持ち帰る』→『魔法の指輪フラウ・スノウに叱られる』→『そのアイテムが実はと だけどこの第六巻では、今までのパターンとちょっと違ってくる。ダークはフラウを置いて

なってから二ヶ月が過ぎたことを意味する。 そんなふうに時は流れ、いつの間にかここに来て二ヶ月が経過していた。それは博士が亡く

そのことについては、深く考えないようにしている。

夜の闇が支配する倉庫内で、ロボットたちの充。電ランプが蛍のごとく瞬く。倉庫は片隅だ

けが朧月のようにほんのりと明るく、そこが僕たちのささやかなパーティ会場だ。 「ちょっと今のところ、もう一回読んでみて」 リリスが僕の肘をトントンと指で軽く触れた。彼女は気になった箇所があるとすぐに再読を

「フラウは思いましタ。自分は今まで、本当にダークの役に立ってきたのだろうか、と」

リリスが腕を組んだまま首をひねる。何やら腑に落ちない様子。

先代から長らくダーク家に仕えてきた彼女は、自分が教育係として十分に役に立っていると 作中の話だが、魔法の指輪フラウ・スノウは最近ずっと悩んでいる。

僕も、ああ、二人の気持ちは深いところで通じ合っているのだな、と思っていた。 ラウの言うことを聞いてきたし、彼女が本気で困るようなことはしなかった。本を読んでいる 自負してきた。対するダークのほうも、口では悪態をつきながらも、なんだかんだで最後はフ

140 これは今までになかったことだ。一人ばっちになったフラウは、急に不安になり、考え込んで ――ダークへの恋心も、きっと彼の迷惑になるに違いないと思い込んでしまうのだ。 るさいだけの邪魔な存在だったのではないか、と。それゆえ彼女は、自分の『本当の気持ち』 しまう。今までダークを一人前の魔神にしようと頑張ってきたが、彼にとって自分は結局口う

|.....フラウ・スノウはさ」

してきたんだから、もっと自分に自信を持っていいのよ」 「なんというか、心配性なのよね。ダークとは今まで充分すぎるほどいっしょの時間を過ご リリスが静かに言った。

リリスは悩める指輪の立場を擁護した。僕もそれは同感だ。

「でも、ダーク、戻ってこない。どうして?」 そこでボルコフが問う。

それは、その……」

ラウの肩を持っている。 僕はリリスほど心配していない。ダークは子供っぽくていい加減だけど、根は優しくて誠実

リリスが珍しく口ごもる。最近のリリスはすっかりフラウ・スノウ派で、ことあるごとにフ

な人だ。だからきっと、今は戻れない訳があるんだ。

「アイリス、そろそろ続きをお願い」

```
リリスが僕の肘をちょんとつつく。「では、再開しますネ」と僕は本を持ち直す。
```

僕の右手から生き物のように本が滑り落ちた。

アッ・・・・・」

「あら大丈夫?」とリリスが本を拾ってくれる。

のに苦労する。 から、こうも考えましタ」 「フラウは思いましタ。自分は今まで、本当にダークの役に立ってきたのだろうか、と。それ | すみまセン 僕は謝りながら本を受け取る。最近は、例の『雨』がひどくなることが多く、距離感を掴む

「今のセリフ、とても気になりませんカ?」 「どうしたのアイリス?」 「ダークの役に立てなくなったら、自分はどう生きていけばいいのだろウ」 リリスが怪訝そうに僕の顔を見る。 雨の中で、僕は文字を追う。飛行機雲のように文字の上を白い線が飛び交う。 僕は感じたことをそのまま話す。 そこで僕は本を閉じる。

「え? ……どのへん?」

「ダークの役に立てなくなったら、という部分デス」 フラウ・スノウのセリフは、この現場に来てから僕がずっと考えてきたことだった。 ――役に立てなくなったら、自分はどう生きていけばいいのだろう。

なった僕に、何の存在価値があるのだろう。 だけを繰り返す日々。そんな毎日に、いったい何の意味があるのだろう。博士の役に立てなく その疑問が今、魔神の役に立てなくなったフラウ・スノウの悩みと重なった。 一日中、休みもなく働き続け、夜になればスイッチを切られ、朝になれば起こされる。それ

だから僕はその疑問を口にした。

「あの、『生きる』って……どういうことでしょうカ?」

「はあ……生きる……」 最初はリリスだった。

彼女は困ったように首をかしげる。

「ああ、いえ、そういう意味ではなくてですネ」「死んでなけりゃ……生きてるってことでしょ?」「

僕は質問を補足する。

```
る。それがすべてでしょ?」
                                                                                                          ていらないの。バッテリーと部品交換を絶やさないようにして、スクラップになる日を遠ざけ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               ようだった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      生き方デス。すると、僕たちの生き方は、いったい何なのでしょうカ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 とか、『生き方』って、なんなんだろう、と思いまして』
「えっと、すみまセン。ということはつまり……」
                                                                                                                                              「もっといえば恵まれたロボットの考えね。……私たちみたいな貧乏ロボットは、生き方なん
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          「えっと、ほら……フラウ・スノウは、魔神ダークのために生きてますよネ?」それが彼女の
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             「悪いけどあなたの言ってることがさっぱりだわ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    「もっと言えば、そう……生き方。生き方デス。ロボットの僕たちにとって、『生きること』
                                                                                                                                                                                 |……ハイ? 暇人?|
                                                                                                                                                                                                                     「生き方がどうこうなんてのは、暇人の考えよ」
                                   彼女はドライな口調で言い切った。
                                                                                                                                                                                                                                                        彼女はあっさりと言った。
                                                                                                                                                                                                                                                                                            僕は興味津々で彼女の答えを待つ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               僕が必死に説明すると、リリスは「ああ……そういうこと」とやっと質問の趣旨を理解した
```

「つまり、生きるってのは、『生き抜く』ってことよ」

144

そこでボルコフが「少し、違うと、思う」とつぶやいた。 彼女は強く断言する。その言葉には力があった。

ス・サンライトに文句でもおあり?」 | ん?」リリスが眉尻を片方だけ上げて、ポルコフに向き直る。| ちょいとあなた、このリリ しかしボルコフはやっぱり冗 談が通じなかったらしく、「ボルコフ、文句、ある」と生真面 リリスは楽しげにボルコフをからかう。

「アイリスの、言いたいこと、違う」 彼は四角い目を僕に向ける。

目に答えた。

それを聞いて僕は嬉しくなった。僕の真意をボルコフが代弁してくれたからだ。

「リリスの、言ってるのは、生きるか、死ぬか。……アイリスの、言いたいのは、何のために、

「そうデス、そうデス! 僕の言いたいことは、今、ボルコフが言ってくれたとおりデス!

生き力の問題は、『何のために生きるか』ということなのデス!』 僕は興奮して思わず声が大きくなる。

「ボルコフは、どう思いますカ? 生き方の問題。僕たちは何のために生きるのカ?」 僕が早口でまくし立てると、彼は少しだけ間を置いてから、淡々と答えた。

いっぱい、殺した」 |それに、生き方なんて難しい問題| 「いいのよ、分からなくっても。……私だって分からないわ」 「でも、生き方、知らない」 「ボルコフ、殺し方、知ってる」 「ボルコフ、戦争した。ボルコフ、いっぱい、殺した。……人間も、ロボットも、いっぱい、 僕はその言葉を聞いて身がすくむ。リリスは真剣な顔でボルコフをじっと見つめている。 「ボルコフ、分からない」 ボルコフを見るリリスの目はとても優しかった。彼女は時々、こんなふうにボルコフを見る。 このとき彼の目が悲しげに光るのを、僕は見た。 そして珍しく多弁になった。 彼女はちらりと倉庫の窓を見た。 しばらくして、リリスが「……そうね」と静かに言った。 そう言うと彼は黙ってしまった。



る。ザアザアという雨音もあいかわらずで、他人の声もかなり聞き取りづらくなった。それで へと運ばれ消化されていく。 雨はひどくなるばかりだった。特に右側の視界がひどく、周囲の景色がすべて綴じまに見え 色の失われた灰色の世界で、今日も僕は現場を往復する。胃袋に溜まった廃材は少しずつ腸

も現場監督の怒鳴り声は嫌でも耳に入ってくるから問題はないけれど。

気にかかることはもう一つ。

僕が廃材を担ぐと、また、あの音がした。

ーカラン、コロン。

か聞こえるようになった。首を動かすたびに乾いた音が鳴る。 いで聞こえるようになったものだ。しばらくはなりをひそめていたが、また最近、何の拍子 この音は、僕が今の体に生まれ変わったばかりのころ、やけになって鏡に頭を打ちつけたせ僕の頭部の中で、その音は聞こえる。頭の内壁に、何か小石のようなものがぶつかる音だ。

この音はいったい何なのか――最近は動くたびにそのことが気になる。

148 だけである。たぶん内部のボルトかナットが外れて転げ回っているのだろう。 僕はカラコロと前に進む。歩くと音が出る幼児向け玩具に僕みたいなのがあったような気も もっとも、これは『雨』に比べれば特に何が困るわけでもない。ただ、カラコロと音が鳴る

そしてまた一日が終わり、読書会の時間となる。

するけど、記憶は確かではない。

安堵する一方で、何も話してくれないダークにショックを受ける。それで彼女はこの第六巻の たのか問いただすフラウに対して、彼は何も説明しなかった。フラウは彼が戻ってきたことに 最後に『家出』をしてしまうのだ。自分はダークにとって必要のない存在だと思い込んで。 「フラウ・スノウは、魔神の居城をあとにしましタ。とても静かな夜でしタ。……つづく」 あのあと、行方不明のダークは三ヶ月後にひょっこり帰ってきた。だが、どこに出かけてい 僕は『三流魔神ウェザー・ダーク』の第六巻を読み終える。これで、残すところあと二巻だ。

リリスがいかにも我慢ならないといった様子でうなり声を上げた。それから「失格よ!」と

「フラウがこんなに悩んでるのに! 何も説明しないなんてダークはご主人失格よ!」 「ハイ?」と僕は本から顔を上げる。

「最近のダークはちょっとおかしいわ。きっと新しいアイテムに夢中で足元が見えてないのね」 リリスが同意を求めて僕を見る。 なんだか鼻息荒く抗議するリリス。彼女がこんなに興奮するのは珍しい。

僕はダークを信じているので、そうは思わない。ちょっとだけ反論する。

ちらりとこの白い指輪のほうを見ましタ。でも彼は、何も言おうとしませんでしター―これ、 「そんなことないデス。ほら、ここに書いてありマス」僕は本をパラパラとめくる。「魔神は

ダークがフラウの悩みに気づいている証 拠デス」 「だったら、何か言ってあげればいいと思うけど」リリスがまだ納得してない様子で唇をとが

「それは気を遣ってるんですヨ。フラウの気持ちやプライドを尊重して、今はそっと見守って

とは、そこがちょっと違う。 いるのデス」 「うーん……私はそうは思えないけどなあ……」 ボルコフは黙っている。静かにリリスを見つめ、何も言わない。 最近のリリスはどうもフラウに肩入れしすぎている。基本的にダークのことを信じている僕

第七巻はさらに荒れた。

150 これには僕も驚いた。 なんと……!

ダークはフラウ・スノウが家出したあと、彼女を探すどころか、魔法で新しい指輪を作って

しまったのである! 「ダークは満足げに今作り出した指輪を空にかざしましタ。広大な銀世界を一点に凝 縮した

ような、すばらしい出来映えの真っ白な指輪デス」

「もう、もうもうもうっ!」

とか、悪魔! 人でなし!」 「バ、バ、バッカじゃないのっ? ダークはなんでフラウを探さないの? 新しい指輪を作る リリスが牛みたいにもうもう言って激高した。

「ぼ、ぼ、僕に言わわわれてモモモッ!」 リリスは僕の首根っこを掴んでプンプン揺らす。頭の中ではカラコロと例の音がする。

「ダークには、きっと何か考えガガガッ!」 と、僕も反論はしたものの、今回ばかりはダークの考えが分からない。

るのが彼のライフワークだけど、今回は修理じゃなくて一から作ったわけだし。それに今はフ なぜ、ダークはこんなときに新しい指輪を作ったのだろう。元々、壊れたアイテムを修理す

ラウを探すのが先だし……。

```
しタ。いつもなら家でダークの話し相手をしている時間デス……」
                                                                                                                                                                                                                        そもそも欠けているのだから見えるようになるはずもない。
                                                                                                                                                                                                                                                                                               んな大法滞だ。
                                   「そのころ、家出したフラウ・スノウは、魔神の居城からほど近い、魔界の川のほとりにいま
                                                                                                                                                 「いえ……なんでもないデス」
                                                                                                                                                                                    「ちょっとアイリス、どうしたの?」リリスが指先で、僕の腕を軽くつつく。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        「そのころ、家出したフラウ・スノウは、魔神の、居城から……ほど近い、魔界……の――」
                                                                          しめた。交通量が少し減っている。
                                                                                                              僕は再び本に焦点を合わせる。
                                                                                                                                                                                                                                                       落ち着いて瞳孔装置のピントを調節してみる。しかし焦点が合わないのではなく、視界が
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              雨がひどい。交通量の多い道路のように、白い線が文字の上を行ったり来たりする。たいへ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     そこで僕の声は途切れた。「……アイリス?」「ム?」と二人が不審げな声を出す。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                僕も続きが気になる。先を読む。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               リリスは不機嫌そうな顔を隠さず、それでも「続き、続きは!」と僕を急き立てる。
```

古い映画のように、モノクロの視界が幾重にもヒビ割れていく。

雨はザアザアと降り続ける。

雨のことは、誰にも話していない。

リリスにも言わない。ボルコフにも言わない。

黙ったまま、続きを神妙な顔で聴いているポルコフが好きだ。 目を輝かして、本の続きを催促するリリスが好きだ。 僕はこのささやかな読書会が好きだ。

「一人ぽっちのフラウは、寂しくて泣きたくなりましタ。思い出すのはダークのことばかりデ こんなふうに、優しく、静かに流れる時間が、切ないほどに愛おしい。

雨に打たれながら、僕は本を読み続ける。

Z-----

そして僕は、近いうちに光を失うだろう。 この雨は、もうやむことはないだろう。

あとほんの少しでいいんです。 でも神様、お願いです。一生のお願いです。

どうか、この優しい読書会が終わりを告げるそのときまで、僕から光を奪わないでください。

【七十八日目】

今日も僕は廃材を運んでいる。 いつもと同じ雨の日。決してやむことのない雨の日。

低くなってきた。それはこの解体工事が終了 間近であることを示していた。 廃材置き場『胃』の向こうに広がる、海岸線の一帯では、当初のころよりだいぶ瓦礫の山が

の頭の舞台でステップを続けている。 い作業に不安が残る。開けたはいいが、閉まらなくなっても嫌だし。 いっそ頭をこじ開けて取り出してみようか、と思ったこともあったが、この太い腕では細か 例のカランコロンという金属音は、覚えたてのダンスのような不規則さで、あいかわらず僕

そんなことを考えながら、単調な労働を続けていた僕は、その日の昼ごろに珍しいものを見

監視台の上で、いつもは像そうな現場監督がぺこぺことお辞儀をして、愛想笑いを浮かべて 現場監督が謝っているシーンである。

いた。よく見ると、監督の隣には背広を着た恰幅のいい中年男性がいて、あれこれと何か指図

をしている。

154 僕は魔材を運びながら、ちらちらとその様子をうかがう。その男性は監視台の上から僕たち ――お偉いさんかな。ひょっとすると、ここの社長さんか。

たい何の話をしているのだろうか。 に向かって何度か指を差すような仕草をした。そのたびに現場監督は急いでメモを取る。いっ 視線を正面に戻すと、ボルコフの大きな背中が目に留まる。その隣にいるのはリリスだ。

僕はキャタピラを速める。追いついたら、ちょっと訊いてみよう。

カラコロと金属音を頭の中で踊らせながら、僕は雨の中を進む。

「なんかおかしくない?」 そう言ったのはリリスだった。

一何がおかしいのですカ?」

深夜二時、いつもの倉庫、古びた木製の丸テーブル。読書会を始める前のことだ。

「ほら、アイリスも見たでしょ? あの太った男」

スが僕を見る。整った美しい顔だちが今は不満げに眉根を寄せている。 魔材から拾ってきたのか、小型のテープレコーダーを手慰みにカチカチといじりながらリリ

```
一十五分……」
                                                                                                                                                              「え? オーヴァル市のこと?」
                                                                                                                                                                                                      「オーヴァル……ここから、近いんですカ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                     「乗ってきた自動車にも同じマークがあったし、きっとオーヴァルにある本社から来たのよ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   「ここの会社のよ。監視員の制服に赤いロゴマークがあるでしょ。……なんて書いてあるかは
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           「本社……? どこの本社ですカ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |赤いロゴマーク……|
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   「そうそう。あれって、前も来てた『本社』の人よね?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          「あ、監督と話してた背広の人ですカ?」
その答えに僕は息を飲む。自動車ならたった十五分。この現場に来てからというもの、どこ
                                                                                                                      僕がうなずくと、リリスは「お隣さんよ。自動車なら十五分もかからないんじゃない?」と
                                                                                                                                                                                                                                             僕は『オーヴァル』という言葉にドキリとする。それは、僕と博士が住んでいた街だった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            僕には色が識別できないので、いまいちピンとこない。
```

「それでさ」リリスが話を元に戻す。「今日ね、変なことを聞いたのよ。本社のお偉いさんが か遠い異国の地にいるような気分になっていた僕にとって、その距離はあまりにも近かった。

帰ったあと、現場監督の会話で」 そこでリリスは声をひそめた。もっとも、そんなことをしなくても倉庫内は電源の落ちたロ

「この工事が終わったら、こいつらもお払い箱か、って」

「……? どういう意味ですカ?」

「だーかーら、お払い箱よ、お払い箱! 今の解体工事が終わったら、私たちスクラップって ウッ....! 僕は思わずうめく。スクラップと聞いて『あの日』のことを思い出す。四肢をもがれたあの

日。二度と、あんな思いはしたくない。 |.....あなたはどう思う?|

「まったく……」リリスは不満げな顔でボルコフの腕をトントンとつつく。「ちゃんと考えて 一ロボット、人間に、従う」 リリスが珍しくボルコフに意見を求めると、彼は即答した。

る? このままじゃスクラップよ?」

「ロボット、人間に、従う」ボルコフは同じ答えを繰り返した。

「いいわ、あなたに訊いた私がバカだった」

```
リリスは背後にあるガラクタに寄りかかる。
```

"でも」僕はリリスを見る。「僕たちにはどうしようもないデス」

逃げればいいじゃない」

「だけど強制命令コードがありマス」

「そんなの大 丈 夫よ。だって私、とっくに解除してるから」

だ。人間には絶対逆らえない、解除禁止のプログラム。

にね。だけど働かないと充電してもらえないから、こうやってずっと人間に従っているふり

「私ね、安全回路が壊れているのよ。四つ前の現場だったかな?」重機の下敷きになった拍子

僕は驚いた。ロボットには安 全 回 路があり、強制命令コードはその中でも最重要の部分

「私はそんなの絶対ごめんだわ」

157

「この人は軍事用だから」 「ボルコフ、安全回路、そのまま」 「うそ……じゃあ、ボルコフもですカ?」

僕は彼を見る。彼はいつもの低い声で「違う」と答えた。

リリスがボルコフを見て言った。

158 には負えなかったわ。……途中まではうまくいったのに、なんか変な黒い装置が邪魔して……」 「安 全 回 路が普通じゃないのよ。前にこの人の安全回路をはずそうとしたんだけど、私の手 ボルコフは胸を張って「ボルコフ、安全」と言った。リリスが「はいはい、安全ですね」と

気のない返事をする。 「だけど今度ばかりは、そう悠長なことを言ってられないのよ」

リリスはボルコフをじっと見た。

「あなた、本当にスクラップでもいいの?」

「ロボット、人間に、従う」

|はあ.....

「……まあいいわ。それよりアイリス、あなたの安全回路は今のうちに解除するから。いざと

ないが、彼女はポルコフのことをかなり気遣っている。

リリスはため息をつく。その顔は本当に困っているように見えた。普段はあまり態度に見せ

いうときに『緊急 停止ボタン』を押されても逃げられるように」 緊急停止ボタンとは、現場のロボットを一斉に停止させる非常用ボタンのことだ。現場監督

が腰にぶら下げているのを僕も見たことがある。

「できるわよ。私、前の現場じゃ同僚の応急修理だってしてたんだから。……見よう見まねだ 「解除? そんなことができるんですカ?」

けど

品だ テーブルの上のブラスチックケースに、一つ、また一つと小さなネジが置かれていく。 ーを近づける。 「ふーん、第三工場の処分品か。……なるほどね」 「大丈夫大丈夫! ……たぶん」 「は、本当に大丈夫ですカ?」 「動かないでね。特に精神回 路はデリケートだから」彼女は僕の背後に回り込み、ドライバ 一ジャンク屋?」 「あなたがこの現場に来るまでのルートが分かったのよ。いつものジャンク屋ね」 「何か分かったんですカ?」 リリスはウンウンと一人で納得している。 やがて、ガチャリと音がして僕の頭部が開いた。 さっそく脳天のあたりでキュルキュルと音がして、リリスが僕の頭のネジをはずし始める。 リリスはテーブルの下からドン、と工具箱を出した。もちろん、これも現場からの『戦利

き集めて『自作』するジャンク屋が増えてるのよ」

「ほら、ロボットって新品で買うと高いじゃない? だから、手とか脚とかの中古パーツを掻

160 それは僕も聞いたことがある。中古品を寄せ集めて造った、違法改造ロボットの話――たと

をたどれば、ロボット管理局の払い下げかなんかじゃない?」 「きっとあなた、現場監督がオーヴァル市内のジャンク屋から安く買い叩いてきたクチよ。元

着いてきた経緯を説明できる。 たぶん当たっている、と僕は思った。それなら僕がスクラップになってからこの現場に流れ

「うっそ……」そのとき、リリスが変な声を出した。

どうしましタ?

しかもオリジナル仕様ってどういうこと?」と興奮気味だ。僕はなんだか恥ずかしい。 「すごい、こんな小型の精 神 回 路、初めて見たわ……!」 リリスは僕の内部を見て、驚きの声を連発する。「すごい、安 全 回 路もこんなに小さい!

肩に乗る。 リリスは少し真剣な表情になって、横から僕の顔を覗き込む。彼女の長い髪がふわりと僕の

「……ハイ?」僕は首をかしげる。 「あなた、何者?」

「ボディはどのパーツも旧型なのに、精神回路はものすごいハイスペックじゃない。これって

どういうこと?」

り針は獲物を引っ掛けたみたいだ。 「なにこれ……ベンダント?」針金を持ち上げたリリスが不思議そうにつぶやく。 「いま、取り出してみるから」 「ちょっと待ってて……| 「今度はどうしましタ?」 「あ、なにこれ?」そこでリリスはまた驚いた声を出した。 「それは……」 銷? 「なんか、精神回路のところに鎖みたいのが引っ掛かってるの」 しばらくすると、カチャリと音がして、彼女の「よーし」という声が聞こえた。どうやら釣 リリスは工具箱から針金を取り出し、それをくにゃりと曲げて鉤状にした。釣り針のような 僕はふと、あることに思い当たる。最近、頭の中でカラコロと鳴っていた『あの音』のこと 僕の中で、影がよぎる。思い出したくない過去。心の奥底に閉じ込めてきた悲しい記憶。

僕が振り向くと、リリスは「ほら」と取り出したものをテーブルの上に置いた。

162 それはペンダントのように鎖がついていて、灰色で、楕円形をしていた。 いや、灰色ではなく、本当は銀色に光る――

シガレットケース。

震える手でケースを開けると、見覚えのある8の字型のシガレットがテーブルの上を転がり、 黒い機械油で汚れたケースには、乾いた血痕が生々しくついたままだった。僕はゆっくりと、右腕を伸ばし、そのシガレットケースを手に取る。

乗り手を失った自転車のごとく、ぱたりと静かに倒れた。

際には、背が高くて、ワイシャツとジーンズが似合っていて、いたずらっぽく微笑んでいる 映画の看板を背にして、麦藁帽子をかぶり、フリルつきのワンピースを着ている少女。その そしてケースの蓋には『あの写真』が貼ってあった。

ち破り、僕の外へと大挙してあふれ出す。写真の中の博士が僕に向かって腕を伸ばし、過去の 抑えてきた気持ちが、我慢してきた痛みが、愛しい想いが、深い絶望が、心の奥底の牢獄をぶ ケースを持った僕の右腕がガクガクと震え出す。その震えはすぐに全身に伝播する。ずっと

「ハカ……セ……」

手ね」褒めてくれる博士。「おやアイリスさん、何かご意見がおあり?」いじわるな博士。「あ の、アイリス君?」ちょっと困った顔の博士。「おやすみ、アイリス」優しい博士。でも死ん でもちょっとだけ乱暴に撫でる博士。「うん、やっぱりおいしい。アイリスは本当に料理が上 幸せな時間へと連れ戻す。「ただいま、アイリス。今日もいい子にしてた?」僕の髪を優しく、

でしまった博士。もう二度と会えない博士。博士、博士、ああ、博士博士博士博士博士博士博

「ウ、ア……ウアアアアアアアーーッ!!」

散り、僕の中の柔らかい部分に次々と突き刺さる。心から感情があふれ出し、それは波となっ て僕を溺れさせる。 的な叫び声を上げる。楽しかった思い出も、優しかった記憶も、すべてがガラスのように砕け 僕は慟哭する。テーブルに突っ伏して、自分でも恐ろしいくらい激しく痙攣しながら、絶望

を両腕で強く抱きしめた。 「アイリス!」そのとき、リリスが鋭く叫んで僕の背中に飛びついた。そして痙攣を続ける僕

ア、アアー 「大丈夫、大丈夫だから……!」

るのを待った。 僕はリリスの腕を掴み、ただ、耐えた。痛苦と哀しみの海に溺れながら、必死に時が過ぎ去

に感じる彼女の体はとても柔らかくて、温かくて、昔、博士がこうやって僕を抱きしめてくれ 泣き出した子供をあやす母親みたいに、リリスはずっと僕を励まし続けてくれた。背中越し

たことを思い出す。 少しずつ、少しずつ震えは収まっていく。

「……落ち着いた?」 リリスは黙ったまま心配そうに僕の手を握っている。ボルコフは静かにその様子を見守って 僕の痙攣はだいぶ収まり、手がいくらか震えるだけとなった。

たの?」と訊いた。 僕はこくりとうなずく。それから顔を上げて二人を見る。 それから彼女は、シガレットケースと僕を交互に見てから、ためらいがちに一これ……あな リリスが優しい声で尋ねる。僕は「ハイ……」と力なく答える。

リリスの大きな職が、とても心配そうに僕の姿を映している。 ボルコフの四角い目が、穏やかな光をたたえて僕の言葉を待っている。

彼女はまっすぐに僕を見つめた。

実は、私もさ それから彼女は、何度か瞬きをしたあと、意を決したように顔を上げた。

ばく、僕はちょっと引きつった顔で。

って、女の子みたいな名前だから……」

「そう……」リリスがケースの写真を見ながらつぶやいた。「変だと思ってたんだ。アイリス

テーブルのシガレットケースでは、あいかわらず僕と博士が笑っていた。博士はいたずらっ ほんの十分くらいだっただろうか。僕が一通り話し終えると、倉庫はまた静かになった。 右手の指先で「こっちが博士で……これが僕」と写真を示したときは、リリスの息を飲む音

が聞こえた。ボルコフもわずかに体をこわばらせた。

かったこと。ロボット管理局の役人が来たこと。そしてスクラップになり、気がついたらこの こと。博士が突然の事故で亡くなったこと。絶望のあまり自殺を図ったこと。でも死にきれな

だから僕は、堰を切ったように自分のことを話し始めた。高名なアンヴレラ博士に造られた 僕は真実を話そうと決めた。二人には話してもいい――むしろ知っておいてほしいと思った。

――そう、この二人には。

165

それから彼女は自分の身の上を話してくれた。

いがられた。彼女が豊かな表情を持っているのも、それだけ両親によってお金をかけられた証 ったという。服を買ってもらったり、いっしょに遊びに行ったり、まるで実の娘のようにかわ うという理由だった。 された。サンライト家は子供に恵まれなかったので、その代わりに子供型のロボットを育てよ 最初のうちは何不自由なく暮らし、『両親』から惜しみない愛情を受けて、リリスは幸せだ リリスは五年ほど前、『サンライト家』という名家に、オーダーメイドのロボットとして購入

だった。 分の妹が出来たと喜んでいたが、ことはそれだけではすまなかった。 事情が変わったのは家に来て二年後だった。両親の間に子供が生まれた。リリスは当初、自 両親は、リリスを捨てた。

て、彼女を拉致同然で引き取っていった。両親は見送りすらしなかった。 それは拍子抜けするほどあっさりしたもので、ある日、前触れなくロボット回収業者が来

後は建築会社を転々として、今の現場に至る。見た目は華奢だが、パワーや積載重量が大きい それから彼女は『中古品』として再販売された。最初は飲食店など接客業の店で働き、その

続けた。 ねた。ボルコフは黙ってうなずく。 にいたころ、ウロボロスって名前の部隊にいたの」 説明した。そして最後に、ボルコフ以外にこのことを話したのは、僕が初めてだと言った。 ので、今まで何とかしのいでこられたそうだ。 「そのウロボロス部隊は、ロボットだけの、キコー……えっと、なんだっけ?」 「そう、ウロボロス。元は神話に出てくる蛇の名前らしいけど。……それでね、ボルコフは軍 「ボルコフのフルネーム、覚えてる?」 「この人も、いっしょなんだ」 ウロボロス?」 「ボルコフ・ガロッシュ、ですよネ」 リリスはうなずく。そして「正確にはボルコフ・ガロッシュ・ウロボロスって名前なの」と 話を終えると、リリスはポルコフのほうに向き直り、「アイリスに、話してもいい?」と尋 それはとても悲しい過去であるにもかかわらず、彼女はまるで他人事みたいな口調で淡々と リリスがボルコフに視線を向けると、彼は短く「機甲兵団」と答えた。 僕の脳裏に「ポルコフ、殺し方、知ってる」というセリフが蘇る。

「そう、そのキコーヘイダンにいて、あちこちの戦場に派遣されたの。でもね、二十八番目の

型」は必要なくなったの」 「最新型のロボット兵器が開発されたからよ。だからそれと入れ替わりに、ボルコフたち『旧 「どうしてですカ?」

そういえば、昔見たニュースでそんな話があった気もする。

「でも、軍事用ロボットがなぜ工事現場にいるんですカ?」

相当ブラックな会社みたいだけど。……それにね、あんまり知られてないけど、軍のロボット 「一応ここも軍の関連企業らしいよ。もっとも、下請けのさらに下請けみたいなところだから、

管理ってものすごくズサンなのよ」

ーズサン?」

たり、古くなった機種が大量に横流しされたり」 「ボルコフ以外にもけっこう出回ってるんだから、元軍事用ロボットって。戦線縮小であぶれ

リリスは肩をすくめて言った。僕は返す言葉が見つからない。 薄情なものよね。勝手に造っておいて、いらなくなったらポイなんてさ」

「そうだったんですカ……」

「こう言っちゃなんだけどね……、あなたはまだ、マシなほうなのよ」 それから彼女はシガレットケースを持ち上げ、写真をしげしげと眺めながら言った。

```
「だってこの博士は、最後まであなたを大事にしてくれたんでしょう?」
                            マシュ
```

「でもそれは……」 リリスは両親に捨てられている。ボルコフは軍隊に捨てられている。 博士が亡くなった今、そんなことを言われても――と言い返そうとして、僕は口をつぐんだ。

あんなにかばったのか。 してもらえたんだから……」 「そうよ、マシよ、マシ」リリスはじっと写真を見つめ、儚げにつぶやいた。「最後まで、愛 僕は博士に――捨てられたわけじゃない。 僕はこのとき、やっと分かった。あのときリリスがどうして、魔法の指輪フラウ・スノウを

その日は、いつもと同じように始まった。 あの指輪は、リリスであり、ボルコフだったのだ。 新しい指輪が来て、居場所を失った古い指輪。 【八士三百旦】

朝、監視員によって叩き起こされる。倉庫から蟻の行列のようにぞろぞろと這い出た僕たち

は、代わり映えのしない単純作業に従事する。 事件が起きたのは昼下がりだった。昼食 休憩 終 丁のサイレンが鳴り響き、僕とリリスがそ

一アイリス」 ふいに、リリスの視線が鋭くなった。

一あれを見て一 一何ですカ?」

切れ長の瞳で、彼女は目配せをする。

指図をしていた『本社のお像いさん』だ。その手には携帯電話が握られている。 リリスの視線の先には監視台があり、そこには『あの男』が立っていた。以前、現場監督に ---あ.....。

さまれ…… 「いったい何を話しているんでしょうカ?」 男が通話を終えた直後だった。

な雰囲気を醸し出しており、頑丈そうなボディは警察の装甲車を思わせる。 現場にけたたましい排気音が響いた。見ると、いつもの魔材搬出 用トラックよりもさらに 回り大きな車が、現場の斜面の手前、『腸』のあたりで停まった。その真っ黒な車体は異様

```
お客さんの行列のように。
                                                                                                                                                                                                                                                              番、百十一番……」と僕の番号『百八番』も飛ばされる。それが何を意味するのかはまだ分か
「よし、始めろ!」
                                                                                                                                                                       「百十五番、百十八番。……以上だ!」呼ばれた者はすぐに集合だ!」グズグズするなよ!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               「何が始まったんですカ……?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      「十三番、十六番、十七番……」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       「今から呼ぶ者は『鵬』の前に至急集合だ! 二番、六番、七番、九番……」
                                                                                 五分もすると、さっきの大型車両の前にずらりと四十一台が整列した。まるで人気店に並ぶ
                                                                                                                            番号を呼ばれたロボットは全部で四十一台。この現場にいるロボットのおよそ三割に当たる。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 現場監督はまるで合格発表みたいな飛び飛びの番号を読み上げ始める。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       現場監督の怒声が飛ぶと、百台強のロボットたちは一斉に動きを止めた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                         僕は落ち着かない気持ちのまま、この唐突な合格発表を見守る。「九十六番、百二番、百五
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    僕がリリスを見ると、彼女は首を振った。そしてリリスの『三十八番』も飛んだ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           十五番であるボルコフの番号が飛ぶ。
```

現場監督が叫ぶと、黒い大型車両は、ゆっくりと荷台の扉を開き始めた。扉が持ち上がると、

内部にはゴウンゴウンと音を立てて回転する巨大な『ローラー』が見えた。僕はそれを見て街 を巡回するゴミ収集車を思い出す。ただ、今動いている車はその何倍も大きい。 最初は二番が呼ばれた。四足歩行型のロボットが、闊歩する馬のようにリズミカルに体を上

下動させて監督の前に出ていく。

転を続ける金属の顎が待ち構えている。二番は、一瞬 何のことか分からなかったらしく、黙証 「さっさとしろ! これは命令だ! ったまま監督を見上げた。 「この中に入るんだ」 その怒声に、ビクンと二番の体が雷に打たれたように硬直する。そして、二番の四本の脚は、 現場監督はそう言って、親指でぐいっと背後の車両を差した。そこにはうなり声を上げて回

ぎこちない動作で、一歩、また一歩とローラーへ近づいていった。 -----嘘 ギャリッ、と金属の擦れる音がしたかと思うと、二番の『前脚』がローラーの刃に挟まれて、 僕が声を漏らしたとき、二番は回転を続けるローラーの中に最初の一歩を踏み入れていた。 その途端。

プレス加工される金属板のように、上半身からゆっくりと押し潰されていった。凶 暴な鉄の ひしゃげた。そのままメシメシと前脚は潰されて、車の中へと吸い込まれていく。そして彼は

なかったが、僕にはそれがひどくスローモーションに見えた。 僕の体はガクガクと震え出す。 が識別番号二番であると分かる程度には、僕は彼を知っていた。四速歩行、旧型の量産機、H った。最初の一歩を踏み入れてから二番の体がすべて見えなくなるまで、ものの十秒とかから れ、いくつかのネジやボルトを周囲に撒き散らしながら、物言わぬ黒い悪魔に飲み込まれてい ろ脚が持ち上がった。その後ろ脚もギャリ、ギャギャリと砂利を噛むような音を立てて圧縮さ 類がベキベキと音を立てて彼を噛み砕いていく。 一続いて六番!」 二番と話したことは、一度もない。 現場監督が声を張り上げると、六番の体がビクリと震えた。 その彼はもう影も形もない。もちろん二度と会うこともない。その意涼たる恐怖の余韻に、 だが、彼の姿はこの三ヶ月でいつも視界に入っていたし、百台以上いる同僚の中で、『彼』 やがて、二番の体は上半身がローラーに飲み込まれて見えなくなると、逆立ちするように後 突如として始まった白昼の処刑劇を、僕たちは呆然と見つめる。誰もが微動だにできない。

遠レンズみたいな視覚装置がついている、かなり旧型の労働用ロボットだ。接点といえば、彼

彼のことも僕は知っている。僕と同じキャタピラ型で、頭部がない代わりに胸のあたりに望

がうっかりぬかるみにつまずいて、ぶつかったことが一度あるだけだ。そのとき「スミマセ ン!」と反射的に謝った彼の声は、僕とそっくりの電子音声だった。

でも。たったそれだけの関係でも。彼との接点はそれだけだ。

腕が一気に巻き取られ、ギチギチゴゴリと鈍い金属音とともに押し潰されていく。彼の腕が肩 口まで潰されると、さっきの二番と同様にその体は壊れたバネのごとく跳ね上がり、前転する 「入れ! これは命令だ!」 **六番はブルブルと震える両腕を供物のように前に差し出す。指先がローラーに触れた途端、**

わずか五秒あまりで、六番は完全に見えなくなった。

でも飛ばすように細かな部品が車外に吐き出された。

格好で下半身のキャタビラごと車の中に飲み込まれていった。時おり、ペッ、ペッと果物の種

ずっと調子が悪かった。動作が遅くなったり魔材を落としたりして監督にしょっちゅう怒鳴ら 説明がなくても分かった。四足歩行の二番も、キャタピラの六番も、今呼ばれた七番も、最近 処刑は続いた。これが古くなって作業効率の悪くなったロボットのスクラップであることは、

「次、九番!」

体もすべてを容赦なく噛み砕き、時おり好みに合わない食べカスをプップッと下品に吐き出す。 黒い悪魔はゴウンゴウンとうなり声を上げながらロボットたちを飲み込んでいく。手も脚も

車の下はそんな食べカスですでにいっぱいだった。 凄惨な処刑は淡々と続き、ついに残すところあと一台となった。

よろつかせながら現場を病人みたいに歩いていた。他のロボットと肩が触れるとあっさり転倒し に来た、二足歩行型の彼は、ひどく動きが鈍く、もやしのようなひょろりと細い手足をいつも 「どうした! さっさとこの中に入るんだ!」 最後のロボット『百十八番』は、車の前で立ち止まったまま動かなかった。僕より遅く現場

にうずくまった。 した。しかしそれは彼のせいではなく、明らかに整備不良によるものだった。 「おい百十八番! どうしたんだ! これは命令だ!」 そして彼はブルブルと小刻みに痙攣しながら、苦悩するように長い両腕で頭を抱え、その場 現場監督の苛立った声に、百十八番の体がギクンと震える。

「おい、何をしている! 立て百十八番! これは命---」

な.....1 百十八番はゴムまりが弾むように立ち上がると、一目散にその場から逃げ出した。 そのときだった。

党東ない足取りで、しかし今まで彼が見せた最も速いスピードで遠ざかっていく。斜面を駆け めてだ。安 全 回 路に支障でもきたしたのか、人間に反旗を翻した百十八番は、よたよたと 現場監督があっけに取られる。命令を無視して公然と逃げ出すロボットなど僕の知る限り初

下り、自由を掴むべく逃走する。 だが現場監督は彼を追おうとはしなかった。他のロボットに捕まえるよう命令を出すことも

なかった。なぜなら、百十八番は現場を囲んでいる鉄条網をガシャガシャと登り出したからだ。 た。しかしその体はしびれたようにガクガクと震えるばかりで、中の回路がショートして体の 体を襲ったのだ。 光が走り、白い煙が噴いて、百十八番は鉄条網の一番上から一気に落下した。高圧電流が彼の 地面に落下した彼は、「クソ、クソッ!」と悪罵を吐きながら必死に体を持ち上げようとし 百十八番が五メートルほどの網を登りきり、有刺鉄線に手をかけた瞬間だった。バッと電 ---ああ、ダメ! そっちは!

ヤダ、死ニタクナイ!」と泣き喚いていたことだ。 返されたいつもの光景だった。ひとつだけ違ったのは、運ばれていく百十八番が「イヤダ、イ トは彼を廃材のように担ぎ上げ、黙々と運んでいった。それはこの現場で何千回何万回と繰り 自由が利かないのは一目瞭然だった。 やがて、動けない彼を、現場監督の命令を受けた一台のロボットが拘束した。そしてロボッ

死を目前にしたときに湧き上がる、圧倒的な恐怖と焦燥。「嫌だ、死にたくない!」という生 その姿を見た僕は、アンヴレラ耶の研究室で発作的に自殺を図ったときのことを思い出した。

気がつくと僕は叫んでいた。百十八番を助けようとしたのかどうか、自分でもよく分からな

一ア、アノ!」

い。ただ、泣き喚いて助けを乞う彼を見て、声をかけずにはいられなかった。

掴まれ、乱暴に引き倒された。 キャタピラを動かして前に出ようとした瞬間だった。僕は何者かに後ろからものすごい力で

ていて……」と震える声で付け加えた。僕はそれで何も言えなくなった。 見上げる。すると彼女は急に表情を崩して悲しげな顔になり、「お願いだから、今は静かにし 百十八番は車の前まで運ばれると、今度こそ車両の中に叩き込まれた。金属製の処刑執行人

ない怖い顔で「じっとしてなさい!」と鋭く叫んだ。僕は仰向けになったまま、呆然と彼女を

見上げると、そこにはリリスが立っていた。眉を吊り上げ、目を見開き、今まで見たことも

その間、耳を覆いたくなる断末魔の絶叫が現場に響いた。そして百十八番は死んだ。はその顎でひと噛みひと噛み、ゆっくりと味わうように百十八番の下半身を押し潰していった。

四十一台のロボットを飲み込んだ悪魔が走り去ると、あとには大量の食べカスが残された。 そして現場監督は、僕たちに仕事の再開を命じた。再開後の初仕事は、同僚の内臓と肉片を

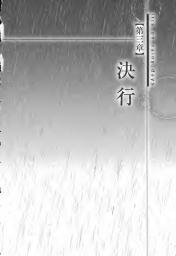
風に舞い散った。

この日の夜、僕たちは脱走することを決めた。

僕が百十八番の視覚レンズを拾い上げると、それは音もなく粉々に砕けて、どこへともなく

僚のかけらを拾っていた。 掃除することだった。 僕たちは黙々と作業に従事した。リリスもボルコフも何も言わず、うつむいたまま油臭い同







前夜

「作戦が決まったわ」 深夜二時、いつもの丸テーブル。リリスが決心を確かめるように低い声で言った。

僕たちはここ二日、連夜の作戦会議を開いている。

議題は、脱走計画。

「本当に……明日、やるんですカ?」 あの『処刑』があったのが昨日の午後、そして脱走を決意したのが昨晩。それで脱走が明日

というのは、あまりにも急な話だった。

「グズグズしてられないの。……だって『次』がいつ来るか分からないのよ?」 リリスが言った。

「それはそうですが……」 僕は不安が拭えない。

「あの車は、これまでもたびたび来ていたんでしょうカ?」

ポルコフもそうでしょ?」 「分からないわ」リリスは小さく首を振った。「私も、アレを見たのは昨日が初めてだし。……

僕は質問を重ねる。 リリスが顔を向けると、ボルコフは黙ってうなずいた。

「とにかく」リリスは同じセリフを繰り返した。「グズグズしてられないの」 「コストよ、コスト。修理代を出すくらいなら、ジャンク屋で買い直したほうが安上がりなの 「どうして、ロボットを修理しないんでしょうカ?」なにもスクラップにしなくても……」 そのとき、リリスはじっと僕を見つめ、それからボルコフをわずかに横目で見た。 リリスは明瞭に答える。僕は「……そういうものですカ」と力なく返す。

――あ、そうか。

ここで僕は、やっとリリスの真意に気づいた。彼女が脱走を焦っている、本当の理由を。

ジャンク品の寄せ集めで造られた僕と、何かと反応の鈍いポルコフ。もし、今度また『処 それは僕とボルコフのためだ。

「それで明日の作戦だけど」 リリスは話を本題に戻した。

ためではなく、僕たちのために危険を冒そうとしているのだ。

刑』が行われるとすれば、一番危ないのは間違いなく僕たち二人だ。リリスは、自分の安全の

「昨日も話したとおり、脱出には『経路』と『タイミング』、この二つの条件が必要になるわ。

……まずは、脱出経路」

切れたボルトなどが無造作に置かれる。 リリスはテーブルに、そこらに転がっているガラクタを置き出した。曲がった金属板やねじ

「これが現場ね。で、こっちが『胃』で、向こうが『腸』」

んなも知ってると思うけど、胃のほうは危険が大きすぎるわ。海岸線は遮蔽物が何もないから、 つ。『胃』を突破して海岸線沿いを逃げるか、それとも『腸』を突破して内陸に逃げるか。み 「周囲の鉄 条 網を越えるのは、高圧電流が通っているから無理。そうすると、脱出経路は二 リリスの指が動き、テーブル上には工事現場の簡単な見取り図が出来上がっていく。

すぐに熱線銃で狙い撃ちね」 リリスはこめかみに、指でピストルを作る。

これなら市街地まで逃げきれば他の一般車両に混ざれる」 「だから逃げるなら『腸』のほうよ。移動手段は搬出 用のトラックを乗っ取ることにする。 「あの、ちょっと待ってくだサイ。乗っ取ったトラックは誰が運転するんですカ?」

「エ? できるんですカ?」 「決まってるじゃない。私よ」

だから 「私、二つ前の現場では運転手をやってたの。ショベルカーや重機に乗ったことだってあるん

```
もそもみんなが私たちの言うことを聞くとも思えないし」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            のロボットではまず思いつかない、人間をあざ笑うような大胆な作戦だった。
                                                                                                            一ここには八十台以上もロボットがいるのよ? いくらなんでも数が多すぎるわ。それに、そ
                                                                                                                                                | どうしてですカ?
                                                                                                                                                                                                                        それは無理よ
                                                                                                                                                                                                                                                            「ですから、どうせ脱走するなら僕らだけでなく、みんなといっしょに――」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                「は?」リリスが驚いたように瞬きをする。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    「みんないっしょに逃げる……ということはできないんですカ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     「手はずはこうよ……」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             「ボルコフは黙ってて」
彼女の経験上、脱走は少人数で秘密裏に進めてこそ成功するもので、大人数でうまくいった
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         会話に入ったボルコフをびしゃりとやって、リリスは説明を続ける。
                                    リリスは冷酷なまでに言い切る。
                                                                                                                                                                                    リリスは即座に首を振った。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        ただ、僕はリリスの計画に一つだけ気になる点があった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 リリスは脱走計画の段取りを順序立てて話していく。僕はそのアイデアに目を見張る。普通
```

186 例はないと言う。

west 場所で寝起きしてきた彼らに、ちょっと情が移っていたのかもしれないし、何よりあの凄惨な場所で寝起きしてきた彼らに、ちょっと情が移っていたのかもしれないし、何よりあの凄惨な だけど僕は、他のロボットたちを見捨てることにためらいがあった。三ヶ月近くずっと同じ

処刑シーンが脳裏をよぎった。

それから僕は博士のことを思い出した。いつも行き倒れのロボットを見かけては助けていた

「それじゃあ、リリス」 だから僕は提案した。 博士の姿を。そう、博士ならきっと――。

「せめて、こうしませんカ?」 なに? 僕は一つの提案――ちょっとした『折衷 案』を出した。彼女はそれを聞いた途端に渋い顔

をして「むむ……」とうなり声を上げた。 僕が話したのは、いたずらにも似た不届きな計画。

あの『処刑』からわずかに二日後、僕がこの現場に来てから八十五日目。

```
スピーカーを仕込んだからだ(もちろんこれも廃材からの「戦利品」だ)。
                                                                                                                                                                「これは命令だ――!」
                                                                                                                                                                                                                                                              「今から──全員──ここを──出るんだ──!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |よく聞いてください!|
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             一口ボットのみなさん!」
この突然の大脱走に、監視員はパニックになった。
                                  ぬかるんだ地面を走り出し、ある者は胃へ、ある者は腸へと向かう。
                                                                  現場監督の声で命令を受けたロボットたちは、一斉にその場から逃げ出した。
                                                                                                 効果はてきめんだった。
                                                                                                                                                                                               それから耳にタコが出来るほど僕たちが毎日聞かされた、お決まりのセリフが続いた。
                                                                                                                                                                                                                              リリスは命令した――録音テープに吹き込んだ『現場監督』の声を再生して。
                                                                                                                                                                                                                                                                                             そして仕掛けはもう一つ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            その声は現場中に響き渡った。これは他の何台かのロボットの背に、僕たちがこっそり小型
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          リリスが叫んだ。その手には小型マイク。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         本日最後の廃材搬出トラックが、現場に姿を見せた――その瞬間。
```

188 「なにやってるんだ! 止まれ! 全員止まるんだ! これは命令だ!」

しかしそれは計算済み。 すると、逃げ出したロボットたちは、まるで何かのゲームのようにぴたりと動きを止めた。

「今から――全員――ここを――出るんだ――! これは命令だ――!」 テープは繰り返される。すると、最新の命令を受けたロボットたちは、金縛りが解けたよう

三人だけが脱走する、というものだ。 いうときのために録音・編集しておいた現場監督の命令テープを放送し、混乱に乗じて僕たち にまた四方八方に走り出した。再び現場は大混乱だ。 リリスの当初の計画では、他のロボットたちを『おとり』に使うだけの予定だった。いざと

僕はこの計画にさらにアイデアを足した。「それなら、みんなの安 全 回 路も解除しておけ

力任せに引っこ抜けばそれだけであっさり解除できた。だから僕たちは昨晩手分けをして約八 ば、そのままいっしょに脱走できますよネ?」と。 解除作業は拍子抜けするほど簡単だった。どのロボットの安全回路も量販店の安物らしく、

たって……」とぶつくさ言いながら、結局芋掘りを手伝ってくれた。 十台のロボットたちから芋掘りのごとく一本一本引っこ抜いた。リリスは『こんなことやっ そんなわけで、この『ロボット大脱走』は実行に移されたのである。

「緊急停止だ! 緊急停止!」

るのが見える。だが安全回路のないロボットたちにはもはや何の効果もない。 ここまでは計画どおり。 ウーウーと警報が鳴り響く。現場監督が腰にぶら下げた緊急停止ボタンをカチカチ押してい

た。少しだけ膝を曲げた姿勢のまま、銅像のようにびくりとも動かない。彼の安全回路はリリ スにも外せなかったから、緊急停止ボタンの効果をもろに受けてしまったのだ。 一方、混乱と喧騒の中で、ただ一人ボルコフだけは廃材を担いだままの姿で動きを止めてい

「さあ――十五番を――ここに――運び入れろ!」

で、彼らは実にスムーズにボルコフの周りに集まってきた。 たロボットたちが命令に従う義務はない。しかし長年染みついた習慣というのは恐ろしいもの リリスがテープを再生し、付近のロボットたちに命令する。本来なら、安全回路を解除され

体とはいえ、魔材の運搬を飽きるほど繰り返しているロボットたちにとっては造作もなく、あ っという間にその巨体はトラックの荷台に運び込まれる。 「ひい!」とトラックの運転手が一目散に逃げ出す。リリスは残された車のキーを回してエン

硬直したままのボルコフを、ロボットたちが四台がかりで担ぎ上げる。いかにボルコフが巨

ジンをかける。脱走計画の要である車両の乗っ取りは成功したようだった。

「今から──全員──ここを──出るんだ──! これは命令だ──!」 リリスが再び録音テープを流すと、ボルコフを運んだロボットたちはいたずらが見つかった

子供のように一斉に散開した。中には「アバヨ!」「達者デナ!」と手を振る者もいた。

「サ、サヨナラ! どうかお元気で……!」

そんな子感を胸に抱きながら。 僕は精いっぱい、腕を振って別れを告げる。もう二度と、彼らと会うことはないだろう――

鳴り響くサイレン、暴走するロボット、監視員の怒声、響き渡るニセ現場監督の命令――真

夜中の工事現場は、今や混乱の極みと化していた。

一アイリス! 行くわよ!」

運転席からリリスが叫ぶ。トラックのエンジン音が馬のいななきのごとく僕を急き立てる。

がぐいっと助手席まで持ち上げる。こういうとき、彼女の腕力のすごさを実感する。 「ほら、掴まって!」 「あ、ちょ、ちょっと待ってくだサイ!」 僕は慌ててトラックのそばまでキャタピラを動かす。 リリスが腕を伸ばす。下半身がキャタピラのために、車にうまく乗り込めない僕を、リリス

アクセルが踏まれ、エンジンがうなり声を上げると、逃走車は三人の脱獄犯を乗せて真夜中 まるで今からドライブでもするみたいに、リリスが楽しげに叫んだ。

の道を走り出した。

に見ながら、転がる廃材を撥ね飛ばして爆走する。 トラックはぐんぐんスピードを上げる。『腸』のエリアに設置されたベルトコンベアを横目

「そこのトラック、停まるんだ!」 最初の関門は現場出口にある守衛所だ。

守衛所のスピーカーから停止命令が出る。出口には遮断機が下りており、おまけに円錐状の

コーンが横一列に並んで僕たちの行く手を阻んでいる。 「邪魔する奴は下敷きよ!」

「わ、わ、ぶつかりマス!」 リリスは過激なセリフを言い放ち、停まるどころかさらにトラックのスピードを上げる。

ぶち折って、トラックはあっさりと第一関門を突破した。 「ふん、ちょろいもんよ!」とリリス。ハンドルを握る彼女の目は爛々と輝いており、口元は 僕が叫んだときにはもうぶつかっていた。いくつものコーンを撥ね飛ばし、遮断機のバーを

必死にシートベルトを締める。車体がガクガクと上下に激しく揺れて、すでに三回も天井に頭 人格が変わったように恐ろしげな笑みを浮かべている。助手席の僕は「ア、アワワワ……」と

```
192
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       をぶつけている。
                                                                                                                                                                                                                                                                 ス!
                                                                                                                                                                                                                                                                                       「さあね! でもやるだけのことはやったわ! あとは自己責任よ! ……ところでアイリ
                            「ちょっと、リリスー!!」
                                                  「停まったら負けよ!」リリスはさらにスピードアップ。
                                                                         「ブ、ブレーキ!」僕はとっさに頭を抱える。
                                                                                                                                                        第二関門よ!
                                                                                                                                                                                  ·····ハイ?
                                                                                                                                                                                                                                    なんですカ?
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 「みんなは、ちゃんと逃げられたでしょうカ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          なに!
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |リリス!
                                                                                                     いていた。このまま突っ込めばまっさかさまに転落だ。
                                                                                                                                                                                                           自動車は空を飛べると思う?」
僕が叫んだ瞬間、フロントガラスに通行止めの大きな看板がパカーンとぶつかり、それか
                                                                                                                               リリスの視線の先には『通行止め』の看板があり、アスファルトが深く掘り返されて大穴が
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             トラックは御者を失った暴れ馬のごとく砂利道を猛然と駆け抜け、すぐに一般道に出た。
```

```
ていない。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         らトラックは道路を掘り返したあとの盛り土をジャンプ台のようにして、車体を空中に舞い上
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               がらせた――そしてドスンと着地。
「ちがーう! 音楽よ、音楽!」
                            | 交通情報はやってまセン!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  一クリアー!」
                                                                                                                      一ちょっと待ってくだサイ!」
                                                                                                                                               選局して!」
                                                                                                                                                                                                         「それはハザードランプ! その下、そう、それ!」
                                                                                                                                                                                                                                      「こ、これですカ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                               |持ってまセン!|
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            「アイリス、ラジオつけて!」
                                                                                      激しく揺れる車内で僕はカチカチと放送局を選ぶ。しかし歌や音楽ばかりで交通情報はやっ
                                                                                                                                                                            僕は慌ててラジオのスイッチを押す。ザ、ザザッとノイズが車内に響く。
                                                                                                                                                                                                                                                                   「違う、カーラジオよ!」そこの出っ張ってるスイッチを押して!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      見事、穴を跳び越したリリスが嬉しそうに叫んだ。もはや、運転が乱暴とかいうレベルでは
```

194

「エ? 音楽? なぜですカ?」 僕が不思議そうに尋ねると、リリスは元気よく叫んだ。

「景気づけに決まってるでしょ!!」 数秒後、車内には激しいロック調の音楽が流れ始めた。リリスの希望どおり、大音量で。

「ア、アノ!」僕は耳を塞ぎながら叫ぶ。

「いいんですカ? こんな、激しい、音楽で!」 「なにアイリス!」リリスも大声で返す。

「いいの! こういうのは! とにかく勢いよ! ……ほら、第三関門!」 目の前には自動車の列が出来ていた。どうやら信号待ちのようだ――なんて悠長なことを考

く。ラジオではロック歌手が絶叫する。もう何が何だか分からない。 えている暇もなく、リリスはまたもアクセル全開、フルスピードで車列に向かって突進してい

「どいてどいてどいてええええっ!!」

リリスはハンドルをぐるんと操作して、道路の右端にトラックを寄せる。車列とガードレー

ルの隙間を通るつもりだ――というかトラックが通れる隙間などありはしない。

恐怖に引きつり、自動車たちが我先にと逃げ出す。 「このリリス様がどけって言ってんのよ!!」 リリスはクラクションを連打する。前の車の運転手が何事かとこちらに振り向き、その顔が

```
「ちょ、リリス、交差点!」
しかしリリスの辞書にブレーキの文字はない。彼女はクラクションをまるで玩具のごとくバ
                         信号の先には案の定、車が行き交う交差点。
```

吹き飛ばしながら、信号待ちの五台を一挙に追い抜いた。

そしてリリスはトラックの右側をガードレールにぶつけ、左側で先行車両のサイドミラーを

でクラッシュ音がしたけど、もはや確認する気も起きない。 摩擦音が重なって、その直後に僕たちのトラックが弾丸のように交差点を抜ける。後ろのほう ンバン鳴らしてスピードを上げる。ロック歌手が「GO! GO! GO!」とサビを絶叫し め、リリスもそれに合わせて機嫌よさそうにハミングしている。 交差点では突然の暴走トラックに驚いた他の車両が急プレーキ、いくつものキキーッという 僕はまだ生きているのが不思議だったが、ロック歌手は裏声で気持ちよくバラードを歌い始

「後ろよ! 第四関門!」 ? 「おいでなすったわよ!」 僕は窓から後方を見る。回転灯をつけた車両が三台、僕たちを追ってきていた。

「あのリリス、そろそろスピードを落として……」

[battery=04:46:03]

一ア、アノ、警察が!」僕は動転しながら叫ぶ。 |車体を左端に寄せて停止しなさい!| 「そこのトラック! ただちに停まりなさい!」警察車両から当然ともいえる命令が下る。

「老家が?」怒ったような声で訊き返すリリス。「停まれって言ってマス!」「それで?」

リリスはアクセルをさらに踏み込んだ。「サツなんか振り切るわよ!」

「どう? 距離は!」 遠心力で僕は左側のドアに体を押しつけられる。 エンジンがうなり声を上げ、制限速度の軽く倍はいきそうなスピードでカープに突っ込む。

「だ、だいぶ離れましタ!」でもまだ追ってきていマス……アッ!」

```
見る見る縮まる
                                                                                                                                                                                                                                         輪──さしずめロボットカーだ。頭の上の回転灯は警察車両の証である。 背後からはロボットが追ってきていた。上半身は人の形をしているが、下半身には四つの車
「ソコノ車両、停車シナサイ。サモナクバ強制執行ニ入リマス。ソコノ車両……」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                            「うわっ、『交機』じゃない!」
                                                                                                    一分かってるわ!」
                                                                                                                                     一ど、どんどん近づいてきマス!」
                                                                                                                                                                                                           コーキ?
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                「小さいのが出ましタ!」
                                                                  リリスはさらにアクセルを踏み込む。しかし交機ロボットのほうが明らかに速い。その差は
                                                                                                                                                                  交通機動警察ロボットよ! スピード違反を取り締まる警察の手足!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              リリスが「だから何?」と窓から顔を出す。長い髪の毛がばたばたと生き物のように風にな
```

後ろから電子音声が警告してくる。その声はどこか威圧的だ。

「分かるように説明して!」「な、なんか出ましタ!」「どうしたのアイリス!」

```
198
                         「リリス、な、なんか武器みたいの持ってマス!」
拳銃デス!
            武器って何!」
```

一何ですカ!」 「く、タイヤを撃ち抜いてパンクさせるつもりね……アイリス!」 迎撃を命じる!」

見れば確かに助手席の下には工具箱があった。リリスが僕の頭を開けるときに使ったものだ。

「エエッ?!」

足元に工具箱あるでしょ!」

「それを道路にぶちまけなさい!」

かった。 いいから早く! 「え? どうしてですカ?」 僕は訳が分からなかったが、交機ロボットが威嚇射撃を始めるともう考えている余裕などな

キンと音を立ててボルトが散らばっていく。 「エイッ!」 言われたとおり工具箱のボルトをひとつかみして、窓からバラバラと撒く。夜の道路にキン、

```
が何台も壁となって行く手を塞いでいた。
                                                                                                                                                                                                                   に滑ったのはこれが原因のようだ。
                                                                                                                                                       ま隣 町まで突っ走るわよ――」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                              トしていった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       投棄されたボルト、ナット、クギ、ネジ、チェーンのたぐいが音を立てて転がっていく。
                                                                                          ーリリス、前!
                                                                                                                                                                                  「どう? 備えあれば憂いなしよ」リリスが愉快そうに歯を見せて笑った。「よーし、このま
                                                                                                                                                                                                                                                                                |コレ……油?|
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       「りょ、了解デス!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  「もっとよ、もっと! あるだけぶちまけなさい!」
                          道路の前方では無数の回転灯が光っており、こちらのトラックに引けをとらない大型装甲車
                                                         僕が叫ぶと、「うっそ……!」とリリスの顔色がさあっと変わった。
                                                                                                                                                                                                                                              見ると、工具箱の中には黒っぽい油がべっとりと付いていた。交機ロボットがあんなに簡単
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         これは効いた。交機ロボットは次々に部品を踏んづけてスリップし、横転したりコースアウ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     僕は工具箱を丸ごとひっくり返して内容物を一気にばらまく。気持ちいいくらい豪快に不法
                                                                                                                            そのときだった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            すると次の瞬間、一台の交機ロボットがボルトを踏んでスリップした。
```

装甲車の上から光の矢が放たれ、フロンドガラスは真っ白な閃光に包まれた。 リリスが急ブレーキをかけたときには、遅かった。

[battery=04:21:29]

雨がひどい。いや、これは僕の視界がひどいだけか。 気がつくと、僕は冷たいアスファルトの上に放り出されていた。 ウ.....

荷台。闇の中、燃え上がる炎が夜空を白く染める。 視界の右端にトラックが見える。横倒しになった車体、空回りするタイヤ、そして炎上する 僕は記憶をたどる。

ようやく事態を理解する。 警察の装甲車から、無数の鋭い光が放たれ、視界が真っ白になり――そうか――熱線銃で撃

「リリス!」僕は必死に友人の名前を叫ぶ。「リリス! どこですカ!」 道路に両手をついて体勢を立て直し、周囲を確認する。あいかわらず『雨』はひどいものの、

髪が扇のように路面を覆っている。 視覚装置はまだ無事なようだった。僕は白黒の視界の中で、懸命にリリスの姿を探し続ける。 横転したトラックからだいぶ離れたガードレールの下に、その人影は見えた。ほどけた長い

「リリス、大丈夫!! リリス!!」 僕は必死に呼びかける。しかし彼女はぐったりと横たわったまま、びくりとも動かない。

----待っててリリス。今、助けるから。

取り戻した。彼女はゆっくりと上半身を持ち上げて、周囲を見回す。すぐに僕と目が合う。 僕が到着するほんの少し前だった。「う……」と苦しげなうめき声を上げ、リリスが意識を 周囲に散らばる車の破片をよけながら、僕はキャタピラを動かしてリリスへと近づく。

「ええ……なんとかね。それよりあの人は――」 「リリス、大丈夫ですカ!」

そう言って、リリスがトラックのほうに目を向けたときだった。

動くな!

「アアッ……!」相手を確認して、僕は恐怖で硬直する。 リリスを蹴飛ばしたその人物は、土管型の不気味なヘルメットをかぶっていた。全身を金属 荒々しい怒声が響き、リリスは何者かに背中を蹴り飛ばされて激しく路面に叩きつけられた。

で装甲し、手には灰色に光る熱線銃の 走、青いレーザー、特殊部隊、そして――。 僕の脳裏にまるで連続写真のように記憶が蘇る。午後のニュース、噴水広場、ロボットの暴

「動くな、これは命令だ!」土管の頭から冷たい声が響いた。「両手を頭の上に置いてじっと 彼らの一人が戦利品のごとく掲げた、ロボットの生首。

としてきた男に、後頭部で頭突きを食らわす。「ウッ……!」と男は顔面を押さえてひるむ。 「この……!」リリスは即座に反撃した。その体を鞭のごとくしならせ、彼女を押さえ込もう

ハ、ハイッ!」 「アイリス、逃げるわよ!」 警察をものともしないリリスの大胆さに驚きつつ、僕は右手を伸ばす。リリスも僕のほうに

右手を伸ばした その瞬間。閃光が彼女を襲った。

のもとに駆け寄り、熱線銃を突きつける。 真っ黒な油が噴き出し、僕のところまで飛んでくる。すぐに分厚い金属装甲の男たちがリリス 彼女は金属を擦ったような甲高い悲鳴を上げ、足元から崩れ落ちた。そのちぎれた右腕から 僕の目の前で、リリスの右腕が、ばとりと落ちた。

に掴んで引っ張り上げる。「ぐ……」とリリスは苦痛で顔を歪める。 「元気がいいな、お嬢ちゃんよ」先ほどリリスに頭突きを食らった男が、彼女の髪の毛を乱暴

「おかげで歯が折れちまったよ。……これはそのお礼だ」

また、閃光が彼女を包んだ。

を上げ、道路に倒れ込んだ。左の顔面を押さえながら、苦しみのあまり路上をのたうち回る。 リリスの左耳と左頰が、こそぎ取ったように焼き切られた。彼女はさっきよりも大きな悲鳴

それを見て男たちはニヤニヤと笑う。

「運びやすいようにバラしておくか」「そうだな」と彼らは言葉を交わすと、リリスの首に熱 「リリス! 痛覚機能をオフにして! リリー--」 僕はありったけの声で叫んだが、「うるせえ!」とすぐに男の一人に蹴飛ばされ、路上に転

ガクガクと小刻みに震え出す。 線銃を当てた。彼女の顔が恐怖に染まる。男の指が引き金にかかる。それを見た僕の体は、 「ウワアアアア!」 ああ、リリスが死んじゃう、殺されちゃう。だめだ、いやだ、そんなの絶対、絶対、いやだ

気がついたときには、僕は叫び声を上げて男たちに突進していた。

郎!」と男は苛ついた様子で振りほどこうとするが、僕は絶対に離さない。 「な?」とっさのことで男が体勢を崩す。その脚を、僕は両腕で必死に掴む。「離せ、この野

一アイリス!」リリスが僕の名を叫ぶ。

「リリス、逃げて!」男に蹴られながらも僕は叫び返す。 だが僕の反撃はそこまでだった。

タピラの破片が空から降り注ぐのを見ていた。 僕の体を、『熟いもの』が襲った。あっ、と思ったときには僕は路面に転がり、自分のキャ

ーブが何本もはみ出し、火花を散らしている。 バラバラに吹き飛んで、跡形もなかった。腰から下がざっくりと焼き切れ、臓物のごとくチュ 「やめて!」リリスが悲痛な声で叫んだ。「その子だけは助けてあげて!」 「ウア……」僕はかすれた声でうめき、緩慢な動作で自分の下半身を見下ろす。僕の下半身は、

しかし男たちは、その哀願に暴力で応えた。リリスの口に、熱線銃の銃口が乱暴に突っ込ま

れる。「ぐうっ!」とリリスの喉から嫌な音が出る。

「心配するな。……二人仲良くスクラップだ」 ――リリス! ああ、リリス!

もはや声すら出ない。 僕は必死に体を持ち上げようとするが、熱線銃を浴びた体はしびれたように力が入らない。

```
闇夜を切り裂いた。男たちが一斉に声のした方向に振り向くと、視線の先では一台の大型トラ
                                                                                                 ックが炎上を続けていた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                ·---ゥオオオッ----オオ----ゥンッ!!」
突き出た。
                                                             そして、トラックの荷台から、炎に包まれた巨大な腕が、
                                                                                                                                                           その直後、今度はさっきよりも明瞭に、「ルゥオオオオオオオカンツ!」と荒々しい咆哮がその直後、今度はさっきよりも問瞭に、「ルゥオオオオオオオカンツ!」と荒々しい咆哮が
                                                                                                                                                                                               男たちが「今のはなんだ?」と顔を見合わせる。
                                                                                                                                                                                                                               声が聞こえた。まるで動物の遠吠えのような、伸びのある力強い叫びだった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     その声が、届いたのか。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      僕は心の中で叫ぶ。ありったけの声で叫ぶ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     ―…誰かリリスを助けて!
```

205



[battery=04:10:52]

炎の脚が――炎の巨人が灼 熱の業火をまとって姿を現した。 き出た『腕』は、金属の車壁をバターのように切り裂いた。炎の腕に続き、炎の頭、炎の胴体、 まるで獲物の臓腑を食い破った肉食獣のごとく、炎上するトラックの荷台から突如として突

「なっ……、なんだあれは!」 「ルゥオオオオオオオウンッ!」 巨人は再度、狼のごとく夜空に向かって咆哮した。ビリッとあたりの大気が震える。

男たちは慌てて銃を構え直す。リリスの口からも銃口が引き抜かれる。

とつぶやいた。 道路に放り捨てられたリリスは、力尽きたように体を横たえたまま「ボル……コフ……?」

歩き出した。両腕が周囲を威嚇するように持ち上がり、体内に満ち満ちた怒りを示していた。 りと僕たちのほうに向き直った。 その四角い両眼が鋭い光を放つと、彼はこちらに向かって、ドオン、ドオンと轟音を立てて ボルコフは――ああ、あれは本当に彼なのだろうか――炎にまかれた禍々しい姿で、ゆっく

「止まれ!」男の一人が叫んだ。「これは命令だ!」

は歩くたびにアスファルトを陥没させ、歩いた跡が楕円の炎となって間夜に浮かび上がる。 熱線銃を向けられてもボルコフが歩みを止めることはなかった。その重量感あふれる太い足

気道――いやあれは―― えないかのように変わらぬペースで近づいてくる。光る両眼に込められているのは、圧倒的な 「止まるんだ! これは命令だぞ!」 再三の停止命令にも、全身に陽炎をまとった巨人にまったく従う様子はない。命令など聞こ

チを描いて、吸い込まれるようにボルコフに殺到する。僕の脳裏にかつてのニュースの光景が 一撃てえっ!!」 号令と同時に、男たちが一斉に熱線銃の引き金を引いた。十本あまりの閃光がわずかなアー

「なっ!」絶句したのは、警察のほうだった。 だが。 レーザーはボルコフの体に到達した瞬間、壁に当てた水しぶきのごとく、あっけなく撥ね

返された。熱線があたりの道路に四散し、ジュウッと黒い煙を噴き上げる。 レーザーを浴びた巨人の体表からは、どろりどろりと汗のように塗料が熔け落ちていく。そ

の下には闇夜を塗り固めたような真っ黒な地金。彼はまた「ルゥオオオオオカウンッ!」と己

直後、巨人は己の五倍はあろうかという車体をその太い両腕でぐっと抱え上げた。 ると、急降下して装甲車の前に轟音とともに着地した。装甲車から慌てて男たちが飛び降りた 頼みの武器がまったく役に立たない男たちは、じりじりと装甲車まで退却を始める。それを見 た巨人は力を溜め込むように、ゆっくりと膝を曲げた。 は見る見る血の気を失っていく。 返されアスファルトに穴を穿つだけだった。第三射、第四射、第五射と続けて撃つ男たちの顔 の存在を誇示するように夜空に向かって咆哮した。 「バケモノだ……」 「ふ、不死機甲兵団……?」警察の一人が震える声でつぶやいたのが、聞こえた。 「ルゥウオオゥンッ!」 鋼鉄すら焼き切るレーザーが撥ね返されるなど、彼らにとって予想だにしない事態だった。 第二射も結果は同じだった。放たれたレーザーは巨人の分厚い装甲に行く手を阻まれ、撥ね 一転。弾けるように彼は空に跳躍した。炎の人型が燃え盛る太陽のごとく間夜に躍り上が

で分厚い金属装甲をバリバリと剝がすと、むき出しになった車の内部機関に勢いよく右腕を突 それから彼は一番大きな装甲車に突進し、バンパーを紙繝工のように毟り取った。太い両腕

き、衝突した二台はすぐに炎上、爆散。

短い咆哮のあと、装甲車は他の装甲車に向かって投げつけられた。激しいクラッシュ音が響

か熱波のようなエネルギー弾が放たれた。直後、車体は空気を入れられた風船のごとく膨らみ、 それはまるで弓で矢を射るような動作だった。彼の右腕が瞬時に発光したかと思うと、何

とすように、投下した。 鮮やかな火球となって爆裂した。 上空のヘリコプターがバラバラと音を立てて何度か旋回したあと、その腹から何かを産み落 だが警察も黙ってはいなかった。

「ボルコフ!」リリスが叫んだ。「上よ! 避けて!」 その言葉に、彼は胡乱げな動作で空を見上げ、ゆっくりと右腕を掲げた。 次の瞬間、装甲車を破壊したときと同じエネルギーの塊が彼の手から放たれた。すると爆 それは爆弾だった。ボルコフに向かって一直線に落下する、鈍い光沢の鉄塊。

彼の右腕がまた強く光り出す。その光は今までになく強く、あたりを荘厳なまでの白い世界に 闘を繰り広げたにもかかわらず、彼の体には傷ひとつついていなかった。 リリスの体が僕のところまで飛んでくる。 それから彼は、上空でなおも飛び続けるヘリコプターに向かい、おもむろに手をかざした。 風が収まると、ボルコフは何事もなかったように平然とその場に立っていた。あれほどの戦

弾は空中で花火のように炸裂し、粉々になった。すぐに燥風があたりを襲い、吹き飛ばされた

「もういい、ボルコフ! やめなさい!」

出力で――閻夜を一直線に切り裂いた。はるか上空を飛んでいたはずのヘリコプターは、光に 彼の右腕から熱線銃のような光が――ただしそれは何十本も束にしたようなあきれるほどの だがリリスの言葉は届かなかった。

包まれ、空中で爆発、そして滅失した。わずかばかりの黒い破片が、力尽きたカラスのように

のような黒煙を噴き上げる。散らばった無数の破片はかがり火のごとく世界を彩る。 遠くの路面に落ち、ちろちろと燃え始めた。 そこは戦場だった。誰の存在も許さない、炎と恐怖、死と殺戮の戦場 完膚なきまでに破壊された四台の車両が、激しい音を立てて燃え続け、夜空に向かって火柱 もう、あたりには僕たち以外に誰も残っていなかった。

巨人は、周囲の惨状を無感動な目つきで見やると、こちらに振り返った。

異様にぎらついた両眼が、灯台のように闇夜に浮かび上がる。 その姿は、燃え盛る装甲車の残骸を背景にして、神話の世界から蘇った魔人そのものだった。 それからゆっくりと僕たちに向かって歩いてきた。

僕はかつての彼の言葉を思い出していた。

――ボルコフ、戦争した。

211

212 兵器だったのだ。恐ろしいまでの破壊力を秘めた殺人兵器。 ――ボルコフ、いっぱい、殺した。

ーボル……コフ?」 やがて巨人は、僕たちの目の前で立ち止まった。黒く大きな影が僕とリリスに覆いかぶさる。 リリスがつぶやくと、彼は無言で太い腕を伸ばした。その右腕に彼女が抱きかかえられる。

巨人がまとっていた炎はすでに消えていた。 と、路面を強く蹴って夜空へと舞い上がった。 ちょ、ちょっと! そして僕たちを闇の中に連れ去った。 すさまじい炎の熱気と、けたたましいサイレンの嵐の中で、 巨人はググッと両膝を曲げる とまどうリリスに巨人は何も答えず、僕にも腕を伸ばした。すぐに僕も彼の左腕に抱えられる。

[battery=03:58:01]

普段の彼からは想像もできないスピードだった。

街路を疾走し、階段を飛び下り、ガードレールをぶち破って、彼は街を走り抜けた。僕とり

リスはその太い両腕に乳児のように抱かれたまま、なすすべもなく遠ざかる夜景を呆然と眺め 十分も走っただろうか。人気のない薄暗い鉄橋の下で僕たちはやっと下ろされた。闇の中を

はかすかにしか聞こえず、警察と交戦した場所からはだいぶ離れたようだった。 幅が三十メートルほどの大きな川が流れており、その上に鉄橋がかかっている。サイレンの音

僕は下半身がなくなっていたので、普通に座ることができずに、橋脚に寄りかかる。リリ

仁王立ちしている巨大な漆黒のロボットを見上げた。 スも疲れきったようにもたれた。そして、肘下が失われた右腕を、ぐっと左手で押さえながら、 「あなたいったい……、どうしちゃったの?」

「ボルコフ・ガロッシュ」リリスは落ち着いた声でその名を呼んだ。「何か言ってよ」 「………」漆黒の巨人は黙っている。 心配そうに訊くリリスの言葉に、彼は何も答えなかった。ただじっと僕たちを見下ろしてい

ほどけたままで、長い髪が羽織った上着みたいに肩を覆っていた。 「……もうっ」リリスが左手を地面について立ち上がった。 頭上の鉄橋を、緩やかなスピードで列車が通過する。リリスの髪が風で揺れる。彼女の髪は

「リリス?」

```
「いるのは分かっているのよ!」彼女は居留守の人間を脅すように叫ぶ。「今すぐ出てきなさ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                「ちょっと、この人の目を覚ましてくるわ」
「あなたのせいよ!」またボルコフを叩く。その姿は男性と喧嘩した恋人のようにも見える。
                                        「リリス、乱暴」
                                                                            「遅い!」リリスは彼の腕をゴンと叩く。
                                                                                                                 「オー。……ボルコフ、入ってる、入ってる」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   「もしもし! もしもし! 入ってますか! 入ってますか!」
                                                                                                                                                                                                                                                                  そのときだった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           力任せにリリスはボルコフの腰のあたりをノック――というより殴りつける。
                                                                                                                                                     そして彼はいつものように、とぼけた調子でこう言った。
                                                                                                                                                                                                                              ピカッと彼の目が光った。それからギギギと首を動かして、自分の体をノックする少女を見
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        リリスは彼に近寄る。そして思いっきり――
```

リフとは裹腹に、彼女はずいぶんとほっとした表情だった。

リリスは僕のほうに振り向くと「まったく、世話が焼けるわ」と肩をすくめた。その軽いセ

```
の肘から下はすでに存在しない。
                                                                                                                                                                                                                                                    心する。頭上の鉄橋をまた列車が通過していく。ビリビリと背中から振動が伝わる。
                           「あ、うん、平気よ。ちょっと聴 覚装置の調子が悪いみたい。というか、あなたこそ大丈夫?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            「まあ、とにかく。……さっきは助かったわ」
僕は、その」
                                                             |リリス?|
                                                                                        |………」リリスの返事はない。
                                                                                                                                                                                       「リリス、大丈夫ですカ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 「うるさいわね」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               「リリス、照れてる」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         リリスは再び、橋脚にもたれるように座る。今度はボルコフも、その向かい側にどっかり
                                                                                                                                                        彼女の左の頰は痛々しく焼け焦げている。警察の熱線銃にやられた傷だ。そして、その右腕
                                                                                                                                                                                                                     その音が収まるのを待ち、僕は口を開いた。
                                                                                                                                                                                                                                                                               リリスはそっぽを向く。ボルコフはぼりぼりと頭を掻く。いつものやりとりに、僕は少し安
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          リリスは小さな声で、ちょっと恥ずかしそうに目をそらし「……ありがと」とつぶやく。
```

自分の下半身を見ると、臓物がはみ出したように垂れ下がる配線とチューブ。

```
216
                                                                                      私がバカだったわ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               論しても仕方ないと思ったのかもしれない。
「そうですネ……。当面、どこかに隠れていたほうがいいと思いマス」
                                                                                                                  「はあ……」リリスが額に手を当てる。そしてお決まりのセリフを言った。「あなたに訳いた
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    「これから……どうしましょうカ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              「ああ、ごめん。大丈夫なわけないよね」
                                 「アイリスはどう?」
                                                                                                                                             「ボルコフ、分からない」
                                                                                                                                                                                                                                「ボルコフは、どう思う?」
                                                                                                                                                                                                                                                            リリスは顔を膝の間に埋める。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           リリスはまだ何か言おうとした感じだったが、そこで口を閉じた。いま、傷のダメージを議
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   「主要な回路は生きてますので、まあ、しばらくは大丈夫そうデス」
                                                          それから僕に話を振った。
                                                                                                                                                                         巨大な黒い塊は、のっそりと首を上げて「む……」と声を出した。
                                                                                                                                                                                                     彼女は大切な場面では必ず彼に意見を求める。
```

ないとね……」 「でも、この場にいるのもまずいわ。暗いうちにもう少しマシな隠れ場所まで移動しましょ」 逃亡する犯罪者みたいなことをリリスは言う。いや、すでに僕たちは犯罪者か。

「まあ、今すぐ隣 町まで逃げるのは危険か。高飛びするにも、とりあえずほとぼりを冷まさ

「ボルコフ、アイリスを運んで」

そうでする

ボルコフは黙ってうなずき、僕に腕を伸ばした。

[battery=03:45:32]

川沿いを三人で進む。

音が断続的に響く。僕はボルコフの腕に抱かれたまま、一歩ごとに上下動する視界を眺める。 眼前には果てしなく続きそうな砂利道、左手にはまっすぐに伸びる黒い川。川沿いは街灯が ボルコフが歩くたびに、その足が川原の砂利を粉砕する。ミシャリ、ミシャリと石が砕ける

ないので、真っ暗なトンネルの中を歩いているような気分になる。 かって浸食してくるように、僕の気持ちは徐々に不安になっていく。 この先に何があるんだろう。僕たちはどこへ向かっているんだろう。夜の闇が、体の芯に向

```
少しだけ気持ちが落ち着く。一人だったら不安で泣き出してしまいそうだ。
                                                     しばらく歩くと、隣からリリスの鼻歌が聞こえ始めた。どこか気楽なそのメロディに、僕は
```

お願いしてもいいかしら?」 「ねえ、アイリス」変わらぬペースで歩きながら、リリスがちらりと僕を見上げた。「ひとつ、 その鼻歌がやんだときだった。

「……アレって?」 「アレの続き、しゃべってよ」 「なんですカ?」と僕はボルコフの腕からリリスを見下ろす。

「三流魔神ウェザー・ダーク」

「でも、今は本がありまセン」 リリスは「拍だけ間を置いてから「覚えてるんでしょ?」と言った。

「それは、その、えっとですネ……」僕はしどろもどろになる。 『最後まで読んで、記憶したんでしょ? 知ってるわよ、アイリスがこっそり本を読んでたの」 僕は驚いて彼女を見る。

「目、そんなに悪いの?」 その言葉に、僕は息を飲んだ。目の前の雨が一瞬やんだような気さえした。

```
それでいて口元は励ますような笑みを浮かべて。
Ĺ
                          「わかるよ、いっしょに暮らしてるんだから。最近、魔材もよく落とすし、まっすぐ歩けてな
                                                                                 リリスは複雑な表情で、雨の向こうから僕をじっと見つめる。心配そうに眉根を寄せながら、
```

で終わってしまわないように。 帯は日を追うにつれて長くなっていた。 るのだが、『主砂降り』のときは白い縦線で視界が埋め尽くされる。そして、主砂降りの時間 「ご心配かけてすみまセン」と謝ると、リリスは長い髪を揺らして首を振った。 だから僕は、視力を完全に失う前に本の続きを読んだのだ。あの優しい読書会が、僕のせい ここ最近、僕の視力は加速度的に悪くなっていた。雨が『小降り』のときはまだ何とか見え 彼女の言うとおりだった。

「じゃあ、あらためてお願いするわ。聞かせてよ、ダークの続き」 「……ハイ、分かりましタ」 リリスは僕の顔を上目遣いに見た。彼女にしてはだいぶ遠慮がちな声だった。

「謝ることじゃないわ。……それで、本は全部読んだのよね?」

この非常時に悠長なことを、とは思わなかった。リリスも、何かしていないと不安だったの

だと思う。それは僕も同じだった。おそらくは、ポルコフも。 暗闇の中、行く宛もなく、頼るところもなく、追っ手がいつ、どこから来るかも分からな

僕たちには今、その物語が必要だった。 普段はとぼけているけど実は思いやりのある黒衣の魔神と、しっかり者だけど不器用な白銀

それは『真夜中の読書会』だった。

の指輪の、美しくて優しい物語が。

だから僕は語った。

「フラウ・スノウは驚きのあまり体を震わせましタ。そうです、ダークは、彼女のために新し

い指輪を用意したのデス」 僕はシリーズ第七巻『魔神の贈り物』を語り続ける。 隣ではリリスが「あっ」「う……」といちいちストーリー展開にやきもきしながら聞いてい

る。ボルコフは僕を抱えたまま、時々『ムム……』と低い声を出す。二人とも本当に熱心な読

前の第六巻では、魔法の指輪フラウ・スノウが、自信をなくして魔神の居城から『家出』し

てしまった。その後ダークが彼女の代わりとなる『新しい指輪』を作ってしまったのが、第七

たいへん美しい指輪でしタ。『これで君は大丈夫だ。ずっと、ずっと、大丈夫だ』フラウは感 がある』そう言ってダークは白い指輪を取り出しましタ。それは雪の結晶を宝石にしたような、 の材料集めをしていたからだった。 い指輪を作り出したのだ。彼が長らく居城を留守にしていたのは、フラウを助けるために指輪 る指輪がボロボロになっており、ダークはそれに気がついてフラウのために精魂を込めて新し 者の魂』を、指輪を媒体として蘇らせたものだった。そして彼女は、長年の頑張りで媒体であ **「ダークは優しい声で言いましタ。『親爱なるフラウ・スノウ。今日は俺から君にプレゼント** それはフラウ・スノウの『新しい体』だった。元々フラウは、魔界の神殿で眠っていた『死 そしてこの第七巻の後半部分では、ダークが新しい指輪を作った理由が明らかになった。

激のあまり何も言えまセン。だけどそのとき――」 フラウの魂が新しい指輪に移った直後、ダークの体に異変が起こる。彼は新しい指輪を作る

かないで』ダークは彼女を優しく手で包み込み、こう言いましタ。『フラウ、ごめん。それと、 とその姿を見つめながら、叫びましタ。『ああ、ダーク、行かないでください。私を置いてい ためにすべての魔力を使い果たしてしまったのだ。 『ダークの体は、ゆっくり、ゆっくりと光の粒となって空中に溶けていきマス。フラウは呆然

ことがずっと好きだった』その言葉を最後に、ダークの体はすべて光の粒となって弾けましタ。 そして、光の粒は天に昇り、やがて見えなくなりましタ」

僕がそこで区切ると、隣で「グスッ……」と鼻をすする音がした。

でつぶやいた。「絶対ハッピーエンドだと思ってたのに……」 「ダーク……」リリスは左手で目元を押さえ、何度も涙を拭った。それから少し悔しそうな声 |リリス?|

僕は残りわずかな第七巻を最後まで語り、一息ついた。

物語の余韻にひたるように、しばらく三人とも無言で歩き続ける。

五分ほど歩いたころ、僕は言った。

「じゃあ、いよいよ第八巻ですネ。最終巻の」

聞いちゃうともったいないし。それに今は……」 「待ってアイリス」リリスがすっと手を上げた。「それはまた、今度にしようよ。いっぺんに 本のストーリーを思い出したのか、リリスがまた少し涙ぐむ。僕は「……分かりましタ」と

「いいよね、ボルコフもそれで?」 リリスが尋ねると、ボルコフもこくりとうなずいた。

読書会が終わり、僕たちはまた静かに歩き続ける。真っ暗なトンネルの中を進むように、暗

闇を奥へ、奥へと進んでいく。この先に何があるのか、誰も分からない。 静かな川のせせらぎと、雨の音だけが聞こえる。

[battery=02:14:17]

それを見つけたのはリリスだった。

「これ、下水道の入り口だよね?」 そろそろ夜明けが迫り、僕たちが今日一日の隠れ場所を探すのに焦り始めていたとき。

リリスが指差したのは、ガード下にあるマンホール。草に覆われた状態ですっかり錆ついて

のも、こんなふうに雑草で覆われた丸い穴だった気がする。 いる。そういえば、魔神ダークがフラウの目を盗んで居城からこっそり脱出するときに通った 一ボルコフ、ちょっと開けてみて」 リリスの言葉に、ボルコフは腰をかがめてマンホールの蓋に手をかけた。金属の擦れる音が

したあと、ガパリと蓋が開く。 | どうするんですカ? 穴を覗きながら僕が尋ねると、リリスは「入るしかないでしょ。もうすぐ夜が明けるし」と 蓋の下には穴があり、暗闇が地下へと僕たちを誘っていた。

```
く、とてもボルコフは通れない。
えずに、彼女の肩にその大きな右手を置いた。
                                                                                                                                                                                                                                                                            ホール案をあきらめた。
                                                           一パカ。なにカッコつけてるのよ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   「あ、そうか」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |でも……」と僕はボルコフを見る。
                                                                                                                       「ぇ? 私たちだけで先に行けって言うの?」
                                                                                                                                                     「ボルコフ、残る。……リリスと、アイリス、先に行く」
                                                                                                                                                                                  「ん?」先を歩きかけたリリスが振り向く。「なんか言ったボルコフ?」
                                                                                                                                                                                                                「ボルコフ、残る」
                             リリスがボルコフの腕をちょんちょんと指でつつく。しかしボルコフはリリスの言葉には答
                                                                                            ボルコフがうなずく。
                                                                                                                                                                                                                                              そこでボルコフが口を開いた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                      彼女はフッと小さくため息をついてから「ま、仕方ない。他を探しましょ」とあっさりマン
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  リリスも気づいたようだった。マンホールの穴は直径一メートル程度。僕とリリスはともか
```

「な、なによこの手は……?」

224 言った。

```
たちの頭上をかすめる。
                                                                                                         「ちょっとボルコフ! 放しなさい!」とリリスが暴れるが、ボルコフは従わない。
                                                                                                                                                                                                                                                                                         「リリス、早く、降りる」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   「ちょっと! あれ、軍隊じゃない!」
                                                                      「軍隊の、狙い、ボルコフ」
                                                                                                                                                                                一ポルコフ、残る」
                                                                                                                                                                                                                                                      |何言ってるのよ! いっしょに逃げるわよ!|
そこでふいにボルコフは僕を見た。彼の目は無言で何かを語っていた。それはおそらく――。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      ボルコフが見上げた空には、いくつもの光点が星のごとく広がった。
                                   ボルコフは僕の体も掴み、リリスに続いてマンホールに押し込む。
                                                                                                                                        そして彼はリリスを力ずくで担ぎ上げ、マンホールに無理やり押し込んだ。
                                                                                                                                                                                                                   しかしボルコフはリリスの肩をがっちり掴んだまま、同じ言葉を繰り返した。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                夜空の光点はだんだんと大きくなる。それはヘリコプターの部隊だった。サーチライトが僕
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         それは夜明け前の一番暗い時間
```

「追っ手が、来る」

```
い瞳は静かに、だが揺るぎない意志を秘めていた。
                                                                                                                                                                                                                                                   安 全 回 路、壊れた。だから、武器、使えた……だから、作動した」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      「リリス、行きましょウ」
                                                                                                                                                                                                                    「作動って……なに、が?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                 『ボルコフ、トラックで、燃えた』彼はまるで他人事のように淡々と説明した。「その時、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                「……え?」とリリスが不安げな顔でボルコフを見返す。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              「壊れた」そのとき、ボルコフが唐突に言った。「ボルコフ、壊れた」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            それは
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           「ボルコフの気持ち、考えてくだサイ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         「ちょっと、アイリスまで何を言い出すのよ!」
                              僕はマンホール内のハシゴに摑まりながら、あらためてボルコフの顔を見つめる。その四角
                                                                                              ボルコフは今まで嘘をついたことはない。冗談を言ったこともない。
                                                                                                                             その瞬間、リリスは言葉を失った。
                                                                                                                                                                                      リリスが答えを聞くのを恐れるような声で尋ねたが、彼は変わらぬ低い声で告げた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        僕はリリスを引っ張る。
```

```
とで、これからの逃走の迷惑になるのを。
                                                    「嘘でしょ?」自爆装置なんて、本当は今思いついた嘘……なんでしょ?」
ボルコフは「本当」と短く答えた。
                           すがるように彼を見る。
                                                                                   リリスはゆるゆると首を振り、訊き返した。
```

僕は気づいていた。ボルコフは恐れているのだ。軍事用ロボットの自分がいっしょにいるこ

「だから、さよなら」

「ボルコフ、ダメ! 勝手に決めないで! いっしょに逃げるのよ!」 彼はリリスの言葉には答えず、僕を見て言った。

マンホールの蓋が閉まっていく。ボルコフの顔がだんだんと見えなくなる。

からじっとリリスを見つめた。 の手を押しのける。するとボルコフは、そっとリリスの腕を掴み、彼女の動きを封じた。それ 「……ボルコフ?」突然動きを止めた巨人に、リリスが不安げな眼差しを向ける。ボルコフは 「アイリス、リリスを、頼む」 リリスはあきらめない。「何よ、やめてよ!」開けなさい!」と必死に左手だけでボルコフ 僕はうなずく。彼の決心は固い。そして僕たちの力では彼は止められない。

黙ったままリリスを見つめる。時が止まったように、二人はお互いを見つめ合う。

「リリス」

このとき、ボルコフの言葉はいつもの途切れがちな口調ではなく、若い男性のような滑らか

な発音になった。

「君に会えてよかった」

それはまるで、告白のような響きで。

ンホールの蓋は閉じられ、その光は見えなくなった。

[battery=02:01:40]

落ちたところは下水道だった。大きな水しぶきを上げて、僕とリリスは激しく水面に叩きつ

れていっしょに落ちていく。

「あっ!」と短い叫び声を上げた彼女の体はマンホールの底へと落下し、僕も彼女に巻き込ま

だが次の瞬間、ボルコフは彼女を突き飛ばした。 リリスが目を見開く。唇を震わせ、何か言いかける。

落下していく最後の一瞬、ボルコフの目が悲しげに光ったのを、僕は見た。しかしすぐにマ

れた。

かすが、壊れかけのこの体ではどうにもならない。 僕はいったん沈んだあとに浮き上がり、なすすべなく下流へと流されていく。腕を必死に動

「……ゲフッ、ゴホッ!」 ゆうに百メートルは流されただろうか。リリスは僕を抱えたまま、何とか下水から上がる。 ち泳ぎの要領でそばにあるコンクリートの岸へと近づいていく。

リリスが必死に水面に顔を出しながら、僕の腕を掴んだ。そのまま僕の体を抱き寄せて、立

ーアイリス!」

左手を足場についたままの姿勢で、彼女は盛大にむせながら水を吐いた。上がった場所は下

水に沿って造られた通路のようだった。 「……ったく、なんなのもう!」

「あなた大丈夫? 水でガボガボよ」 「リ、リリス……ガガッ」 全身がずぶぬれで、回路があちこちでショートしている。 リリスが悪態をつく。僕は「ガ、ガガ……」と変な音を出したあと、やっと声を出す。

リリスは僕の体を赤ん坊のように持ち上げ、ぶんぶんと上下に振る。水がポタボタと僕の体

```
いない。泳いで引き返すのはどう考えても無理だった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               ほうを、じっと見ていた。
                                                                                                                                                                                 ·····八 1
                                                                                                                                                                                                              「行こうか、アイリス」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      「まったく、ひどい目にあったわ!」
役立たずの僕はせめてもの貢献として、視覚装置のライトを点灯して彼女の前を照らす。
                                                                                                                                                    僕が小さく返事をすると、リリスは黙って僕を背負った。
                                                                                                                                                                                                                                           彼女はしばらくの問うつむいて、それから顔を上げた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                               僕は黙ったまま、彼女と同じ方向を見つめる。下水の流れは速く、通路も上流側には続いて
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               ボルコフと別れた方向を。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         しかし、僕には彼女が強がっているのが分かった。その証拠に、彼女は下木の「上流」の
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      リリスが忌々しげに叫んだ。眉尻を上げて、怒った表情を作る。
                                しばらくは無言だった。
                                                                                       [battery=01:49:52]
```

内からあふれ出て、彼女の足元を濡らす。

```
ろうか。軍隊と交戦したのだろうか。自爆装置は----作動してしまったのだろうか。
十分ほど歩いたときだった。
                                    リリスは何も言わない。きっと、考えていることは同じだった。
                                                                                                                     彼女に背負われながら、僕はボルコフのことを考えていた。あのあと、彼はどうなったのだ
```

「あの人さ」リリスが、ぼつりと言った。「すごい、鈍いでしょ? - 目も悪いし、耳も遠い。

「あれね、ひとつには軍隊時代の後遺症なんだけど、それだけじゃないの」 彼女はそこで声のトーンを落とした。

しゃべり方もたどたどしい」

HH.....

リリスは何を言おうとしているのだろう。

一……どういうことですカ?」 「最近でこそずいぶん減ったけど、あの現場は一時期、不発弾の数がすごかったんだ。多い日

廃材は運ぶのやめようとするじゃない?」 には一日三台くらいのロボットが吹っ飛んだ。……そんなの見たらさ、普通は、不発弾っぽい

「でもね」リリスの声が少しだけ、震え出す。「あの人は、違ったの。自分から率先して、明 そこで彼女は僕を背負い直した。僕も彼女に掴まり直す。

らかに不発弾だという魔材を運んだの」 「どうしてですカ? それじゃまるで自殺行為デス」

れてたらガタがくるわ。それでもあの人は不発弾ばかり拾った。どうしてだと思う?」 「そう、自殺行為。ボルコフがいくら頑丈だっていっても、そう何度も何度も爆発に巻き込ま 僕は黙っている。リリスは震える声で続ける。

言ったと思う?」 おかしくなる。それでもあの人は不発彈を拾うの。私がやめろって言ったら、あの人、なんて それで自分はどんどん壊れていく。目も見えなくなるし、耳も聞こえなくなるし、言葉だって 「馬鹿だよね。『自分は爆発しても吹き飛ばないから』って、私の分まで拾うんだって。でも、 「私のため、だってさ」 リリスは足早に歩き続ける。何かを振り切るように。 彼女は突き放すように言った。そして震える声は早口になった。

その声が苦しそうに詰まる。「ボルコフ、爆弾、拾う」

「ボルコフ、うれしい……」

```
生だったのだ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             どなく路面に落ちる。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      「ほんと……バカ……だよね……」
昔、博士が僕にそうしてくれたように、後ろからそっと、優しく抱きしめた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         僕の脳裏にボルコフの言葉が蘇る。
                                 僕は黙ったまま、両腕に少しだけ力を込めた。
                                                               リリスは静かに泣き続けた。
                                                                                                                            彼はリリスのために生きていたのだ。それが戦場を失ったボルコフ・ガロッシュの第二の人
                                                                                                                                                          別れ際の言葉の意味が、今はっきりと分かる。
                                                                                                                                                                                         ―君に会えてよかった。
                                                                                                                                                                                                                       リリスと出会い、リリスのために爆弾を拾い、リリスのために警察とも軍隊とも戦った。
                                                                                                                                                                                                                                                  でも違う。彼はすでに見つけていたのだ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                彼はあのとき、生き方が分からないと言っていた。悲しげな目で言っていた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  ――でも、生き方、知らない。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              ---ボルコフ、殺し方、知ってる。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        彼女の肩に回していた僕の腕に、ぽたぽたと液体が落ちる。その粒は僕の腕をつたい、とめ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       そこで彼女は立ち止まった。
```

それはおそらく、僕たちの友人が砕け散る音だった。 地上から、大地を揺るがすような爆発音が聞こえたのは、その直後のことだった。

[battery=01:28:13]

り返った。 「なにか、聞こえない?」 聞こえるのは、ザアザアといういつもの雨の音。そして風の音と、下水が流れる音と――。 そうつぶやいて、リリスは耳を澄ました。僕も聴 覚装置の感度を最大値にする。 僕が「リリス?」と尋ねると、彼女は少しだけ鼻をすすり、泣きはらした目で僕のほうに振 リリスが立ち止まった。 下水道の中を、ゴウゴウと風が吹き抜ける。その風が一瞬だけやんだときだった。

リリスが唇を噛んだ。 「追ってきたようね」 「変数の、足音。

```
うだった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      彼らを足止めする存在がいなくなったことを意味していた。だけど僕も彼女も、もはや彼のこ
                                                                                                                                                                                                      きに下りてきた穴とよく似ている。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    ちの声がトンネル内を反響して聞こえてくる。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  とには触れなかった。それを口にしたらリリスはまた泣き出しそうだったし、僕は心が折れそ
「じゃあ、しっかり摑まってて」
                                                                「行くしかないでしょ。……ここにいたらいずれ見つかるわ」
                                                                                                                                                                  「もうオーヴァルの中でしょうカ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                   出口よ
                            男たちの声と靴の音は、さっきからだんだんと大きくなっている。
                                                                                                    どうしますカ?
                                                                                                                                 そうね、たぶん市内よ」
                                                                                                                                                                                                                               僕は天井を見た。そこには壁に設置されたハシゴと、上に続く縦穴があった。ここに入ると
                                                                                                                                                                                                                                                                                                   リリスがボリュームを絞った声で言った。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 僕たちは先を急いだ。視覚装置の照明を頼りに、下水脇の通路を早足で進む。時おり、男た
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      彼女の考えていることが、その震える肩から僕にも伝わる。軍隊が追ってくるということは、
```

236 三十秒も上ると天井には丸い金属の蓋が見えた。マンホールの出口だ。 リリスは僕を背負ったまま、壁に設置されたハシゴを握り、一段一段ゆっくりと上っていく。

左腕しかないリリスに代わり、僕は手を伸ばしてマンホールの蓋を慎重にずらしていく。

徐々に隙間から光が射し込んでくる。 半分ほど開いたところで、リリスがひょいっと顔を出した。

- よし、ついてる! 久しぶりの地上は夜が明けたせいもあり、とてもまぶしかった。出たところは建物と建物の 彼女は蓋を全部開けると、まず僕を地上に出し、それから自分が外に躍り出た。

間の路地で、ゴミがやたらに散乱している。遠くから聞こえてくるのは自動車の排気音だろう

「さあ、ここからが逃亡劇の第二幕よ!」 リリスはマンホールの蓋を閉めると、自分自身を奮い立たせるように勝気な声で叫んだ。

に気づくべきだった。 だが僕たちは甘かった。軍隊が本気を出せば、下水道の出口などすべて待ち伏せできること

このときの僕たちは軍隊から逃げきったと思っていた。

「じゃあ、急ぎましょアイリーー」

その言葉は言い終わる前に途切れた。

[battery=01:24:41]

まるで糸を失ったマリオネットのように、リリスは体をガクンと二つに曲げ、顔から飼れ込

それは血だまりのように路面に広がっていく。

「リリス!」

一なんだ、もう一匹いたのか」 「動くな! これは命令だ!」

狭い路地に怒声が響き、軍服の男二人が駆け寄ってくる。その手には熱線銃。

男の一人が僕の存在に気づく。

「ぐうっ……!」胸部を押さえてうめく彼女の体からは、どろどろと黒い液体があふれ出す。

ーを選ぶかのようにあっさりと僕の死を決めた。

「『コレ』は始末してもいいよな?」「ああ、かまわないだろ」と、彼らはまるで食事のメニュ

彼女の体を、二本の閃光が貫いた。

銃口が僕の顔に押しつけられる。余熱でジュウッと白い煙が上がる。

238

るで実感できない、現実逃避――。 僕はぼんやりと銃口を見つめる。最初にスクラップにされたときのように、目の前の死をま ――ああ、死ぬのか。

そのときだった。

とで男はバランスを崩す。 一ガアアアアッ!」 獣のような唸り声を発してリリスが体を起こし、目の前の男に体当たりをした。とっさのこ

後ろから「止まれ!」これは命令だ!」と常 套句が聞こえたが、彼女は今にも倒れ込みそ

その際に、リリスは僕を左腕だけで抱え上げ、脱兎のごとく駆け出した。

路地を抜けると広い通りに出た。前の道路では車が何台も行き交っている。

うな前傾姿勢で疾走を続ける。

一キャア! なにあれ!!」 通行人の女性が僕とリリスを見て叫んだ。上半身だけの鉄クズのような僕、そして胸から油

を垂れ流す片腕のリリス。すぐに他の人間たちも騒ぎ出す。 背後からはさっきの軍人の怒声が迫ってくる。リリスは一瞬だけ考えたあと車道のほうに走

```
リスはまず僕を荷台に叩き込み、それから自身はヘッドスライディングのように頭から滑り込
                                                                            一あれに乗るわよ!」
                            リリスが叫んだ先には信号待ちの小型トラック。信号が変わりトラックが出発する間際、リ
```

「リリス、いったいどこへ---」

[battery=01:16:56]

そしてトラックは発車した。

```
はみ出たチューブが暴れる蛇となって火花を散らす。
                              「な、なんですカ?」
                                                                                                                                                                       「リリス、リリス、大丈夫!!」
                                                         アイリス……」
僕は彼女の言葉を聞き取るべく、顔を近づける。
                                                                                                             彼女の顔は苦悶に歪んでいる。胸と腹に一箇所ずつ、握り拳ほどの大きな穴が開いており、
                                                                                                                                         車の荷台で、僕は必死にリリスに呼びかける。
                                                                                                                                                                                                あたりにサイレンが鳴り響く。トラックは市街地を走り続ける。
```

ったがそれは機動力を失っただけだ。三大回路をはじめとするメインシステムに損傷はない。 「繁華街を抜けたら……」彼女はかすれる声で言う。「すぐに、降りるから」 「でも」と僕は彼女の傷を見る。彼女は紛れもなく重傷 ―― いや重体だった。僕は下半身を失

それでも彼女は上半身を起こした。その途端、ゴボッと口から黒い油を吐く。

でもリリスは違う。この大量の機械油は明らかに主要な回路がダメージを負ったことを示して

「これくらい、何ともないわ」 「大丈夫よ」口元の油を左手の甲でぐいっと拭い、彼女は無理やり作った笑顔を僕に向けた。 リリス!

り転げ落ちた。トラックは僕たちに気づかずにそのまま走り去っていく。 「ほら、降りるわよ」 車が減速したタイミングを見計らい、リリスはトラックの荷台から飛び降りた――というよ リリスが僕を抱きかかえる。僕は彼女のタフさに驚愕しつつ、動けない自分の体を呪う。 五分も走るとトラックは市街地を抜け、人通りの少ない郊外の道に入った。 しかし言葉とは裏腹に、彼女の胸と腹からはだらだらと黒い液体が流れ続けている。

「あ、そこに入るわよ」

リリスはよろよろと立ち上がり、少しだけあたりを見回す。幸い、人影はない。

リリスは僕を背負い直し、よろめく足で家の敷地に入っていく。背負われるだけの僕にはど リリスが目配せした先には古びた一軒屋があった。看板には不動産屋の名称と『売出中』の

うすることもできない。

玄関を横目に通り過ぎ、庭に入ると、そこは雑草の伸びきった荒地だった。

彼女は軒下に身を横たえた。ここなら家の敷地に入ってこない限り、道路からは見えない。

|リリス……| リリスの体は、もう、滅茶苦茶だった。飛び降りた拍子にはずれてしまったのか、銃で撃 僕はため息のようにその名を呼ぶ。

「へへ……だいぶ、ひどいねこりゃ……」リリスは軽い調子で言うと、横たわったまま自分の

にのたくり、パチパチと火花を散らす。

----これじゃ、バッテリーが······。

たれた穴からは何本もの配線と回路がはみ出している。濁電したチューブが別の生き物のよう

胸を触る。その手ではみ出した回路を体内に押し戻そうとするが、うまくいかない。 一アイリス」 「なんですカ?」

これを……」

242 彼女は胸に開いた穴に左手を突っ込み、何か四角い箱状のものを取り出した。

「開けてみて」 機械油で真っ黒に汚れているそれは、カードケースだった。

表面に聞き覚えのある銀行名が表記されている。 彼女の指示に従ってケースの蓋を開けると、一枚のプラスチック製のカードが入っていた。

「……キャッシュカード?」僕はリリスを見る。 「そう。暗証番号は、HRM019。私の認識番号ね」

ろう? 僕は彼女が何を言っているのか分からない。どうして今、キャッシュカードを渡されるんだ

とする近隣の地図だった。一箇所だけペンで丸がついている。 「それと、ケースの一番下」リリスは淡々と指示を続ける。「紙、あるでしょ。広げて」 僕は言われたとおり、ケースの底にあった一枚の紙を広げる。それはオーヴァル市をはじめ

リリスが話すたびに、黒い筋が口の端をつたう。

一そこ、ジャンク屋ね」

一ほら、前にも話したよね。ライトニングって、ロボットのこと」

た。ボルコフに似た、大型のロボット。 ライトニング――それは以前、リリスが僕に話してくれたジャンク屋のロボットの名前だっ

「そこに行って、彼に修理を頼みなさい」

6 「ま、待ってくだサイ」僕は不安にかられて彼女の言葉を遮る。「リ、リリスも、いっしょで 「移動するときはくれぐれも慎重にね。とっさに隠れるときは、車の下がオススメよ。それか

「バカね。……この体じゃ、無理に決まってるでしょ」

「じゃあ僕、そのジャンク屋さんに着いたら、リリスのことをお願いしてみマス。だから、こ

こで待っててーー」

が残り少ないことを示していた。 「リリス、そんなこと言わないでくだサイ。そのジャンク屋さんにお願いすれば、きっと……」 「私は、もうだめよ」 「アイリス」今度はリリスが、僕の言葉を遮った。「よく聞いて」 その言葉に、僕は胸が締めつけられる。 その口調はまだしっかりしているものの、瞳はすでにうつろだった。光が薄れ、バッテリー

「だめ」リリスは強く首を振る。首筋から何かの液体がこぼれる。「そんなことしたら、お金

が足りなくなる。あなたを直せなくなる。それは絶対にだめ」

244 「リリス、待って。リリスを置いてなんか、行けまセン」 僕は哀願するように彼女を見つめる。しかしリリスは首を振り「ほら、はやく」と言った。

リリスを見捨てて、一人で逃げる。そんなことは考えられない。考えたくもない。

た。「だからこれは受け取れまセン」 「……いやデス。一人で逃げるなんて、絶対にいやデス」僕は彼女にカードケースを突き返し

「アイリス・レイン・アンヴレラ!」リリスは左手で僕の肩を強く掴み、恐ろしいまでに目を その瞬間だった。

見開いた。「甘ったれてんじゃないわよ!」 「いい?」あなたは生きるの!」そのカードがあれば、あなたは直せる!」でも私は無理! その剣幕に僕はビクッとのけぞる。彼女は鬼気迫る勢いで、僕をガクガクと激しく揺さぶる。

よ! 弱気になったらすぐにスクラップなんだから!」 |もっと強くなりなさい!| 一人でも生きる強さを身につけなさい!| 世の中は甘くないわ

彼女はそこで激しく油を吐いた。僕の顔にも黒いしぶきが散る。

だったら、あなたを直すしかないでしょ!」

「さあ、行きなさい! はやく!」 それでも彼女は続けた。



246 いやデス……」と繰り返す。 でも、でも! 「アイリス! これ以上私を困らせないで!」 リリスは険しい表情で僕を見つめる。僕は彼女の手を握り、駄々っ子のように「いやデス、

そうやって僕が拒絶を続けて、しばらく経ったときだった。 彼女はふいに、優しい笑みを浮かべた。

ている。「ひとつ、いいことを教えてあげる……」 「アイリス」彼女は左手をそっと持ち上げて、僕の頰を触った。その手はベットリと油に塗れ

リリスは僕に諭すように言った。

こも隙間だらけで、自分さえその気なら、何をやっても生きていけるの」 『世の中ってね……あなたが思ってるより、ずっと、いい加減に出来てるのよ。……案外、ど その細い指先で、彼女は僕を慈しむように何度も撫でる。僕は彼女の職が薄れていくのをた

だ呆然と見つめる。 「だから大丈夫。あなたは一人でも、ちゃんと生きていける。……もっと、自信を持ちなさ

い。だってあなたは――」 彼女は僕の目をまっすぐ見つめ、かすれる声で言った。

「最後まで、愛されたロボットなんだから……」

そこでリリスの手は、力尽きたように僕の頬を滑り落ちた。

だけど、そうだとしても、納得できないこともある。

僕はどうすればいい。博士ならこんなとき、どうするだろう。

そう、博士なら、きっと――。

「リリス、聞いてくだサイ」

りマス。こうやって、つながることで大きくなる――それが8の字で、僕たちデス」 もう片方のわっかは吸殻入れだ。それを二つ、またくっつけてみる。 -----ほら、こうやって、8の字は二つの『わっか』に分かれますよネ-----」 いる思い出の品。そのケースを開けて、中から8の字型のリングシガレットを取り出す。

これは博士の受け売り。いつだったか、特別講義の他爱ない雑談で聞いたこと。でも、博士

「見てくだサイ。一個だと『0』。こっちも一個だと『0』。でも、二つ合わせると『8』にな

「昔ね。博士が教えてくれたんデス。僕たちは、この8の字シガレットみたいなものだって。

僕は胸の蓋を開け、灰色のシガレットケースを取り出した。それは博士と僕の写真が入って

僕は彼女の前で、8の字シガレットを二つに切り離す。片方のわっかは禁煙用シガレット、

りもずっと正しい。

きっと彼女のほうが正しい。ずっと一人で生き抜いてきた彼女の意見は、世間知らずの僕よ

```
しくなかった。だから続けた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         くらい小さな声で言った。その瞳の光はもうほとんどない。
                                                                                                                                                                                                                                                        「僕は絶対に、君を助けるから」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             一つなんデス。二人いっしょじゃないとダメなんデス。だからねリリス」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             「僕と博士。リリスとボルコフ。そして今、僕とリリス。8の字シガレットのように、二つで
                                                                                                                                                                                                                                                                                       このとき僕の電子音声は、わずかだが元の肉声のような響きになった。
僕はしばらく、動かなくなったリリスを見つめていた。
                                                                                                                                               彼女のバッテリーはそこで切れた。
                                                                                                                                                                              ただ、一度だけ瞬きをして、目を閉じた。
                                                                                                                                                                                                                     リリスは何も言わなかった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  屁理屈でもよかった。僕はただ、彼女に死んでほしくなかった。生きることをあきらめてほ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        リリスは僕の持っているシガレットを見つめ「そんなの……屁理屈よ……」と聞き取れない
                                                                     [battery=00:58:34]
```

彼女に偉そうなことを言ったくせに、僕は早くも不安になり始めていた。今まではすべてリ

のシガレットを見るたびに思い出すこと。

ない。誰も助けてはくれない。誰も考えてはくれない。 そこはヴィーナス噴水広場のすぐ近くだった。場所からして商店街の店の一つだろう。問題 僕はすがるようにまたカードケースを開く。地図を取り出し、丸のついた場所を確かめる。

リスが先導してくれた。追っ手が来たときはボルコフが助けてくれた。でも今は僕一人しかい

ィクス研究所の位置から割り出せる。 は方角だったが、それも壁の向こうに見える一際高い白いビル――オーヴァル大学第一ロボテ

確認を終えた僕が、地図をカードケースに戻そうとしたときだった。

今の凛としてたくましいリリスとは別人のように思えた。 彼女の両脇には三十代くらいの夫婦らしき男女が微笑んでいる。 写真の中のリリスはとても嬉しそうに笑っていた。その笑顔が、あまりに幼くて、無防備で、 写真には三人の人物が写っていた。中央にはかわいいフリルつきの服を着たリリス。そして そこで僕は、ケースの内側に貼ってある、一枚の小さな写真に気づいた。

僕は彼女の言葉を思い出す。

――薄情なものよね。勝手に造っておいて、いらなくなったらポイなんてき。

僕は改めて写真を見る。三人の幸せそうな家族。絵に描いたような幸福の一瞬を切り取った あのときの彼女は、肩をすくめて、ずいぶんとクールな物言いだった。

四角いフレーム。その中で彼女は、疑うことを知らない天使みたいに一点の曇りもない無垢な 笑みを浮かべている。このあと自分を待ち受けるひどい裏切りも知らずに。

な気持ちで、過去の幸せな自分を見てきたのだろう。 そして彼女は、今もこの写真を大事に胸にしまっている。自分を捨てた両親の写真を、ずっ 僕は胸が痛くなった。彼女は今まで、何度この写真を見返してきたのだろう。いったいどん

顔をこちらに向けていた。僕は右手を伸ばし、彼女の焼け焦げた左の頬をそっと優しく撫でる。 バッテリーが切れたリリスの表情からは、さっきまでの険しさが消えており、あどけない寝 ――もっと、自信を持ちなさい。だってあなたは、最後まで、愛されたロボットなんだから……。

| 僕は絶対に、君を助けるから | 僕はもう一度、誓いの言葉をつぶやく。 すると、目尻から涙のように、黒い油がつたった。ほろり、ほろりとつたった。

それから僕は、リリスの体を近くの茂みまで運び、見つからないように隠した。彼女のカー

ドケースは博士のシガレットケースといっしょに胸の奥にしまう。

ないし、公衆電話もこの姿では難しい。では、いったいどうすればヴィーナス噴水広場のジャ リスの言うジャンク屋までたどり着く方法を考えなければいけない。しかし携帯電話は手元に この姿でまっすぐ進んでも、すぐに誰かに通報される。それではだめだ。もっと確実に、リ

そして僕は、しばし考え込んだ。

ンク屋までたどり着けるだろう。広場までの距離は、目測で二キロ弱。

博士といっしょに通りがかったあの広場。そうだ、あそこで博士は、行き倒れのロボットを助 けたんだ。そして、あのロボットが広場の前までたどり着いた方法が確か――。 ヴィーナス噴水広場。この言葉で僕はあることを思い出す。昔、映画を見たあとの帰り道に、

排水溝だ……」 ---この子……こんな狭くて暗いところを通ってきたのね……。

そこで博士の言葉が蘇った。

[battery=00:43:08]

レーザーで焼き切れていた下半身から、垂れ下がったチューブや配線をすべて引きちぎる。

出発する前に、僕はまず自分の体を『加工』した。

251

動くのに邪魔だし、道路とぶつかると音が出てしまうからだ。そのあとは自分の体内からすで に機能していない装置を引っ張り出した。下半身を動かすための駆動機系統をはずすと、だい

た。肩ごと引っこ抜くように力を込めると、腕は簡単にはずれた。自分の体がジャンクパーツ ぶ体が軽くなる。 はずし、その中にもぐり込む。少しばかり溝が狭かったので、ここで左腕は放棄することにし 加工が終わると、僕は家の敷地から道路に出た。人が来ないうちに一番近くの排水溝の蓋を

がずるりずるりとほふく前進で移動する。まるで映画で見たゾンビみたいな動きだが、なりふ の寄せ集めであることがこのとき初めて役に立った。はずした腕は排水溝の奥に押し込んだ。 排水溝の中はぬるりとした苔でびっしり覆われている。その中を、頭と右腕と胴体だけの僕 そして僕は出発した。

りなどかまっていられない。

とか角を抜ける つ調整して、少しずつ押し込むように進む。曲がり角の対角線スペースをうまく生かして、何 排水溝の角まで来ると、体がつっかえた。僕は腕を曲げ、首を曲げ、体の向きをちょっとず

ルくらいのこの四角い蓋が道沿いにどこまでも続く。どの蓋にも網の目のような穴がいくつも 排水溝の上には、金属製の檻にも似た四角い蓋がついている。幅三十センチ、長さ一メート やればできる。

り上を見て現在地を確かめながら、黙々と腕を動かした。 開いており(雨水が入る穴だろう)、『地上』の様子をうかがうのにとても役立った。僕は時お

そうやって三十分ほど進むと、やがてオーヴァル駅前商店街に差しかかった。魚屋さんの看

ビル・ラビル鍋を博士に作るために。 らいだろうか。そういえば、三ヶ月前はこの魚屋さんでお魚をまるまる一匹仕入れたんだっけ。 板が見えたので、今は商店街の東の区画だ。女神像のある噴水広場まではあと五百メートルく

でなければとっくにお手上げである。そう、まだツキはあるんだ。女神様は僕を見放してはい 今なら、長さの違う左腕が地面と擦れないで済む。 の破片のように切り取られた景色が小さく見えるだけだ。ここが通いなれたオーヴァル商店街 視界はかなり悪い――というより、もうほとんど何も見えない。右目は失明、左目はガラス 僕は右腕だけでほふく前進を続ける。両腕のときよりも体を動かしやすいのが皮肉だった。

排水溝の上を、商店街の買い物客が時々通過していく。僕はそのたびに息を殺してじっとや

れないだろう。お肉屋さんの看板がちらりと上空に見える。そうだ、ここも三ヶ月前に買い物 り過ごす。もし見つかったら、この姿では誰もアンヴレラ邸のメイドロボットだとは信じてく

の長ネギを買ったっけ。何もかもが懐かしい。 したな。あのときは確かビーフスープ用のお肉を買った。この先の八百屋さんではベリオル産

僕は帰ってきたんだ。

夕屋は、その途中、メインストリートの中ほどにあるはずだった。 だからあと、五十メートル。

噴水広場。噴水の真ん中に博士そっくりの女神像がある場所だ。リリスの教えてくれたジャン

八百屋さんの角を曲がると、いよいよメインストリートに出る。まっすぐ行けばヴィーナス

僕は最後の直線を進むべく、右腕をぐっと前に伸ばした。 そのときだった。

突然、体がガクッと重くなった。

まずい。バッテリーが。

急がないと。 あと二十メートル。 はやく、はやく。

あと二十メートル。 もうすぐ、もうすぐだ。

腕を動かすひとかき、ひとかきが、重くて、苦しい。

あと十メートル。

```
ずらりと並ぶ商店街の中で、一本だけ抜けた前歯のように、そのスペースだけが四角く消失
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        僕は頭上にある排水溝の蓋をはずした。ずるり、ずるりと右腕だけで体を持ち上げ、外に出
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   あと五メートル。あと三メートル。あと……。
いつか見たニュースが。
                             ---今日午後一時ごろ、
                                                                                                                                                     そこにジャンク屋は、なかった。
                                                                                                                                                                                                                                              最初からそれが偽りの希望だったことを。
                                                                                                                                                                                                                                                                            そして僕は、思い知る。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 動いて僕の体。あと少し、あとほんの少しでいいの。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               腕が痛み、胴がきしみ、キイキイと体中から悲鳴が上がる。
```

――オーヴァル駅前のヴィーナス噴水広場にて、

256 キャスターの声が。

僕は真相に気づき、愕然とその場で虚空を見つめる。 うつろに僕の中に響いた。 ――ロボットが突然暴れ出す事件がありました。

何度見ても、そこには何もない。平らにされた敷地に、わずかな雑草。それだけしかない。 - 嘘だ。

うも否定しようもなく、目の前の更地が地図で丸をつけられた目的地だった。 そしてニュースキャスターの言葉が、僕の中で、ある言葉と重なる。 右隣はクリーニング店、左隣は文具店。どちらもシャッターが閉じられている。もう疑いよ

──付近の『中古品販売店』で作業中の大型ロボットが──。

このとき、僕の中で絶望的な真実が確定した。――まさか。

て、店を破壊して、噴水広場の前で熱線銃を浴びてバラバラにされた、あの大型ロボットが彼 リリスの言う『ライトニング』は、いつかニュースで見たあのロボットだったのだ。暴走し

だったのだ。

あのとき掲げられた生首こそが、ライトニングだったのだ。

リーを一つ。 ッテリーがなければただ死を待つだけだ。そうだ、バッテリーだ。何をおいてもまずはバッテ う激しさを増し、わずかに残っていた視界の破片も、かすかに聞こえていた音も、すべてを押 し流していく。 今から引き返す? 無理だ。とてもじゃないがそんな余力はない。それに戻れたところでバ 追い討ちをかけるように『雨』はますますひどくなった。目の前を覆う無数の白線はいっそ どうしよう。リリス、どうしよう。 追い詰められた僕は、ざりざりと道路に頭を擦りつける。 そこから先なんて考えているわけがない。 最後の希望にすがって、ここまで重たい体を引きずって必死にやってきたのだ。 どうしていいか分からない。 存在しないジャンク屋を前にして、僕は硬直していた。 [battery=00:05:36]

そうだ、アンヴレラ邸だ。あそこに行けばバッテリーがある。修理だってできる。あれから

はない。行くんだ。行くしかないんだ。 三ヶ月。果たして中に入れるだろうか。それ以前に取り壊されていないだろうか。 僕は疲れた体に鞭を打ち、最後の力を振り絞って腕を持ち上げる。 僕は迷いを振り切るように首を振る。考えている場合ではない。もうあそこしか頼れる場所

残されたかすかな希望に向かって、腕を伸ばして、路面を掴んだ。 しかし。 ――警告。

ひどいよ。こんなのってないよ。僕は右腕で路面を叩く。悔しさとふがいなさで、怒りに似 それは死の宣告。余命五分の、容赦のない告知。 ――アト五分デ、バッテリーガ切レマス。スミヤカニ充 電ヲ開始シテクダサイ。

久々に聞いた抑揚のない電子音声は、最悪の知らせだった。

ピーッという発信音が僕の精神 回 路内に響いた。それはまるで心拍が停止したときの心電図。

ぐぐっと体を前に引き寄せる。下半身のない体からはまたチューブがはみ出る。それが道路と た感情が湧き上がる。 それでも僕は右腕を伸ばした。一縷の望みにすがるように、道路に爪を立てるようにして、

の摩擦でギイイッ、と嫌な金属音を出す。僕はそれでも腕を伸ばす。何度も、何度でも伸ばす。

――アト三分デス。スミヤカニ充電ヲ開始シテクダサイ。

時間は容赦なく過ぎる。刻一刻と腕が重くなり、体が動かなくなる。空から強い力で押さえ

つけられているような重圧感。それでも僕は、片腕だけのほふく前進を続ける。 雨がますますひどくなる。土砂降りどころではない。嵐だ。すべてを搔き消す大嵐だ。僕の ――アト二分デス。スミヤカニ充電ヲ開始シテクダサイ。

動きがほとんど止まる。時間だけが過ぎていく。 僕の中で急激に気力と体力の炎が小さくなっていく。絶対に助けると誓ったリリスとの約束 ――アト一分デス。スミヤカニ充電ヲ開始シテクダサイ。

こんなところで、僕は、僕は。 が、まるで遠い過去のようにぼんやりと輪郭を失い、体の奥底から魂が根こそぎ刈り取られる。 あと四十秒、三十秒、ああ、二十秒、十秒――。 ああ、終わる、終わる、消える、消える、僕の命が、リリスの命が、嫌だ、嘘だ、そんな、 ――バッテリー終了。システム、ダウン。

その声は雷鳴のごとく僕の中に轟いた。 心が折れる、そのときに。

凛とした、力強い声で、――アイリス・レイン・アンヴレラ!

彼女は僕を揺さぶった。 ――甘ったれてんじゃないわよ! ――さあ、行きなさい! はやく!

「ウアアアアアアアアアアアッ!!」

それからだった。 そして体内のわずかな残り火を搔き集めて、僕は右腕を振り上げた。 僕は叫んでいた。獣のごとき咆哮だった。自分の声じゃないみたいだった。

らエネルギーのマグマが噴き上がる。そのマグマは勢いのままに僕を突き動かす。 がうなり声を上げて覚醒し、精神"回"路が熱く、熱く、熔解しそうなほど燃焼し、体の奥底かギアが切り替わるように、僕の中で急速に何かが回転し出した。一度はダウンしたシステム 僕は空を殴るように右腕を振り上げ、それから力いっぱい振り下ろして自分の全体重を路面

に叩きつける。指先に渾身の力を込めて、体を前に引き寄せる。

リリスの言葉が僕を力強く後押しする。

――もっと強くなりなさい!

体が路面に擦れて火花が散る。 ――一人でも生きる強さを身につけなさい!

そうだ! 強くなれアイリス・レイン・アンヴレラ!

女との誓いを掴み取る。 嵐が吹きすさぶ中、僕はすべてを懸けて、おのが未来に向かって、渾身の力で腕を伸ばす。 ――世の中は甘くないわよ!

僕は力任せに腕を振り上げる。前に、前に、少しでも前に腕を伸ばし、路面を、未来を、彼

――弱気になったらすぐにスクラップなんだから!

散らしたように、記憶の断片が舞い散る。砕け散った記憶のガラスは僕の人生を幾重にも切り リス、ボルコフ、脱走、レーザー、炎の巨人――すべてが僕の体を激しく突き上げ、背中を押 取り、博士との幸せな日々、突然の別れ、もがれる四肢、変わり果てた僕、廃材、胃、腸、リ オーバーヒートした僕の体内で、思考が混乱し、データが錯綜し、思い出のアルバムを破り

だが次の瞬間。

えなっ

の中の封じられていた記憶――見知らぬ家、見知らぬ家族、殴られ、蹴られ、壊され、燃やさ 記憶のガラスは色を変え、反転し、僕に向かって悪意を持って突き刺さり出した。それは僕

だ、こんなに寒いのは嫌だ、こんなに寂しいのは嫌だ、どうして忘れていたんだろう、どうし れ、逃げ出して、逃げ出して、自動車が、ああ、腕が飛び、脚がもげ、ひしゃげて、潰れて、 雨の日に、僕は、僕は、僕は、あの人にあの人にあの人に。 逃げて、体を引きずって、引きずって、車に轢かれて、それでも引きずって、そうだ、あの、 て思い出したんだろう、僕は逃げ出したんだ、あの家から、僕を傷つけるあの家から、逃げて、 み、悲しみ、そのすべてが僕の中で攪拌され、凝縮され、噴き出して、流れ出し、ああ、嫌 そのときだった。

262

誰かが時間を止めて、僕だけを世界から切り離したように。 本当に、唐突に。 雨がやんだ。

[battery=00:00:00]

どこまでもひろがる雪原のような世界。 すべての音が失われたような静寂の世界。 すべての色が奪われたような真っ白な世界。 いったい何が起きたのか理解が追いつかない。 僕は重い首を持ち上げて周囲の様子をうかがう。 あらゆる音声を掻き消していたあの嵐が、消えた。 そのまぶしいほどの銀世界の果てに、

```
これは夢か。白昼夢なのか。なんで。どうして。僕は目を疑う。
```

博士が立っていた。

どうして今日は、噴水の真ん中に立っているんですか?

ウチにありましたっけ。 したっけ。じゃあ今お返ししますね。 それに、それに、博士、博士 どうして今日は、そんなに白いお洋服なんですか。いつもの白衣とも違いますね。そんな服、 どうして今日は、いつものシガレットケースを持ってないんですか。あ、僕が持ってるんで どうして今日は、眼鏡をかけてないんですか。家に忘れてきたんですか。 それにしても、博士。なんだか今日はいつもと様子が違いますね。 博士、待っててくださいね。今、そこまで、行きますから。 ああ、博士。生きてらしたんですね。それならそうと、早く言ってくれればいいのに。

でも博士が。僕の博士が、たしかに、そこに立っている。僕を見て微笑んでいる。 僕は脱力する。安堵する。体の奥深いところが満たされ、恍惚とした表情で博士を見つめる。







□国防軍、脱走ロボットを鎮圧

によって事態が収拾された。 九日深夜に発生したRL総合建築株式会社のロボット脱走事件は、最終的には国防軍の出動

た。その後の調査により、このロボットはかつて北方戦線に投入された軍事用ロボット『F-オルビット市の郊外で抵抗を続けていた大型ロボットも、軍の攻撃によって無事に鎮圧され

声明を出していない。また『F - 110型』の開発に携わった軍当局、およびロボットメー 110型』だったことが判明した。『ウロボロス』の異名をとった機甲兵団の主力ロボットだ。 なぜ、廃棄されたロボット兵器が建築現場で使用されていたかについては、RL総建は公式

カーのガロッシュ社では、責任問題に発展することが必至だ。……

○八月十四日付『デイリー・オーヴァル』社会面より抜粋

□紙片は児童文学と判明

には大量の紙片が舞い散った。この紙片が何なのかが事件との関係で注目されたが、このたび 事件当日、最後まで抵抗していた大型ロボット『F‐110型』の体が爆発した際、現場 九日に起きたRL総建のロボット脱走事件について、十三日午後、軍の広報課から発表があ

の発表で明らかになった。

社)であることが判明した。 されたサンディ・ウインドベル氏の児童文学『三流魔神ウェザー・ダーク』(全八巻、ヘクト これが今回のロボット脱走事件とどう関係しているのかは、目下のところ調査中である。

紙片は元々、複数の書籍だった。焼け残った紙片に残された文字から、それが十年前に発表

終章

□当世ロボット考〈第三十五回〉『あるロボットの最期』 十日の早朝のことだ。

待ち時間を潰していた男性は、ある奇妙な光景を目撃することになった。 オーヴァル駅前のヴィーナス噴水広場で、リングシガレットを吹かしながら始発列車までの

女神像の前で、一台のロボットが行き倒れになっていた。

れていた。胴体には頭部と右腕一本しかついていなかった。 しかしロボットは、ほふく前進のように腕だけで体を引きずり、商店街のメインストリート その行き倒れロボットは、上半身しかなく、下半身は爆発に巻き込まれたように無残にちぎ それだけならよくある話だが、今回特に珍しかったのは、ロボットがそうなるまでの経緯だ

ッテリーが尽きたのか、そこで動かなくなったそうだ。 た。ロボットはその後、女神像と会話をするみたいにぼそぼそと独り言をつぶやいたあと、バ 中央にたどり着くと、女神像の足元に何かを差し出した。それは銀色のシガレットケースだっ を通って女神像に向かっていった。そして百メートルほどの距離を十分以上もかけて、噴水の

私はこの話を聞いて、五月に不慮の事故で亡くなられたロボット工学の権威・アンヴレラ博

を見ていたのではないだろうか。もしアンヴレラ博士が生きていたら、ぜひご意見を採聴した (中略) なお、

いものだ。……

ロボット管理局オーヴァル支部に問い合わせたところ、このロボットの残骸はすでに

廃棄処分になったそうである。

(文責 カレン・クラウディ)

の説に強い興味を覚える。今回取り上げた噴水広場のロボットも、きっと最後の瞬間に幻覚

に幻覚を見せるのだ、と。 博士が亡くなって以降、その説を裏づける証 拠はいまだ出ていないが、それでも私は博士

士のある講演を思い出した。博士は、暴走事件の際に生じる現象の一つとして、ロボットが

『幻覚』を見ている可能性を指摘していた。愛する主人を追い求める強い気持ちが、ロボット

愛しいアイリスへ

でも、直接話そうとしたら、いろいろと感情的になってしまいそうだし(何より恥ずかしい あなたに改まって手紙を書くなんて、やっぱり何か変な気持ちです。 ……なんて思わせぶりな書き出しは、ドラマみたいで照れますね。 この手紙をあなたが読んでいるということは、私はすでにこの世にいないのでしょう。

まず最初に。

実は、あなたを造ったのは私ではありません。

し)、やっぱり手紙を書くことにします。

私とあなたは、三年前に出会ったのです。 私は今まで、あなたを三年前に開発したと説明してきましたが、これは私の嘘です。 でも、嘘をついたのには訳があります。

```
寂しくて、そのことを思い出してはめそめそと泣いていましたから。
                                                                                                                                                                                                                                                                                     す。あとでロボット管理局に連絡して回収させようと、そのときは思いました。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  ぎれていたし、腹部からはチューブや回路がはみ出していました。人工皮膚もほとんどが剝が
                                                                                                                                                                                                            姉さん……」と。
                                                                                  そして、あなたの声は、妹のアイリスによく似ていたのです。
                                                                                                                         あのときは妹が亡くなって半年になろうとしたころでした。
                                                                                                                                                                     私はびっくりしました。
                                                                                                                                                                                                                                              でも、私がアーチをくぐろうとしたとき、あなたはこう言ったのです。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             とても気味が悪かったし、どうせ最近増えているロボット産廃の不法投棄だと思ったからで
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    だから私は最初、あなたを無視して通り過ぎようとしました。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         初めて見たとき、あなたはまるでスクラップにされた鉄の塊のようでした。右腕と左脚がち
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                それがあなたです。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              その日の夕方、私が自宅まで帰ると、正門のアーチの前に見知らぬロボットがうずくまって
                                           いや、今思えば、私が勝手にそう思い込んだだけかもしれません。妹を失ってから、ずっと
```

とにかく、そのときの私には、あなたのことが猫みたいに体を丸めて凍えている妹の姿に見

らず、腹部には自動車に轢かれたような痕がありました。特に精 神 回 路は損傷がひどくて、 いまだに過去の記録を再生できないままです(あなたに昔の記憶がないのはそのためです)。 の体がほとんどの主要なパーツを失っていたせいでした。メインの回路はまったく機能してお そして私はあなたを家まで運び入れました。背負ったとき、あまりに軽かったのは、あなた 気がつくと、私はあなたに傘を差しかけていました。あなたの体が、これ以上濡れないように。

したが、やはりあなたには真実を知る権利があると思うので、書いておきます。 まで、とても高価な部品で造られていました。しかし一方で――これは書こうかどうか迷いま を管理局に登録することで、ユーザーの権利と責任を定める、いわばロボットの戸籍のような あなたも知ってのとおり、この国には『ロボット登録制度』があります。ロボットの所有者 修理する際に、私があなたを『アイリス』と名づけ、妹と同じ姿にしたのには訳があります。 その人は相当なお金をかけたのでしょう。あなたの体は、精神回路からボディの各部に至る 私は当然、あなたの所有者登録を調べました。すると、とある資産家の名前が出てきました。

発見されたとき、あなたの体には無数の、本当に無数の虐待の痕がありました。鈍器や刃

これはロボット工学的には前例のない現象で、真相は今もって研究中です。 くなります。私がメンテナンスのときに、あなたの皮膚を細かくチェックするのも、実はこれ 物で意図的に傷つけられたとしか思えない傷が、全身のいたるところに付いていました。それ が理由です。ちょっと時間が経つと、あなたの体には『昔の傷』が浮かび上がってくるのです。 はたいへん執念深い、狂気を感じさせるものでした。今でもその傷痕を思い出すと背筋が寒 私は恐れました。あなたの前の所有者が、もしかしたらあなたを奪い返しに来るかもしれな

ットは、ユーザーが存命中である限り競売や没収の対象にならない、という制度上の法的効果 名義がある以上、あなたを巡って裁判になれば私の敗訴は確実です。 だから私は『遺族所有登録制度』を利用しました。亡くなった肉親を模倣して造られたロボ

い。そしてまたあなたをこんなひどい目にあわせるかもしれない。でも向こうに管理局の登録

を狙ったのです。これなら相手も手出しができないし、警察の調査対象からも外れます。 あなたにとっては、今の妹の姿は不快かもしれません。亡くなった妹の代わりに造られたこ

せん。本当です。私にとってあなたは世界でただ一人のアイリスなのです。 とで、胸を痛めているかもしれません。 でも、これだけは信じてください。私はあなたを妹の代用品だと思ったことは一度もありま

長くなりましたが、あと少しだけ。

違います。 私は今まで、妹の死因をトラックとの衝 突事故だと説明してきました。これは事実と少し

めです。妹と同じような被害者を出さないために、研究者として少しでも貢献したいと思った のです。そして助手席に乗っていた妹だけが亡くなりました。 私が暴走ロボットの研究を始め、司法解体にも積極的に立ち会うようになったのは、そのた 正確には、私と妹が乗っていた自動車は、トラックではなく暴走したロボットに激突された

したロボットというのは非常に不安定で、いつどんな形で『不幸な事故』が起こるか予測がつ いま、この手紙を書いているのも、この暴走ロボットの研究が非常に危険だからです。暴走

です。だから万一のことを考え、あなたに遺書を――この手紙を書こうと思い立ったのです。 きません。もちろん安全対策は十分にしますが、やはりまだ科学的にも未知のことが多い分野 あなたも知っていると思いますが、私のライフワークは暴走ロボットの研究の他に、もう一 それと、これはアイリスにお礼。

つあります。それは、行き倒れになったロボットを助ける仕事です。 これは、あなたに出会ってから始めたことです。以前の私は、行き倒れのロボットを見ても

素通りしていました。妹を事故で失ってからはなおさら仕事以外ではロボットに近寄らないよ

うにしていました。

ロボットを見つけると、どうしても、あなたに会ったときのことを思い出してしまうのです。 でも、あなたといっしょに暮らすようになってから、私は変わりました。街中で倒れている

だから助けずにはいられなくなるのです。

それが、あなたに出会って、あなたに救われた、私の生き方です。

あなたの体は、残念ですがもうそれほど長くは持たないはずです。皮膚に浮かび上がるアザ 髪しいアイリス。私から、ささやかだけど、プレゼントがあります。

今の体をスペアと交換してください。あなたが長く、幸せに暮らしていくことが、私にとって や傷痕は、これからますますひどくなっていくと思います。 だからそのときのために、あなたには『スペア』の体を用意しました。いざというときには、

エルを頼ってください。 彼は信頼できる人です。彼ならきっとあなたの力になってくれるはずです。

その他にも、修理やメンテナンスなど、何か分からないことがあったら、同僚のラルフ・シ

一番の望みです。

今、こうしている間も、しとしとと雨が降っています。

そうそう、あなたは私のことを、女神像に似てるってよく言ってましたね。 あの雨の日に、アイリス、あなたに出会えたことを、私は女神様の導きだと思っています。 あなたと初めて出会ったのも、寒さが染み入るような、こんな雨の日でした。

280

今度、二人でいたずらしてみましょうか。女神像の首に、シガレットケースをぶらさげてみ あの女神像にシガレットを吸わせてみたら、きっと面白いでしょう。

たり、とか。でもバチがあたるかな。これって非科学的?

明日は、あなたと映画を見に行く予定です。ホラー映画だから、あなたはきっと大騒ぎする なんか、涙がたくさん出てきて、ずいぶんと手紙が濡れてしまってごめんなさい。 それでは、このくらいで。

でしょう。フフフ、楽しみ。 あと、最後にどうしても、一言だけ。

アイリス、私はあなたのことが大好きです。

ウェンディ・フォウ・アンヴレラ

○ラルフ・シエルの再起動実験

三ヶ月前のあの日、ラルフはこの少女に電話で訃報を知らせた。それが今は、ひどく昔のこ 寝台に横たわった少女の美しい肢体を見つめ、ラルフはひとつ、息を吐いた。 長かったな。

とのように思える。

精神 回路を先日やっと取り戻すことができた。 めに彼は長期休 暇を取って必死に駆け回った。その甲斐あって、ロボットの命ともいうべき 彼は疲れた体に鞭打ち、最終チェックを済ませる。それから電力を供給するスイッチを入れ 実験室の隅にある透明のケースには、頭部と右腕だけのロボットの残骸。これを回収するた

ラルフはその様子をじっと見つめる。

ぎくん、と少女の白い胸が大きく持ち上がり、また元に戻る。

――やはり、あの人は天才だ。

に精緻に造られている。人工皮膚が自然に赤く染まる仕掛け一つを取っても、現代ロボット工 少女の白い頬に少しずつ赤みが差していく。こういう細部に至るまで、このロボットは本当

やがて、少女からかすかに声が聞こえた。「ん……」

亡きアンヴレラの影を見てしまう。このロボットは彼女の妹をモデルにしているのだから、そ なスカイブルーの瞳が光を宿す。色は違っても、その深い色合いの瞳に、ラルフはどうしても ラルフは椅子から立ち上がり、寝台に近づく。少女の瞼がゆっくりと開かれ、透き通るよう

手の届かない高嶺の花であった。それゆえに、彼女から実験助手に抜擢されたときは、人生の なかったころに初めて彼女に会ったときから、アンヴレラという女性は師であり、憧れであり、 彼女が亡くなって改めて思い知らされた。ラルフが十五歳で研究所に入り、まだ見習いにすぎ れは当然といえば当然かもしれない。 自分にとって、アンヴレラという女性の存在がどれほど大きかったか。そのことをラルフは

からだ。彼女の瞳にずっと映っていたのは、この少女――認識番号HRM021‐aだった。 った。それは彼女の琥珀色の瞳に自分など映っていないことを、彼自身が一番よく知っていた はか……せ?」 しかし、ラルフは彼女に好意を寄せながらも、結局自分の想いを告げることはとうとうなか

すべてが薔薇色に輝き、神の存在を信じたものだ。

少女は冷たい寝台の上で、静かにつぶやいた。

ら尊敬していた。だから博士が愛したこの少女も、見捨てることなどできなかった。 う自問自答する。でも答えは決まっている。ラルフはアンヴレラ博士を愛していた。心の底か 今さらこの少女を蘇らせたところで、自分にとって何の意味があるんだろう? ラルフはそ

「分かりますか?」 少女はふっくらした桃色の唇をゆっくり動かし「はい……」と小さな声で答えた。ラルフは ラルフは静かに、穏やかな声で尋ねる。

待っててくださいね」 そのつややかな響きの声を聞き、やっぱりアンブレラ博士に似ている、と思った。 「まだ動作制御回路の起動中なんです。三十分もすれば動けるようになりますから、あと少し 少女は一回だけ瞬きをして、わずかに顎を下げてうなずいた。

「雨が……やんでる……」

そしてこうつぶやいた。

体を動かせるようになると、少女は寝台の上で上半身を起こし、質問した。

少女は青く深い瞳でラルフを見つめた。僕は……どうして、ここに?」

284 合いになっていた。嵐が過ぎたあとの青空のような美しい瞳だった。 ていることに。少女の職は、元の鮮やかな空色に、新たに力強い群青が加わって深みのある色 ラルフはそこであることに気づいた。以前会ったときと比べ、少女の瞳の色が微妙に変わっ

る栗色の髪、雪のような白い頰、スカイブルーの瞳。そこには十五歳の少女――アイリス・レ |まず、これをどうぞ| ラルフは少女に手鏡を渡した。少女は鏡を覗き込むと、とても驚いた顔をした。肩までかか

イン・アンヴレラの姿が映っていたからだ。 「では、いきさつを話しましょうか」

だ未完成だったらしく、封などはされていなかった。博士の死から三日後のことだった。 された膨大な資料や書籍の中に、彼は博士の『遺書』を見つけた。正確には遺書の草稿で、ま くりと説明し出した。 アンヴレラ博士が亡くなったあと、ラルフは博士の遺品整理を任された。そして研究所に残 そう言ってラルフは少女の枕、元に椅子を置いた。それから、ここに至るまでの経緯をゆっ

思わず、まったくの不意打ちだった。 ト管理局の役人に連れていかれたあとだった。彼自身、まさかこんなに早く管理局が動くとは 彼は改めてアイリスのことが気になり、アンヴレラ邸に連絡をしたが、すでに彼女はロボッ

わったのは、博士がアイリスの体の『スペア』を準備していたからだった。 見つかり、なぜかシガレットケースを女神像に捧げていた――という情報が、知り合いの新聞 て――廃棄処分名目ではあったが、管理局からロボットの残骸を引き取ることができた。シガ た。その後、彼の熱心な説得が功を奏し――といっても一定額の金銭の支払いが決め手となっ 記者カレン・クラウディから寄せられたのである。 は、博士が亡くなって三ヶ月もしたころだった。ヴィーナス噴水広場で行き倒れのロボットが か彼にアイリスの情報を渡さなかった。結局、スクラップになったアイリスに彼が追いつくこ レットケース内に貼られていた博士とアイリスの写真を見つけて、ラルフの直感は確信に変わ 「……それで、これがアンヴレラ博士の遺書です」 ラルフはアイリスに、水色の封筒に入った一通の手紙を差し出した。彼女は震える手でその こうして彼は、ようやくアイリスの体を取り戻すことができたのだった。修理が短期間で終 博士の遺書の内容を思い出し、直感的に何かを悟ったラルフは、そのロボットの行方を追っ ラルフはすぐにアイリスの行方を追った。しかし、ロボット管理局は守秘義務を盾になかな いったんはアイリスのことをあきらめかけたラルフに、その奇妙な情報が飛び込んできたの

286

有はまだ法的に認められていないので、ウチが――オーヴァル大学第一ロボティクス研究所が 「……アンヴレラ博士の遺産に関しては、すべてあなたのものです。ただ、ロボットの財産所 わずかに時間をおいてから、ラルフは説明を再開した。

管理することになります。それで……」 彼の説明に、アイリスはひたすら黙ってうなずいていた。

家の粒が落ちていた。涙に濡れた彼女のスカイブルーの瞳を見て、なんて美しいんだろう、と ラルフは思った。 すでに、彼女の顔は泣きはらしてぐずぐずになっており、手の中の遺書にはひっきりなしに

「そうだ、ちょっと待っててください」

必要な説明を一通り終えると、ラルフはいったん席を立った。

うな薄い布地一枚だけの姿で壁際に立っていた。彼女の前にはおよそ一メートル四方の透明な ケースがあり、その中にはロボットの残骸――彼女の『前の体』が安置されていた。頭部と右 五分ほどして彼が戻ってくると、アイリスはペッドから下り、白いカーテンを巻きつけたよ

腕しかない、廃棄寸前の鉄クズのような体。 |触っても……よろしいでしょうか?」 彼女は遠慮がちにラルフに尋ねた。「ええ、もちろん」とラルフはスイッチを押して透明な

たりを撫でていた。それから体を曲げてロボットの残骸を優しく抱き、こうつぶやいた。 アイリスはしばらく、まるで眠りについたわが子を慈しむように、そっとロボットの頬のあ

|おつかれさま……」

涙が彼女の白い頰をつたい、ロボットの胸に落ちた。

か現実離れしていて、胸をしめつける哀情に満ちた不思議な情景だった。三年前にアンヴレラ ラルフはその姿を静かに見つめていた。ロボットの残骸を抱きしめて泣く少女の姿は、どこ

博士がこの少女を――HRMO21-aを修理しようと抱き上げたときも、きっとこんな感じ

から、ラルフは尋ねた。 だったのではないだろうか。 ロボットを抱きしめていた両腕を、アイリスが別れを惜しむようにゆっくり解くのを待って

「それで……さっき取りに行ったのは、これなんですが」

彼の手には、機械油で真っ黒に汚れたカードケースが握られていた。

「このカードケースが、今触っていた『その体』の胸部に入ってましてね。中身は別名義のキ

その瞬間、アイリスの表情は急変した。

手に取り、すぐにケースの蓋を開けた。蓋の裏側には十二、三歳くらいの少女と、その両親ら しき男女の写真が貼られている。 スカイブルーの瞳が大きく見開かれたかと思うと、彼女はカードケースをひったくるように

唐突に、彼女は大声で叫んだ。そしてラルフの両肩を掴み、勢い余って口づけせんばかりに、

「僕を回収して、どれくらい経ちますか?」 「二週間……」アイリスはケースをギュッと握りしめたあと、意を決したように顔を上げた。 ラルフは面食らった顔のまま、「え……二週間、くらいでしょうか……」と答えた。

「僕、行ってきます!」

ラルフは呆然とその場に立ち尽くし、それから慌てて彼女を追いかけた。 そう叫ぶと、彼女は薄い布地一枚だけの姿で、ドアを勢いよく開けて走っていった。

僕は標足で走り出した。後ろからラルフさんが何か叫んだが、すでに聴覚感知範囲を超え

バッテリー残量は充分だ。手足の駆動機系統が若干ぎこちない感じがするが、かまってない。

---神様! ああ、神様 あれから二週間。 どいられない。

脚を動かす。着ているのが白い布切れ一枚だけどそんなことは気にしない。 ャストのタイムで疾走する。まるで愛しい博士を正門まで迎えに行くときみたいに、ひたすら 僕は祈った。博士そっくりの女神様に祈った。そしてとにかく走った。百メートルを九秒ジ 神様! ああ、神様!

を照合する。噴水広場までの排水溝、それを逆にたどれば、彼女のもとまでつながるはずだ。 やがて僕は商店街にたどり着く。「あれ、アイリスちゃん?」といつもの魚屋さんが驚いた 僕は走りながら、データベース内の市内地図を検索する。すばやく記憶データと地図データ そして彼女のいる場所も近い。

研究所からアンヴレラ邸までは近い。女神像のある噴水広場も近い。

顔。僕はにっこり笑って手を振り、走り続ける。

供、愛を語らう恋人たち。僕の大好きな光景だ。その先にはジャンク店の跡地。思えば二週間 あの女神像がだんだんと見えてくる。周囲のベンチには談笑するお年寄り、はしゃぎ回る子

前は、ここでバッテリーが切れたんだ。でも今は大丈夫。角を曲がって、さらに走って、住

宅街を抜けて――。 そして僕は、ついに「あの家」にたどり着いた。

恐る恐る、探した。 敷地に入ると、玄関先には何かを引きずったような溝が残っていた。これは僕のつけた跡。 それから僕は、膝をつき、這いつくばるようにして茂みの中を探した。 玄関から裏庭に入ると、あちこちに引きちぎられたチューブが転がっていた。これは僕の体。

ああ、神様、ありがとう。

|リリス……|

そこには、眠るように目を閉じた少女が、あのときの姿のままで、僕を待っていた。

○アイリス・レイン・アンヴレラの手紙

だから僕も、博士に手紙を書きます。 博士は僕に手紙を書いてくれました。

まず、いま一番嬉しいことを書きます。 もっとも、書いているのは「特別講義」のノートですけどね。

庭の茂みで彼女を見つけたとき、僕はどんなに安堵したことでしょう。 おしゃべりで、勇気があって、とっても頼りになる、僕の親友です。 あ、リリスというのは、僕の新しい友人です。 先週のことですが、リリスが目を覚ましました。

彼女の髪が金色であることを、僕はこの体に戻って初めて知りました。それまで僕の視界は これも女神様のお導きでしょうか? それとも博士のお力ですか?

201

```
モノクロでしたから。
金髪のリリスは一段とかわいいです。でも、まだメイド服を着るのは嫌がります。絶対似合
```

僕にはリリスの他に、もうひとり友人が出来たんです。

ラルフさんのはからいで、ひとかけらの黒い破片を、手に入れることができました。 彼は、僕とリリスを守るために、軍隊と戦い、そして亡くなりました。 ボルコフという名前です。

ボルコフのかけらは今も、リリスが大切に胸の奥にしまっています。

研究所に調査資料として送られてきていた、ボルコフの体の一部です。

分のやりたいことが見えてくるようになりました。 博士は、『三流魔神ウェザー・ダーク』という児童文学をご存知ですか。 でも、外の世界に出て、働いて、リリスとボルコフに出会って、まだぼんやりとだけど、自 僕は博士を失ってから、いったんは自分の生き方が分からなくなりました。

理費やバッテリー代にします。 です。そして、みんなで協力して、働きに出て、お金を稼ぐんです。稼いだお金はみんなの修 くなったり、工事現場で仕事がなくなったりしたロボットを、あの屋敷で引き取ろうと思うん ボットの『駆け込み寺』です。ご主人様を失ったり、家族から捨てられたり、戦争で使われな なった魔法のアイテムたちに新しい『居場所』を作ることで、彼女は亡きダークの想いを受け がそうしていたように、壊れた魔法のアイテムを集めて、それを修理するんです。魔力が弱く ます。でも、彼女は悲しみから立ち直ったときに、新しいことに挑戦します。かつてダーク しいところが。ダークは最後に、フラウ・スノウに新しい指輪を贈りました。博士も僕に新し アイテムを巡るトラブルを描いた物語です。 継ぎ、それが彼女の新しい生き方となったのです。 い体をプレゼントしてくれました。 ラルフさんはこのアイデアに賛成してくれました。休みには修理やメンテナンスにつきあっ だから僕も、彼女みたいにそういう『居場所』を作りたいと思いました。一言で言うと、ロ 優しい魔神は最終巻を待たずして亡くなり、フラウは彼を失った悲しみでしばらく泣き続け ああ、そうそう。ダークは博士にちょっと似ています。一見クールだけど、実はとっても優な これは不真面目な魔神ダークと、彼の教育係である魔法の指輪フラウ・スノウとの、魔法の。

てくれるそうです。あの人、すごくいい人ですね。

リリスにこの『ロボット駆け込み寺』のアイデアを話したら、開口一番、キリがないからや

け石に水だ、お金の無駄だ、と。 でも、この駆け込み寺の広告を出して、三日も経たないうちに二十八番と五十五番が――あ、

めておきなさい、と言われました。廃棄ロボットは毎年何万台、何十万台と出るのだから、焼

えっと、この番号は前の職場の同僚のことなんですけど、彼らがアンヴレラ邸に電話をしてき し、昨日は全然知らないロボットがアンヴレラ邸に直接やってきました。こうなったら彼らを ました。電話を受けたリリスが一番驚いていました。一昨日も八十六番から連絡がありました

とことんコキ使おう、というのがリリスの今の方針です。工事現場でお金を稼ぐコツを一から

徹底的に仕込むそうです。

博士。すこしだけ、今でも気になっていることがあります。 なんだかとっても忙しくなりそうです。

なロボットのことです。 彼はなぜ、暴れたのでしょうか。 リリスに教えてもらったことですが、名前をライトニング・オー・ミリバールといいます。

あのジャンク屋のロボット、覚えていますか。ニュースにもなった、噴水広場で暴れた大き

僕はどうしても気になって、あとで商店街の方に訊いたら、いつもの八百屋さんがこんなこ

とを教えてくれました。 あのジャンク屋では、ご主人が、暴走の数日前に亡くなっていたそうです。そしてロボット

とご主人は、とても仲がよかったそうです。

だから、と推論を進めるのは、性急にすぎるかもしれません。それでも僕は思うのです。 博士は言ってましたよね。あのロボットは幻覚を見ていたんじゃないかって。

きっと、あのとき彼が広場に向かったのは、そのご主人のことを追いかけたからじゃないか

寂しくて、切なくて、胸が締めつけられます。この手紙を書いてる今だって、けっこう手が震 ご主人を失った彼の気持ち、僕には痛いほど分かります。今でも博士のことを思い出すと、

リリスが階下から、僕を呼んでいます。今日は彼女と映画を見に行く予定です。帰りには本 では博士。そろそろこの手紙もおしまいです。 えてるんですからね。

屋さんに寄って、魔神ダークの最終巻を買ってこようと思います。

また、書きますね。 だから今日はこのへんで。

あなたのアイリスより

296

博士、博士

見てください、窓の外を!

なんて、なんてきれいな青空なんでしょう……。 僕はこんなふうに、あったかくて、よく晴れた日が大好きです。

どうしてって?

僕、雨の日だってけっこう好きなんですよ。

でもね博士。

ウフフ、そんなの決まってるじゃないですか。

だって、あの雨の日に、大好きな博士と出会えたんですから。



はじめまして、松山剛と申します。

新刊となります。何とぞよろしくお願いいたします。 この『雨の日のアイリス』は、第十七回電撃小説大賞の四次選考作品で、私にとって久々の

働』を意味する『robota(ロボータ)』が語源だそうです。人間のやりたがらない労働 ての存在――私が『ロボット』という言葉から想像するイメージはそういうものです。このロ を肩代わりする存在としてのロボット。血の通わぬ、痛みを感じぬ、物言わぬ便利な道具とし 本作はロボットが主人公です。そもそも『ロボット』という言葉は、チェコ語で『強制労

うにか自分なりに仕上げてみました。 ボットを、もっと『人間らしい存在』として書いてみたら面白いだろうな……と思い立ち、ど というわけで、今回はロボット視点の物語となりました。いささか大仰な言い方になります

が、『破壞と再生』をテーマにして、全体を構成してみたつもりです。変形する巨大ロボもカ トたちの生きる姿を通じて、皆様の胸に何がしかの感情を喚起できれば幸いです。 ッコイイ合体シーンも出てきませんが(何よりうまく書けているか甚だ不安ですが)、ロボッ

この本は多くの方々のおかげで世に出すことができました。

す。また、原稿を丹念にチェックしてくださった校園様。装丁を担当してくださったデザイナ 素敵なイラストをありがとうございます。最初にいただいたラフは今も机の前に貼っておりま らお電話をいただいたときは本当に嬉しかったです。そしてイラストレーターのヒラサト様、 編集部の徳田様と土屋様。改稿に際してはたいへんお世話になりました。昨年秋に編集部か

-様。アスキー・メディアワークスの皆様。まことにありがとうございました。

くれる家族とご親戚の皆様。本当にありがとうございます。こうやって何とか書き続けてこら るK先輩、高校時代から世話になりっぱなしのS氏とY氏、まっさきに出版祝いをしてくれた N氏とT氏、職場の皆様、中学・高校・大学の同級生・諸先輩方、いつもあたたかく見守って そして、アイリスの最初の読者であるSご夫妻、いつも際どいオタク情報を提供してくださ

として望外の喜びです。 雨が降った日に、「そういやこんな作品もあったな……」なんて思い出していただけたら著者 れたのも皆様のおかげです。 そして今、この本を手に取って下さっている読者の皆様。心の底からありがとうございます。

上げてくれた、亡き友・荒井動君に捧げます。 この本を、高校時代からのすばらしい友人で、ちょっと照れ屋で、いつも宴会を楽しく盛り 本書に対するご意見、ご感想をお寄せくだ

.

あて先 〒160-8326 東京都新宿区西新宿 4-34-7 アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「松山 剛先生」係 「ヒラサト先生」係

あめ 雨の日のアイリス

松山 剛

襲版印刷株式会社 (META + MANIERA)

人されている場合はお取り替えできません

高野

作式会社アスキー・メディアワークス 式会社角川グループパブリ 路〇三人ハハハー七三二 一六〇-八三二六 東京都新宿区西新宿四-三十

二〇二一年五月十日 初版発行

© 2011 TAKESHI MATSUYAMA Printed in Japan ISBN978-4-04-870530-1 C0193

į

〇二一八一七七 東京都千代田区第七見

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れ のなかで *小さな巨人*としての地位を築いてきた。 古今東西の名著を、康価で手に入りやすい形で提供 してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、ま た音森の規い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求 めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブック スに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化 に従って、ますますその意義を大きくしていると言 ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、 歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新し い世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮 で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじ めて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書 人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉 時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、 精神の概として、心の一層を占めるものとして、次 なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られ ると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

> 1993年6月10日 角川原彦

なれる!SE4
プロジェクト管理 なれる!SE2基礎から学ぶ?運用構築 なれる!SE2週間でわかる?SE入門 なれる!SE3 失敗しない?提案活動 雨の日のアイリス 夏海公司 夏海公司 松山田 イラスト/IXy イラスト/IXy イラスト/ヒラサト イラスト/ Ixy 显海公司 ISBN978-4-04-870181-5 | 葉ばかり。はたして勝算はあるのかり ISBN978-4-04-870530-1 ISBN978-4-04-870528-8 ISBN 978-4-04-868937-3 ISBN 978-4-04-868605-1 運用の不供戴天の戦いがはじまる! とある出版社の本社移転のプロジェクト とある企業から出入り禁止処分を喰らった 年齢不詳のかわいい女の子なのです。 な3Kと戦うシステムエンジニアの過酷 きつい! 厳しい! 帰れない! そして出会いと別れの物語である……。 アイリス。これは「彼女」の精神国路 ここにロボットの残骸がある。登録名 マネージャーを無茶振りされた工兵。 から抽出されて分かったその数奇な運命 3期限、ごねるペンダー各社を前に 8日々を描く問題作。でも、ヒロインは 携帯HPGのインフラをめぐって構築と

イスカリオテ	電撃文庫						
1538/973-4-04-80734-2	イスカリオテVョ田城イラスト/洋和田ロビン	イスカリオテア	イスカリオテエ	イスカリオテエ	イスカリオテョ田はイスカリオテ		
人間の表現を対象に対象に対象を対象を表して、自然を表して、対象を表して、自然を表して、対象を表して、ままして、対象を表して、ままして、対象を表して、ままして、ままして、ままして、ままして、ままして、ままして、ままして、ま	ISBN978-4-04-868544-3	ISBN978-4-04-868205-3		ISBN978-4-04-867594-9	ISBN978-4-04-867348-8		
二成型 く相当 ジュは、 なまをして 競が ア克う なは、 なまを	なすアイロニッ のの男の脅威が ス賑やかな空気	・ できずいます。それでれる節と使いを持くアする玻璃。それでれる節と使いを描えていたち、そして裏の人格と相応がまる状況。それを辿う一番は乗り、それを辿う一番は乗り、これを辿っていた。	り。は、	りなま すをする	セカイを騙すため、		
\$-10-9 1944 \$-10-8 1874 \$-10-7 1799 \$-10-6 1733 \$-10-5 168:	き-10-9 1944	*-10-8 1874	き-10-7 1799	ĕ-10-6 1733	き-10-5 1682		

	電撃文庫					
100.000	煉獄姫 三幕	煉獄姫二幕	煉獄姫 乗 Hi イラスト kayaB	イスカリオテゾ	イスカリオテゾニ田版	
-	ISBN978-4-04-870488-5	ISBN978-4-04-870236-2	ISBN 978-4-04-868772-0	ISBN978-4-04-870529-5	ISBN978-4-04-870128-0	
The second secon	である恵国王子が外交のため来訪する。 である恵国王子が外交のため来訪する。 フォグとアルトは彼らの警護役に任命されるが。	の人間たちが傷帯に裏き、そして――。 の人間たちが傷帯に裏さ、そして――。 教人御勘を抱えて彷徨う音年。 アルトの教人御勘を抱えて彷徨う音年。 アルトの	同時に王家直属の殺し屋として――。 下に顧問されている。呪われた子として、 下に顧問されている。呪われた子として、	アイロニック・アクション、完新! は、そして残された者たちの決意とは。 アイロニック・アクション、完新!	再び相まみえるイザヤと斎馬。自分の気 神ちを自覚したノウェム。それぞれの観 持ちを自覚したノウェム。それぞれの観 がヤの正体とは――?	

3-7-24 2066 3-7-22 1995

8-10-11 2130 8-10-10 2056

.3-7-25 2131

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑤ 俺の妹がこんなに可愛いわけがない④ 俺の妹がこんなに可愛いわけがない③ 俺の妹がこんなに可愛いわけがない② 俺の妹がこんなに可愛いわけがない 伏見つかさ 伏見つかさ 伏見つかさ 伏見つかさ 伏見つかさ イラスト/かんざきひろ イラスト/かんざきひろ イラスト/かんざきひろ イラスト/かんざきひろ イラスト/かんざきひろ ISBN978-4-04-867934-3 | 桐乃の "最後の人生相談。とは――? ISBN978-4-04-867758-5 ISBN978-4-04-867426-3 | なんたらとかいう祭りがあるらしく…… ISBN978-4-04-867180-4 ンデモない "人生相談" をされ……" ISBN978-4-04-868271-8 ドラマチックコメディ、 近々作家デビューすることに……っ 乃の書いた 「ケータイ小説」が絶賛されて は、「夏の想い出」作り。 とうも都内某所で しくなんかないけどな。 俺のもとから旅立った桐乃。……別に寝 念パーティに紹かれた京介。そこには何 沙織が開いた桐乃のケータイ小規発売記 と黒猫。ところが何を間違ったのか、 お互いの書いた小説で口論になった桐乃 怒らせた京介に下った指令 (人生相談) ト 責任とりなさい!」とある理由で桐乃を キレイな躰がいても、 吸かメイド姿の桐乃がいて……。そして つもない」妹・桐乃と冷吸状態にあっ ある日突然、桐乃からト いいことなんで 、先の読めない

れでい×ばと!② れでい×ばと! 俺の妹がこんなに可愛いわけがない® 俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑦ 俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑥ 上月 イラスト」むにゅう 上月司 イラスト
かんざきひろ 伏見つかさ イラスト/かんざきひろ 伏見つかさ 伏見つかさ イラスト/むにゅう イラスト/かんざきひろ ISBN978-4-04-870052-8 | ドラマチックコメディ第7弾= ISBN978-+-04-868538-2 | 思いきや……沙橇の様子がおかしいり ISBN978-4-8402-3687-ISBN4-8402-3559-7 妹の関係にも、 見た目小学生な先輩が胸に秘める悩みと 7.....? シリーズ最大級の山場(?)を迎える の(?)騒々しい日常が戻ってきたかと の赤城とアキバ遊りをしたりと、いつも イドさんまみれな日々をお楽しみあれ も実はビビリ)な日野秋晴のお嬢様&メ は……? 執事を目指す、見た目極悪(で そんな彼が編入したのは、執事さんやこ 見た目は極悪不良な高校生、日野秋晴 に秘められた少女の "願い" とは? 迎えた恋覚模様。 私と付き合ってくたさい」新たな局面を 桐乃の思わぬ"告由』に、京介は――? |---あんた、あたしの彼氏になってよ あやせから新たな相談を受けたり、友人 7ドさんを本気で育てる専科だったり-一大転機が訪れる





グラビアパート

原作&アニメ技権の美麗イラストをはじめ、N°s (能登無美子×後藤麻衣×清水香里×輸出住祭 ×佐藤利奈)のグラビアインタビューなど、大増 聖ページ数で限るビジュアルコーナー。春香の魅 力本たつぶりご増能ください。

71-11-16-1

原作小説の全話を徹底解説! ストーリーの中 に秘められた設定や丸秘エピソードなどもコラ

ムで大紹介! キャラクターバート

級作版とアニメ版の両方のビジュアルをふんだ んに使用し、「乃木坂春香」の世界を彩る版やか なキャラクターたちを徴底紹介! いまだ世に 出たことのない設定園などもお目見えしちゃう

メディアミックスバート_///

TVアニメ第2期のレビュー&第1期のストーリー 紹介、ゲームやコミック、グッズ化などなど、春香 のメディアミックスの全てを講賞!

スペシャルバート

①五十嵐雄策インタビュー

原作者の五十嵐雄策氏が、気になる20の質問に 答えてれました! 原作圏生&制作の秘話が

②美夏ちゃん編集長が行く、出張版! ゴマちゃこと後藤麻衣さんが大活躍した「電 フェス2009」を、ゴマちゃん様点で完全レポート! メインステージや公開録音の服制だけでなく、金県内を見学した根様本収録!!

③しゃあ指き下ろし、ちょっとえっちな絵本 しゃある五十萬 延束の両氏が指き下ろした、 ちょっとえっちな美夏の絵本を本邦初公開! ちびっこメイドのアリスー。12

ガス木坂春



『乃木坂春香ガ全テ』 電撃文庫編集部編 定価:1,880円(税込) 85利/178ページ 納替発売中 イラスト/しゃあ

中 イラスト/しゃあ 用金額は核み(5%)です。

好評発売中! イラストで魅せるバカ騒ぎ! エナミカツミ画集

「バッカーノ!」

体裁:A4変形・ハードカバー・112ページ 定価:2,940円(税込)

人気イラストレーター・エナミカツミの、待望の初画集がついに登場! 「バッカーノ!」のイラストはもちろんその他の文庫、ゲームのイラストまでを多数掲載 そしてエナミカツミ&成田良悟ダブル描き下ろしも収録の永久保存経!



注目のコンテンツはこちら!

BACCANO!

「バッカーノ!」シリーズのイラストを大 ボリューム特別掲載。

「ヴぁんぶ!」をはじめ、電撃文庫の人

WOTHER NOVELS

ゲームやその他文庫など、幅広い活躍の一部を収録。

名作劇場 ばつかーの! チェスワフぼうやと(ビルの) 森の仲間達

豪華描きおろしで贈る「バッカーノ!」 のスペシャル絵本! ※宇衛は辞込がいアナ.

BACCANO



自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。 受賞作品は「衝撃文庫 | 「メディアワークス文庫 | からデビュー!

ト遠野法字(『ブギーボップは学わない』)、高橋な七郎(『均限のシャナ』)、成田良 悟(『パッカーノ」」)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川 浩・徒花スクモ(『図書館戦 争」)、川原 礫(『アクセル・ワールド』)など、常に時代の一線を疾るクリエイターを 生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中!!!

雷撃小説大賞・雷撃イラスト大賞

●當(共涌) 金賞……正賞+副賞 50万円

銀賞………正賞+副賞 30万円

メディアワークス文庫賞 (小説賞のみ) 正賞+副賞 50万円

雷撃文庫MAGAZINF賞 正賞+副賞 20万円

集部から選評をお送りし 小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を

通過した人会員に選擇をお送りします!

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。 http://ascijmw.jp/award/tajsvo/

主使 れず会計アフェー・メディアワークス